いかにせんたのむかたとて立ちよれば
　　又袖ぬらす松の下露。

とお詠み遊ばされた。松の木の下、ここがより場と思うて身を寄せると、松の露がはらはらと落ちて又袖をぬらす、天下どこも身のより場がない、とお歎きになつたのであります。ここが據場と思うてよつたところがみな虧けてゆく。ちやからさういふ相をみて「いざ往なん、魔境止るべからず。」です。どこも據場がないのです。親子というても別れ別れ、夫婦というても別れ別れになるのです。

先日菊永から竹迫の方に行つた時、菊永では夕方村の人達と公園に行つて燒酎を飲んで食うたり躍つたりした。その時の歌が耳に入つた。「お前百までわしや九十九まで共に白髪の生えるまで。」と歌うてをつた。あれは昔からある歌だが、ふつとあの時感じた。諦のよい歌だ、「お前百までわしや九十九まで、」あれで諦めたのならやはり人間の作つた歌だね、百までいつたつて人間は足らん、それできりをつけるのだから諦めがよい。千までいつても足らん。私の村に八十八の婆さんが死んだときに九十の爺さんが「中途の別はつらいもんだ。」と云うた。若い者は「あの爺さんはあの年で中途の別と云うてをる、をかしい。」と云うて笑うてをつた。が、百までいつても中途の別だ。「お前そんなに長いこと一緒にをつて中途の別やなんてをかしい。」と云うたら「お前、十年位一緒にをつてさへ別はつらいもんやに、わしら長いこと一緒にをつたから尙つらい。」と云うたさうである。夫婦が年寄つて、お前は百まで、わしは九十九まで、と云うてをつても、爺さんが百で死んで、自分が命が延びたら困る。人間は夫婦でもいつか中途の別をせにやならん。親子でもさうです。財産もさうだ。體力もさうだ。地位もさうだ。この別院の庫裡の普請がされてをる、私も家を建てたことはあるが、建ててをるうちに、こんなにしてここに何年をられるものかなと思うたら妙な氣がした。家を建てて十年二十年をる者は少い。世話をやいた者も、建てた者も皆その中にころころと逝く。やはり終の據所でない。「人の子は寢るに家無し。」と云ふが、本當にさうです。據所はないのです。歸する所はないのです。安らかな歸する所はないのです。

今日の日本の思想上の悶といふのは歸するところがないからです。どこに據つてよいやらわからぬ。これは昨日も申しますやうに、すべての尊いもの、神樣も佛樣もいらんものだ、世の中に尊いものはないのだ、皆獸類だ、皆動物の仲間だ、と何でもかでもこけ下す。非常に淋しい冷かな世界です。だから世の中は暗いじめじめしたものに見えて、明かなところがないやうになつたのです。據場がなくなつたのです。さういふところから社會上における無政府主義或は虛無主義

といふやうな思想が現れたのであります。その無政府主義・虚無主義にをられんやうになつて、一段進んだのが共産主義です。しかしその主義も徹底した主義でない。そこに一旦は腰を据ゑられるかもしれんが、あの破壊的動作には安住はない。かういふ手段によつて皆が打融けた和の世界がほしいのです。だから終極は和です。いくら危険な運動をする人でも、それが終極ではない。終極は和であると云はないものはない。「人の子は寢るに家無し。」と云うたのは、まだ本當の終極にまで至つてをらんのです。

聖德太子は佛・法・僧の三寶は終歸とおつしやつた。佛は自覺者、法は天地の大道理或は大道・天意、僧は自覺者たらんと望み、天道をゆかんと望む人です。この佛・法・僧の三寶まで來にや人間の本當の落着はないのであります。それで、佛教から云へば、自覺者にならにや本當の安堵するところはない、佛が最後の據場である。賴場であります。「ただ賴むべきは阿彌陀如來」と云はれるのはその心であります。さういふことから云へば大道理といふことより外にない。さういふことになると、皆と一緒にゆくといふより外にない。かういふ點から云ふと、共産主義・社會主義といふことは僧寶のやうな香はある。この頃の科學的の精神に基いて云へばさういふ香はあるのです。命がけでその運動に前進するといふところに佛といふ香はある。それが中途に停つてをるのです。行くところまで行きつかないのが今日の所謂我々が見ても破壞的な危險思想と云はれるものになつてをるやうであります。だからあれがもう一歩徹底的に考へぬけば聖德太子の示された道まで出られるのであります。

親鸞聖人は阿彌陀佛のことを「畢竟依」とおつしやつた。御和讃には「畢竟依を歸命せよ。」とあります。これは、佛・法・僧の三寶は「四生之終歸」とおつしやつた聖德太子のお心と同じお味であります。親鸞聖人は曇鸞大師の『讃阿彌陀佛偈』のお心に隨うて、阿彌陀佛のことを畢竟依とおつしやつたのです。畢竟依とは、終歸といふと同じことです。親鸞聖人は歸の字に、「よりかかるなり、よりたのむなり、」といふ註釋を下さいました。「願ふべきは安養の淨土、賴むべきは阿彌陀如來なり。」とおつしやるのは、これに限るとおつしやるのです。「四生之終歸」生きとし生けるものは佛・法・僧の三寶を敬ふより外に心の行き場がないといふことをおつしやつたのであります。

萬國之極宗なり。

萬國、萬國です。聖德太子は大きい。支那・朝鮮・印度・アメリカ・ロシヤ、どこの國でも人間の寄つてをるところのものの極宗なり。極は極である。宗は前に云うたやうに大切な宗でありま

す。二つに分けたら極も宗も徹底です。底の底まで極めたのです。果の果まで極めたのです。「宗なり。」宗は宗です、宗教の宗です。やはりこの胸です。第一條には「和を以て貴しと爲し忤ふことなきを宗と爲す。」とあつたその宗は個人としての宗、これは萬國の宗です。國には人間がたくさんをります。個人としては忤ふことのないのが宗、國としての宗は佛・法・僧の三寶だ。三寶に歸することは、國の命であり宗である。どこの國だつてこれがなければならぬ。ソビエットの國では宗教は麻醉劑だと云うてをります。丁度私が昭和二年にモスコーに行つたとき町々に「宗教は人生の麻醉劑なり。」「宗教は阿片なり。」といふ訓示が出てをつた。その時に彼等が宗教といふのはキリスト教のことを云うてをるのである。何でさういふことを云はねばならぬか。ソビエットの革命をやつた人はロシヤの帝政をひつくりかへした。ロシヤは今までロシヤ皇帝の宗權のもとに專制をやつてをつた。それで皇帝即ち法王であつたのである。皇帝を主とするのキリスト教があつては彼等の運動に困る。だからかういふことを云ふのは當前である。無理はない。ロマノフ家を覆すためにかう云うたのは當然である。またフランス革命のときもかういふことがあつた。フランス革命は十八世紀、今から百五十年程前に起つた。その頃は、文藝復興の人間的な目覺め、ルーテルの宗教改革、ルッソーやボルテールなどの自由の思想などによつて、フランスの民衆の間に自由平等といふことが強く叫ばれた。そして壓制に苦しんでをつたフランスの民衆は傍若無人な我儘なルイ十四世を倒した。ブルボン家はひつくり返へされた。そして共和政治が布かれた。その時は宗教撲滅をやつたのです。その頃ルイ十四世はローマ法王の專制の臣として、宗教上の權利と政治上の權利とを一緒に握つて我儘を振舞うてをつたのです。王をひつくり返したとき、法王もひつくり返へさにやしつくりせぬので共和政府では國民教育にキリスト教を入れないことにした。

ところが日本では明治維新にそれを學んだ。德川幕府は佛教をもつて治國平天下の基礎にしてをつた。それがために佛教といふものの根が深く日本國民の間に下されてをつた。で、德川幕府を壞すと同時に排佛をもやつたのです。それで明治の初に革新の先鋒であつた薩摩などは一番先に寺を燒いた。そして佛教撲滅の烽をあげた。これは德川幕府を否定する餘波であつたのである。後に明治の國民教育はフランスの共和政府のとつた政策を學んで、教育には宗教を入れないといふことにきめた。從來の日本の國民教育は佛教の寺でなされてをつたのであります。明治以後は學校を立てて、國民教育と寺との關係を全然なくしてしまつた。教育と宗教とを離してしまつた。國民教育に宗教を入れなかつた。神道も佛教もキリスト教も入れなかつた。フランスに習

うた日本は國民教育に宗教を入れなかつたのです。イギリスもドイツも國民教育の中に宗教科がある。フランスはない。そのフランスに日本は習うた。そして數學やら地理やら歴史やら、讀み書きを習うた。西洋の個人主義を習うた。そして崇めるところのない、仰ぐところのない、宗のない人間がたくさん出來ました。あらゆる人間は風のやうにふわふわしてをる。手先の利いた人間が出來た。それが利いて汽車やら汽船やら飛行機は出來た。本家本元のヨーロッパが科學の弊害を受けて困つてをるやうに、日本も困つたのであります。

かくて近來はそれを覺つて、宗とするところがなければならんと云ふ聲が、日本の國を心配する人の間に高まつてきました。聖德太子はそのことを遠い昔に『十七條憲法』に書いておかれたのであります。その宗とするところは佛・法・僧の三寶である。三寶に歸するといふことは萬國の極宗だ。どこの國へ行つても佛・法・僧の三寶は寶だ。かう云はれるのであります。ここに味があります。普通に佛・法・僧と云へば印度の佛教だと思うてをります。歴史的の佛教ばかりを思うてをります。平田篤胤或は頼山陽といふやうな德川末期の國學者・漢學者は聖德太子を嫌ひます。聖德太子の『十七條憲法』は日本の國體を忘れて佛法に淫するものだといふやうなことを書いてをります。又聖德太子の憲法には、日本の神樣のことが書いてないと批難する人があります。ところが聖德太子の攝政してをられました推古天皇の十五年、『十七條憲法』が出てから三年目には、神社を崇めよ、神を祭れよといふ勅語が出てをります。又百官を率ゐて神社におまゐりしてお出になるのであります。昔からあまり『十七條憲法』を究めない人々は、『十七條憲法』には神樣のことはちつとも書いてないと批難します。しかし、第一條には天照大神の和魂を貴めといふことが書いてあるのであります。純粋に第一條は神ながらの道です。神道です。第二條で「篤く三寶を敬へ。」とおつしやる、これは佛教です。この精神で、『法華經』『勝鬘經』の講釋を朝廷であそばされました。かやうにして太子は朝廷で佛教の經典の講讃の先例を開かれたのであります。後に朝廷において『金光明經』『無量壽經』などの講釋がされました。聖德太子は政の根本として佛典の講釋をせられたのであります。

さて佛と云へば歴史的に云へば印度の釋迦です。が、もつと進んで云へば釋迦ばかりが佛陀でない。所謂印度の羅漢達、小乘佛教徒は、佛陀と云へば釋迦佛陀ばかりだと思うてをります。ところが發展した佛教、大乘佛教では、佛の數はガンヂス河の砂の數ほどをられると云うてをります。たくさん佛がをられるのです。この點から云へば佛樣は印度ばかりでない。支那・朝鮮・日本・イギリス・フランス・ドイツ、どこにでも佛はをられるのであります。又過去久遠劫の昔からをら

れるのです。阿彌陀佛といふ佛さんは、お釋迦樣よりもまだまだ昔、十劫の昔に佛になられたお方であります。十劫の昔になられた佛が初めかと云ふと、まだ昔にあります。親鸞聖人は御和讃の中で、

彌陀成佛のこのかたは
今に十劫を經たまへり
法身の光輪きはもなく
世の盲冥を照らすなり。

とおつしやつてあるかと思ふと、また別の御和讃に、

彌陀成佛のこのかたは
今に十劫と說きたれど
塵點久遠劫よりも
ひさしき佛と見えたまふ。

ともおつしやつてあるのであります。『無量壽經』には十劫の昔と云うてあるが、外のお經をみると、塵點劫の昔、十劫よりまだ昔と味うてをられます。それは眞宗などで、十劫の阿彌陀佛久遠の阿彌陀佛とやかましう云ふが同じことです。だが阿彌陀佛は今もまだ現れてをられます。十劫の阿彌陀佛、久遠の阿彌陀佛は同じ佛であるやうに、現在にも阿彌陀佛がある。阿彌陀佛は過去の阿彌陀佛でない。阿彌陀佛は十方衆生一人も殘らず助けると云うてをられます。だから印度に現れては阿彌陀佛はお釋迦樣に、日本に現れては聖德太子ともなられ、弘法樣ともなられ、法然樣ともなられ、親鸞樣ともなられた。支那に現れては曇鸞樣ともなられれば、善導樣ともなられた。かやうに無限に現れられます。我々のしらん佛樣もたくさんをられます。ガンヂス河の砂の數ほどたくさんをられるのです。印度や支那や日本ばかりでない。又釋迦佛の前からをられるのです。殊に阿彌陀佛のことを書いてある『無量壽經』には、阿彌陀佛は印度の佛であると書いてない。どこの國とも書いてない。阿彌陀佛の國籍はないのです。印度の建擧ちん先からをられる。塵點久遠劫の昔からをられます。釋迦佛陀はその佛の現れ給うた相であります。昨日は迹門の釋迦、本門の釋迦といふことについて話しましたが、迹門の佛陀は印度では釋迦佛陀、支那では曇鸞佛陀・善導佛陀などである。日本では聖德太子佛陀・法然佛陀・親鸞佛陀として現れ給ふ。が本門佛陀は宇宙に遍滿してをられます。日本・イギリス・ドイツ・フランス、どこにでもをられます。日本に印度の佛敎が渡來したのは欽明天皇の十三年である。しかし、日本にはその渡來以前から

佛教があつたのです。神代から佛教があつたのです。

聖德太子は、三寶とは佛・法・僧の三寶だと云はれた。それを國學者や漢學者は歷史上の三寶、住持の三寶とみるから、日本國が印度の國の奴隷、お釋迦樣の奴隷になるやうに思ふのです。聖德太子はお釋迦樣の敎によつて、歷史上の釋尊を超えた釋尊の上に萬國の佛を味はれたのであります。聖德太子がここに三寶を敬へとおつしやるのは、印度の釋迦佛陀でなしに、もつとそれを超えた、どこにでも誕生あらせられる佛陀であります。同じ釋迦でも、『阿含經』の釋迦は迹門の印度の釋迦です。『法華經』の釋迦は印度の釋迦で世界の釋迦であります。世界の釋迦は又『無量壽經』の釋迦であります。光明無量壽命無量の釋迦であります。さきも云ひますやうに、阿彌陀佛は印度の人ではない。これはよく聞いておいていただきたい。佛法を信じてをる人で阿彌陀佛は印度人だと思うてをる人があります。阿彌陀佛は印度人でない。日本人でない。西洋人でない。それではあのお相はどなたのお相か。あれは阿彌陀佛が印度に生れられたお相である。だからお釋迦樣に像つてある。親鸞聖人の御本尊は『觀無量壽經』の中に書いてある、韋提希夫人が牢屋の中でお釋迦樣が說法なさる中に拜まれた阿彌陀樣だから立つてお出になるのである。淨土宗の阿彌陀樣は坐像である。『無量壽經』の中の東方偈の中の世の中の中心になるお方であるからお坐りになつた形であります。

ところが妙なのは、眞宗では『大無量壽經』を主にして『觀無量壽經』や『阿彌陀經』を伴のお經とします。それだのに『觀無量壽經』の阿彌陀佛を拜みます。淨土宗は『觀無量壽經』を主にしてをるのに、『大無量壽經』の阿彌陀佛をかざつてをります。『大無量壽經』の阿彌陀佛は印度人でないからあでなくてもよいのです。印度のお釋迦樣から考へたから印度のお釋迦樣のやうなお相である。これは自然の勢です。支那人が考へれば支那人のやうなお顏になります。日本人が考へれば日本人のやうなお顏になります。ビルマの人が考へればビルマ人のやうなお顏になります。日本へきても天平時代の佛樣の顏、奈良朝時代の佛樣の顏、平安朝時代の佛樣の顏、源平時代の佛樣の顏、皆違ひます。佛樣の顏は時代によつて違ひます。それが本當です。お木像でも、その時その時代が背景になつてをります。御繪像でもさうです。變つてゆくのです。佛樣はいろいろのお相をなさるのです。

釋迦如來かくれましまして
二千餘年になりたまふ
正像の二時はをはりにき

如來の遺弟悲泣せよ。

親鸞聖人は『正像末和讃』にかうおつしやつたのは歴史上の釋迦です。印度のお釋迦樣を自分の背景として說かれたのです。本門の釋迦は萬國の宗です。それは彌陀敎です。印度に局限された佛敎でない。世界的の佛敎として親鸞聖人は阿彌陀佛を崇められる。だからこの佛陀は日本的なんです。さういふ精神から御立像を安置するのです。西方の淨土の佛樣にお値ひ出來ぬ。この娑婆世界に生れ出られた佛、印度の韋提希夫人が目のあたり人間世界で拜まれた佛をかざる、それはやがて私共が自分の前に現れた日本人をかざらにやならんのであります。さういふ精神で中央に印度のお釋迦樣に像つた阿彌陀樣をかざつてあるのであります。又右の方には日本の親鸞聖人をかざつてある。あれはやはり阿彌陀樣です。又左の方には御代樣・七高僧・聖德太子をかざつてあるが、皆阿彌陀樣です。聖德太子も阿彌陀樣、七高僧も阿彌陀樣、親鸞聖人も阿彌陀樣、御代樣も阿彌陀樣であります。或人が、眞宗は彌陀一佛と云うてをりながらいろんな方をかざつてをる。どうしたわけか、と云ひましたが、これは皆彌陀です。阿彌陀樣はいろいろに違うて現れるのです。三國に阿彌陀樣があるのです。そして在家の阿彌陀樣は聖德太子であります。だから誰に向うても南無阿彌陀佛と手を合す。これが彌陀一佛です。さういふ心で眞宗の者は神樣の前へ行つても南無阿彌陀佛、西鄕さんの前へ行つても南無阿彌陀佛、警察署の前へ行つても南無阿彌陀佛、どこへ行つても皆南無阿彌陀佛を稱へる、あれでよいのです。あれが一切に歸する心です。それが彌陀一佛です。それを阿彌陀樣と云ふと何か印度のもののやうに思ふ。これはとんでもない間違だ。この日本の平田篤胤や賴山陽は聖德太子の信ぜられる佛敎の眞髓を知らんのです。日本の本當を知らんのです。それらの人の云ふ佛敎は印度の佛敎です。聖德太子の佛敎は萬國の極宗と云はれる佛敎です。萬國の者が印度のお釋迦樣にまゐつてをるのでない。私は佛敎徒だと云ふ、そのまゐつてをる佛は印度の佛ではないのであります。

昔法然聖人のところへ一人の修行者が尋ねて來て、「法を求めて聞きに來ました。」と云うたら、法然聖人は「法とはいづれの法か。」と聞き返された。その修行者は「念佛の法を求めに來ました。」聖人は「念佛は唐土の念佛か日本の念佛か。」と又聞き返されました。「唐土の念佛を求めるのです。」と修行者が答へたので、法然聖人は「さては善導和尙の御弟子だ。」と云うてお弟子にされたと云ふことであります。法然聖人は深く善導樣の敎を受けてをられたのでそれはいかんとは云はれなかつた。唐土の念佛と云はれたのは善導直傳の念佛といふ意味であります。がもう一つ進んで云へば日本の念佛と出なければならんのであります。親鸞聖人はもう一歩進んで日本の念佛と

おつしやつた。

念佛は無碍の一道なり、そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪惡も業報を感ずること能はず、諸善も及ぶことなき故に無碍の一道なり。

これは日本の念佛であります。天神地祇も敬伏する念佛は日本の念佛であります。日本には日本の念佛があります。

聖德太子の佛教といふのは、始は印度の釋尊の教によつてヒントを得られた。『法華經』『勝鬘經』によつてヒントを得られた。がそれから入つて行かれるところは世界的の宗教であります。大乘佛教は印度に固定した佛教でない。世界的の佛教です。『法華經』の本門の釋迦です。本門の釋迦は世界的の釋迦です。宇宙と共にある釋迦であります。だから佛・法・僧の三寶は萬國之終歸であると仰せられるのであります。自覺して宇宙の本然をここに悟達せねば何をしたつて駄目であります。近來の日本のやうでは、いくらものを平均したつて自覺がなければ助からんのです。自覺に基いた生活がスンギャの生活です。近代は物の餘る者があり、足らん者がある。だから共産的にせにやならんといふのです。經濟的に云うて、結果から云へばよい。がその根本に心の融合があつて、有無相通ずるならよい。が心が隔つてをつて制度だけがさうなつても本當の共産にはならないのであります。ロシヤなどはさういふ現象です。ロシヤは個人の自由は絶對に認めんのです。だから田圃をすると云うても自分の作りたいものが作れぬ。皆政府の指圖によつて作るのである。今のロシヤの國には個人の自由はないのです。昔から王樣の專制の國であつたが、今のソビエットは又それを習つてをる。だから六七人の統理者階級の者の專制である。もつと云へば一人二人の頭株の專制である。絶對專制であります。今のイタリーのファッシズムは社會主義を排斥してをるが、ムッソリーニは獨裁專制の政治をやつてをる。形はソビエットのそれと違ふけれど、ソビエットも獨裁專制の政治をやつてをるし、イタリーも獨裁專制の政治をやつてをるのであります。これはあまり個人主義を重んじ過ぎた、そして自由を云ひ過ぎた弊であります。今日はだんだん自由貿易自由思想が沒落しかけてをるのです。共和政治の國だと云うてをるアメリカのやうなところでさへ今日は獨裁になつてをります。

近代の傾向は個人主義的共産主義を離れて獨裁的になつてをります。それは個人主義の終極に行つたのです。個人主義はやがて獨裁に變つてゆくのです。一人々々が財産を持たぬ、これが面白い。皆が一緒になつてをるやうでよい。親爺・子・妻が一つの財布を持つてをる。それに儲けた

ものを入れる、それを又使ふ、それがよくゆかぬ。片方の者が大食して、片方のおとなしい者は食へぬ。神經遲鈍な者は自分のことばかり考へて向うの腹の減つてをることを考へぬ。佛陀は神經が鋭敏だから、大阪に飢ゑてをるもののこと、東京のルンペンのこと、支那に飢ゑてをるものこと、ロシヤのこと、皆考へられる。だから自分だけといふことを考へられぬ。世の中には抑へられてをるものがある、伸びられんものがある。それを考へる、さういふやうに神經が働いてをる。それが實際の上に働くときに有無相通ずるのだ。俺のものは放さんぞといふやうなのは佛敎でないのです。流通してゆくやうに我々はやらねばならんぞ、といふと、制度が惡いのだと云ふ。それには我々は反對である。心をそのままにしておいて組織を變へてもやはり本の木阿彌であります。だからやはり暇がかかつても一人々々自覺して天地の大道に順うてゆくとき、經濟上の流通も圓滿にゆくやうになる。さういふことをやつてをつては「百年河清を待つ。」でなかなかむづかしいことだ、と云ふかもしれない。けれどもそれが終極の道であります。早くやる工夫はないのです。早くやるときは今の社會が壞れる。イタリーのやうにやれば個人の獨裁になる。そこには壓制がある。むろん個人的の自由を思ふことは間違であり、個人的の自由はないといふことも間違である。そこに個人と社會が一つに融合うたものがあつて、個人の自由と社會の自由とが一緒にならねばならんのであります。

ところが他人の自由を思はん者は、自分が我儘をやるとき人の自由を抑へる。そこに近代人の弊があります。それは金に依つた生活によつては駄目です。それは自覺によらねばならぬ。天地の大法によらねばならぬ。それは佛敎である。その佛敎は印度の佛敎を超えた世界的の道なんです。聖德太子が佛敎と云はれたのは、單なる印度だけのものでない。日本精神を入れた佛敎であります。現に聖德太子が朝廷において『法華經』を講釋されましたとき、本門の釋迦としていつも味うてをられるのは天神であります。又天照大神の上に迹門の釋迦をお味ひになつたのであります。

無限の宇宙から現れたもの、その神の御心がそのまま佛陀なんです。それを佛陀とも法とも或は達磨とも云ひます。それに融合うてゆく八百萬の神は僧であります。だから天照大神は佛陀であります。天神は達磨であります。八百萬の神は僧です。だから佛・法・僧の三寶が日本の國において現れるときは、天照大神は佛陀であり、その前の天地の神々は法であり、八百萬の神は僧であります。そしてそれは同體であります。それは法の上に現れて、神ながらの道或は言靈の幸はふ國となり、それは僧の上に現れるとき億兆心を一にする僧となるのであります。さういふ點から

云へば、日本の國全體が僧になるのであります。天皇陛下は佛陀であります。憲法は法であります。人民は僧であります。日本の國民皆が僧寶です。日本の國人皆が仲よくゆくことは僧です。何を求めてゆくのか。天皇陛下の上に自覺者を仰いでゆく。天皇陛下の御言葉の上に法を認める、そしてだんだん和してゆく。そこに佛・法・僧があります。それを印度のお釈迦樣が教へて下さつたのであります。我々はここに歴史的の佛教によつて、歴史を超えた日本の佛教を悟ることが出來ます。

さういふことを聖德太子は味うてお出になるから萬國のとおつしやるのであります。印度のとおつしやらぬ。萬國の宗教である。釈迦宗でない。彌陀宗です。後に親鸞聖人が味はれた彌陀宗です。國を超えてをるのです。國を超えてをるところに日本の特殊の宗教が成立つのです。だから神ながらの道は佛教なんです。さういふ精神で聖武天皇の御代に奈良の東大寺の大佛が建立せられたのであります。あの大佛は『華嚴經』の中の毘盧舍那佛です。これは大日如來であり、又天照大神、日の神とも仰ぐことが出來るのであります。聖武天皇は行基菩薩をお使として伊勢大神宮にお遣しになつた。そして天照大神は毘盧舍那佛であるといふ神のお告を受けられた。これによつて大佛が建立されたといふことです。大日如來は天照大神である。日の神である。天にあつては太陽と現れ、地にあつては鏡と現れ給うた。それを人間的の姿になして刻んだのが大佛であります。だから奈良の大佛は天照大神で、神と佛陀と一つであります。神佛一體です。ところが佛といふと印度の佛教のやうに思ふから、國學者などが反對するのです。聖德太子の佛教はさういふちつぽけなものでない。萬國の佛教なんであります。世界的の自覺者を仰ぐ教であります。天地の大道を自覺してゆく、そして國を治めてゆくところに本當のものがあるのです。プラトンが哲人政治は本當だと云うてをるのはそのことであります。さういふ佛教なんです。腹の大きい佛教です。偉大な佛教です。

これは眞宗の中においても、今から三十年ほど前に、大分縣に小川丈平といふ人があつた。この人は七里恆順師の教をうけた人であつた。私が清澤先生の門下にをるとき先生の許へ、たしか京都の小川さんの信者の顯道書院の主人松田といふ人から、丈平氏の著書を送つてよこされた。その頃の『精神界』に紹介しておきました。書名は『諸經法語拔萃』と云ひます。この本には親鸞佛法然佛と記し、近代の妙好人でも庄松佛・清九郎佛などと記してあるのをみると、小川氏は恆河の砂の數ほどのたくさんの佛を現實に拜んでをつた人と見えます。その味が面白い。念佛成佛といふのは、この世で佛になることである。この流をくむ人の中の極端な人は、木像や繪像をかざ

つておくのはよくないというて川に流したといふことであります。佛敎は本願寺の大堂にばかりあるのではなくて、念佛する人の心のうちにある、といふことを小川氏は盛に主張してをられます。法然聖人に、あなたの御廟をどこに立てますか。と申したら日本國中どこでも念佛聲のきこえるところがわが廟であるとおつしやつた。又親鸞聖人が「一人ゐて喜ばば二人と思ふべし、二人ゐて喜ばば三人と思ふべしその一人は親鸞なり。」とおつしやつた。念佛するものは皆佛です。だから私なら曉烏佛、ここの別院では蕪城佛・小堀佛、皆佛です。かういふとそれは一益法門だといふ人があるかもしれんがそれとはちがふ。佛には當來佛と現在佛とある。彌勒菩薩は佛になる方だから彌勒佛といふことがある。さういふ意味において彌勒と等しい信心者は將來佛になる方だから佛と云うてよい。正定聚の菩薩は佛と云うてよい。現在佛陀は釋迦佛陀だ。釋迦は未來佛でないから涅槃に入られる。涅槃には有餘涅槃と無餘涅槃とがある。現在には無餘涅槃はない。現在の佛陀は有餘涅槃を悟つた人である。我々も信心を得れば佛陀だ、そんなら佛樣は小便するか、大便するか、と云ふが、お釋迦樣は死なれるときに、人の供養した茸を食べられて、腹くだりになつて死なれた。水をほしいと云うて死なれた。芭蕉といふ俳人も茸を食べて腹くだりで死んだ。大方お釋迦も茸に中つて死なれたのであらう。佛さんでもさうですか。さうだ。いろんなことがある。けれどもその中に憂ふるところはない。悲しむところがない。苦しいながらも涅槃に入られる。そこが佛樣である。草木國土悉皆成佛、學者ばかりが佛になるのでない。爺さん婆さんも佛になられる。學問のない者も佛になられる。にこにこして喜んでをる者は佛になられる。一文不通の尼入道がありがたやありがたやと云うてをるところに佛法がある、と蓮如上人は云うてをられる。それが佛法である。佛法があるなら佛がある。よくあのお婆さんは佛さんのやうだと云ひます。佛さんなのだ。たくさんの阿彌陀を拜むそれが萬國の宗である。ちやからその佛陀はアメリカにもイギリスにもフランスにもドイツにも、どこにも毛の赤い佛陀目の黑い佛陀たくさんをられるといふのがわが聖德太子の佛敎であります。世界的の佛敎、全世界の者の仰ぐ佛敎はさういふ佛敎であります。そこにはキリスト・ソクラテス・カント皆をる。もう一つ開いて云へば、レニン・マルクスもこの佛敎の中にをる。そして佛道をだんだん歩んでゆくといふことを考へると、我が佛敎は非常に廣い佛敎です。そして全世界がこの自覺の道を歩んでゆくといふやうに考へますと、近來の社會的の運動も自覺への道程である、終極は佛への道筋であると思ふとき、彼等の極端なことを戒め、これを處罰すると同時に、終極まで導いてゆかねばならんと思ふのであります。これを思ふとき、聖德太子の『十七條憲法』が大政治の基本的の經典になるのだ。皆が和

合して、天地の大道を崇め、そして三寶に歸依する、これが大切な道であることを今更のやうに有難く思ふのであります。

第三講（上）

聖德太子の『十七條憲法』の第二條のつづきを話します。第一條には『和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。』和を貴み、柔順を宗とするといふことを敎へられてあります。その和を實行してゆく道として第二條を敎へられるのであります。

篤く三寶を敬へ、三寶とは佛・法・僧なり。則ち四生之終歸・萬國之極宗なり。

佛・法・僧の三寶は生きとし生ける者の行きつく先である。それは萬の國、世界中どこの國でもこの佛・法・僧の三寶を命の本源とするのであります。宗とするのであります。佛敎は萬國の宗敎であると云はれるのであります。ここまで午前にお話しました。太子が、萬國の宗敎だと云はれますときの佛敎は、釋尊以前から存在する佛敎であります。印度の佛敎でなしに、世界各國最古の時代からあるところの佛敎であるといふ意味であるといふことを話しました。

何れの世、何れの人か是の法を貴ばざる。

いつの時代でも、どんな人でも、この佛・法・僧の三寶を貴ばない人はない。貴ばない時代はない。ここに「法」とあるのは、佛・法・僧の三寶を云ふのです。三寶を法の一字に集めて敎へられてあるのであります。聖德太子が政の根本とし、敎育の淵源として、朝廷で釋尊のお說きになつたお經を御講釋せられました。その折に第一に選擇せられましたのが『法華經』であります。『法華經』はその名前の現す如く、『妙法蓮華經』蓮華で現す妙法であります。『佛說無量壽經』は無量壽如來のことをお說きになつてあるから『佛說無量壽經』と云ふのであります。『法華經』は妙法を說いてあるから『妙法蓮華經』とも云ふのであります。『無量壽經』は人につき、佛につく。『法華經』は法につき、理につく。それで南無阿彌陀佛の道と、南無妙法蓮華經の道と分れます。南無妙法蓮華經は法を主として、南無阿彌陀佛は佛を主として云ふのであります。

『法華經』を朝廷で御講釋になつた聖德太子は、佛・法・僧の三寶を法の一つに攝めてここに敎へられたのは偶然ぢやないのであります。佛も僧も法の法の中に攝めてお示しになつたのであります。「何れの世、何れの人か是の法を貴ばざる。」第一條には「和を貴しと爲す、」ここには「何れの世、何れの人か是の法を貴ばざる、」と又貴むといふ字が出てをります。貴む、敬ふといふ心持が

一節毎に繰返してあります。

それでは、和を貴むのと、この法を貴むのと違ふぢやらうか。和といふものはこの法です。法の世界は和の世界です。法の世界に障はない。如法如實の宗教は圓轉滑脱であります。和順であります。忤ふとか忤らふとかいふのは法に順はない、法に外れたことであります。法の生活は和順であります。和であります。ぢやから和を貴むといふことは、法を貴むといふことと同じことであります。和を貴むことはそのまま法を貴むこと、法を貴むことはそのまま和を貴むことであります。

人尤だ惡しきもの鮮し、能く教ふるをもて從ひぬ。

非常に惡い人間といふものはをるかもしれないけれど、さういふ者は鮮いものだ。「よく教ふるをもて從ひぬ。」よく教へさへすれば從ふものだ。昨年も東京へまゐりました時、最近の日本の思想犯人のことについて、警視廳の特高課長に逢うていろいろ話を聞いてきました。隨分大それたことを考へ、またさういふことをたくらむ人もあるやうであります。しかし、私達はさういふことを聞きますと、驚くと共に、それは見込みのない人達だ、片端から殺してしまへ、といふやうには考へられないのであります。さういふ人達の一面をみると、非常に立派な方面もあるのであります。例へば、或家の子供が東京で大それた國家の大罪を犯した、それをその子の家に知してやつたところ、そのお母さんが早速飛んで來た。そして、それは人違でないか、私の子供に限つてさういふことはない、あの子は中學校・高等學校に通つてをつても、いつもよく勉强した、懶けたことはない。私共兩親に對して非常に素直です。あの子がさういふ大それたことをすることは決してありません。それは人違ではありませんか。非常に直面目な、品行方正學術優等で、親に對して嘗て心配をかけたことのない子です。あの子は決してさういふことはしません。かう云うて來た。ところが、さういふ子でも大それたことを行ります。中には非常に眞面目な學者・官吏・軍人といふやうな人の子供でも、口にすることさへ厭はしいやうな罪を犯す者が出ます。さういふのをみますと、勿論彼等は自分の儲にしようとか、自分の懐を肥さうといふやうなことのためにやつてをらぬ。それが社會人類の救の道であると信じてやつてをるのです。その點は非常に尊敬すべきところもあるのです。さういふのをみますと私は思ひます。この立派な傾向のある人を、どうしてよい方に導けないだらうかと、先づ自分自身を恥づるのです。きつと導き方がよければよい人になれるのぢやがなと思ひます。さういふ場合に、かういふ人はとても見込みがない、駄目なんだ、と思へんのであります。教へたならばきつと從順になるのだ。本當の道を行つたらよ

い人になるだらうなといふやうに思ひます。

近來いろいろ青年の間に、危險な思想を抱いたり、危險な運動を起したりする人のあるのを見ますと、ただ自分自身らが年を取つてをるが、この眞面目な青年を導くことが出來ないといふことは慚愧に堪へんのであります。或學校の校長が自分の教へてゐる學生の中からさうした犯罪人の出た時、今の若い者には困るといふお話がありましたが、若い者が惡いといふより、その上に立つた皆さんに缺點があるのぢやないでせうか。その眞面目に燃えたつてをる青年に本當に感歎せしむるやうな清潔な法が授けられたら、きつと青年はそこを離れんだらうと思ひます。さう思ふと、あなた方の責は大きいのです。といふやうなことを話したことがあります。

人間はよく導けば屹度よくなるのです。人間にはさう惡い者はをらんのです。人間には皆人間の心があります。惻隱の心卽ち忍びない心があります。それはまあ特別に殘酷な心を持つたものも稀にをります。又馬鹿な心から殘酷なことを行る者も稀にあります。しかしそれは極く少い。多くの人はよく導けばよくなる性質を持つてをります。一切衆生に悉く佛性あり、といふことは、かうした氣持であります。「人尤だ惡しきもの鮮し、能く教ふるをもて從ひぬ。」教へたら從順になる。これはやがて『法華經』の「草木國土悉皆成佛」といふ心持を語られたものであります。ここに教育の淵源があるのであります。教育の可能性といふやうな心があるのであります。人を教へるのに、こんなことを教へるけれど出來るか出來んかわからない、といふやうな危げな心があつて教へたら、教は決して通るものでない。自分の教へることは人が望むところである、又人の衷心に湧いてをるところである、といふ確信があつてこそ、教育といふものは眞面目に施されるのです。これはやはり確信です。人にものを云うても、あの人に云ふけれども出來るやら出來んやらわからぬ、といふやうな氣持で人に云うたつて、人はそれによつて救はれるものでない。これをすることがあの人の行くべき道である、これをすることがかの人の衷心に求めてをる道なんだ、それによつてかの人は幸福を得るといふ確信があつてこそ、力のある教育といふものは出來るのであります。それはやはり自分の心がはつきりした人の上においてのみ、さういふことは信ぜられるのです。ここが教と云はれる教であります。

日本の建國は神武天皇のお骨折によつて出來たのであります。その後一千年あまり、推古天皇の御代までは文字の上に國民に對する教といふものはなかつたのであります。國民教育といふ形をなしたものはなかつたのであります。ただ折々の詔はあつた。天の神々の詔はあつた。又下々の者に對して天皇陛下は詔を下されたことが間々あります。それを國民教育といふやうな形によ

つて現されたのが、推古天皇の御代に聖德太子のあそばされた政治が始てであります。聖德太子は、政治といふものの根本を教育といふものにおかれたのであります。人を治めることは人を教へることであると信じてお出になつたのであります。本は、治めることは祭ることだと云はれたが、祭るといふことは手近く教へることであると味はれたのであります。文化日本の根本はこの教育に始ると仰せられたのであります。

教へるといふことが確でなければならんやうに、習ふことも確でなければならぬ。ものを習ふに、ああいふことを習うたつて駄目だらうといふやうな氣持で習ひかけてもうまく得られるものでない。俺でも習へば出來る、出來さにやおかんといふ確信があつて習へば、きつとそれは我がものになります。聖德太子樣は人尤だ惡しき者鮮し、教育しても善に遷らないといふ者は殆ど稀だ。多くはよく教へさへすればきつと從ふ。とおつしやるのであります。かういふことをいただきますと、今日いろいろ我々の驚くやうな思想犯が出るといふことは、よく教へないから、教へ方が惡いからだといふことを考へずには居られないのであります。よく教へれば、教さへよければ、導き方さへよければ、きつとよくなると聖德太子はおつしやるのであります。聖德太子樣は佛・法・僧の三寶を敬へとおつしやることは、教につけとおつしやることであります。佛・法・僧の三寶、これは教であります。

日本の昔は自然の啓示によつて人々が進んできたのであります。それを一つ人間的に碎いて、人間的に人を導くときにそれは教となるであります。教は天地自然の大道理を悟つた人が、悟つた心に嚙み碎いて、わかり易いやうに人にその道を教へて、その道に導く、それが教です。だから教に現れるところは、天地の大道或は天神の御心であります。それが明かにせられる、それが教であります。それをよく教へればきつと從ふ。佛學者などがよく申します、どうも今の青年は佛教を聞かない、かういふやうに申しますが、それは教へ方が惡いのです。先日或ところへ行つたら、どうもお寺は老人ばかり集つて若い者が行かぬ。あれはどういふものでせうか。と尋ねた人がありました。老人ばかり集つて若い者が行かんといふことは、教へ方が惡いからです。若い者が習ふやうに法を說けばきつと若い者が集ります。年寄だけしか聞けぬやうなことを云ふから若い者がいかんのです。どんな若い者でも、よく教へれば必ず從ふのです。年寄さへ教へれば從ふことが出來るのです。まして初心な軟い心を持つてをる青年です。よく教へれば從順になるといふことは、申すまでもないことです。それで聖德太子は佛・法・僧の三寶を敬へよとおつしやつて、その三寶は何れの世何れの人も貴ばれることである。ちやから皆によくこれを教へたらきつ

と柔順になる、とおつしやるのであります。從順になるといふことは、和を貴み忤ふことなきを宗とするといふ精神に到達することであります。

其れ三寶に歸りまつらずば、何を以てか枉れるを直うせん。

佛・法・僧の三寶に歸りまつるといふ歸るといふ字は、歸命の歸です。三寶を賴む、佛を賴む、法を賴む、僧を賴む、と云うてもよい。この佛を賴みまつるときは、枉つたものを眞直なものに出來るといふのです。枉つた心を眞直にするのはこの、佛・法・僧の三寶を賴むに限る、佛を賴みまつらずばとても助かることは出來ぬ。ただ佛を賴む信心によつてのみ道があるといふことを、ここに「其れ三寶に歸りまつらずば何を以てか枉れるを直うせん。」とかうおつしやつてあるのであります。三寶を賴みまつる、始のところに、「四生之終歸」この歸の歸、この字を書いて賴む或は賴るといふ意味に當ててあります。佛・法・僧の三寶を賴む、佛を賴む、法を賴む、僧を賴む、といふことは後立にするのです。佛を後立にする、法を後立にする、僧を後立にするのです。三寶を後立にすることは三寶を賴むのです。ちやから後立にするとは、それを力に、それを命の本源にすることです。それが宗です。それの力によつて動いてゆく。毎日の生活に從ふ。この佛・法・僧の力を貰うてゆく。だから賴みまつるといふことは、そこから力を貰ふ。そこから血を貰ふ。

命を貰ふ。それが賴むといふことです。力と命とを三寶から貰ふ。それではじめて枉つた者が眞直になるのであります。『論語』の爲政篇に

直きを擧げて諸を枉れるに錯くときは則ち民服せん。枉れるを擧げて諸を直きに錯くときは則ち民服せず。

といふ一節があります。意味は、正直なもの、正しきものを擧げ用ひて、枉つた者の上に置けば世の中は圓く治る。枉つた者を立てて正しき者の上におくときは民は治まらない。國を治めるといふことの一番大事なことは、直き者、眞直ぐな者、正直な者を上に立てることである。枉つた心、ひねくれた心の者を立てれば世の中は亂れるといふことであります。佛・法・僧の三寶を賴めばおのづからの枉つた心の者が眞直ぐになる。「自然の理にも相かなへば柔和忍辱の心も出でくべし。」と蓮如上人が申されました。『大無量壽經』の中の四十八願の中に、

設ひ我佛を得たらんに十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我が光明を蒙りて其の身に觸れん者、身心柔輭にして人天に超過せん、若し爾らずば正覺を取らじ。

といふのがあります。又同じお經の中に佛樣の光明を稱へた後に、

其れ衆生ありて斯の光に遇ふ者は、三垢消滅し、身意柔輭に、歡喜踊躍して善心生ず。

とあります。この光明に遇ふ者は三つの垢が取のけられ、身も心も輕かになるといふのであります。佛・法・僧の三寶を賴むやうになりますと、心が和ぐ、正直になる、素直になると仰せられるのであります。直いとは素直なといふことであります。この三寶を賴めば自然と和といふものが出る、そこに世の中は圓く治るといふことを敎へられたのであります。これが第二條のお心であります。

さて、この最後の「柱れるを直うせん。」といふ言葉を、漢學者は『論語』の言葉に思合せます。佛學者は又これを佛敎の心にとつて、佛を信ずれば淨土に往生する、「疑へば華開かず、信心淸淨なれば華開いて佛を見たてまつる。」或は「生死の家には疑を以て所止とし、涅槃の城には信心を以て能入とす。」といふやうな言葉を思ひ出します。ところが私は最近日本の神代の記錄をだんだんお味ひしてをります。で、ここを讀みますと直ぐに思出すのは伊邪那岐神の禊の一段であります。

我々が神社へまゐりますと、神主樣が「祓ひたまへ淸めたまへ、」「かしこみかしこみまをす。」と云はれる祝詞を聞きます。あの祓ひたまへ淸めたまへの祓ふとは惡しきを祓ふ、或は穢を祓ふといふことであります。又淸めたまへといふことも同じやうな意味で、穢を洗ふといふことであります。この祓ひたまへ淸めたまへの精神を實行するために、伊邪那岐神は禊をされたといふことが神代の記錄に記されてあります。禊は水すすぎだといふ解釋をした人もあります。ともかく自分の身についた垢を落すことであります。だから禊は淸めであります。また祓であります。この禊が中心になつて禊敎といふ新しい神道の一派も出來てをります。川面凡兒といふ人はしきりに禊といふことを唱道されました。その一段を『古事記』といふ古い書物によつて思出しますとかういふことが書いてあります。

伊邪那岐神・伊邪那美神といふ夫婦の神樣がをられた。この夫婦の神樣がたくさんの國を生み又、たくさんの神々を生れた。伊邪那美神が迦具土神といふ火の神を生れた。そのために病氣になられおかくれになつた。男神の伊邪那岐神はその別を悲しんで、女神の死骸の周を泣きまろんであるかれた。その後女神を黃泉の國――死の國へお迎へにお出になつた。是非高天原へお歸り下さるやうにと勸められた。がいろいろの事情のために女神はお歸りにならなかつた。それで伊邪那岐神は高天原へお歸りになつた。その折に身體についた黃泉の國の穢を、筑紫の日向の橘の小門の檍原で洗ひ淸められました。先づ第一に持つてをられた杖をお捨てになりました。その杖から神樣がお生れになつた。次に帶をお捨てになつた。それからも神樣がお生れになつた。次に

裳をお捨てになつた。それからも神樣がお生れになつた。次に着物をお捨てになつた。それからも神樣がお生れになつた。次に褌をお捨てになつた。それからも神樣がお生れになつた。次に冠をお捨てになつた。それからも神樣がお生れになつた。次に左の腕環をお捨てになつた。それからも神樣がお生れになつた。次に右の腕環をお捨てになつた。それからも神樣がお生れになつた。そして伊邪那岐神は丸裸になられました。黄泉の國の臭味のついてをるものは皆捨ててしまはれました。所謂祓ひ清められたのです。祓ひ清めは裸になるのです。つけたものを取るのです。

まだしかし身體に垢がついてをる、垢も捨てにやならんといふので、河の中で禊をせられました。この筑紫の日向の橘の小門の檍原といふところはどこだらうかといふことは、近來疑問になつてをります。或人は今の宮崎市の宮崎川だと云ひます。宮崎市には橘通がある。橘橋がある。又淀といふところがある。近邊には橘といふ村がある。筑紫は九州の總名だから日向は宮崎のあの邊だらう。といふ說があります。又或方は、さうでない。今の福岡の海岸だ。あこにはあかに川がある。筑紫は九州全體のことで筑紫の日向ひである。あの邊に橘といふところがある。そしてあの邊にはその禊でお生れになつた神樣を祭つた神社がある。八十禍津日神や神直毘神・大直毘神を祭つた神社がある。と申されます。その神社へは先日私も參詣してきました。さういふやうなことからあの邊だと決めてをる人もあります。私は未だそれを何れとも決してをりません。ただこの頃はいろんな人の考を聞いてをるだけであります。

ともかく伊邪那岐神は河の水の中に入つて身體を洗ひ清められた。そして黄泉の國の臭味のついた身體を洗はれた。それを禊を云ふのです。その禊によつて救はれる、助けられる。人間の助かることは清めであります。祓であります。禊であります。人間は何で惱んでをるのか、何で罪を作るのか。外から自分の本然を妨げるものがつくからであります。穢がつくから苦しいのであります。圓滑に運轉してゆく齒車はしつくり合ふやうになつてをります。けれども、その間にごみが入ると齒車はぎしぎしします。このごみ・穢を去るといふことが大事であります。ごみ・穢を取ることによつて圓滑に運んでゆくのであります。ついたものを捨てる、清める、禊する、洗ふといふことによつて罪が消えるといふのであります。

ところがこの禊といふことは日本の神代ばかりで申すやうですが、バイブルを讀みますとキリストがヨルダン河でヨハネの洗禮を受けたといふことが書いてあります。洗禮とは河水で洗うて身を清めることです。ヨルダン河はゼリコの湖水が死海に流れ込んでをる。その河であります。先年私はキリストの舊蹟を巡拜したとき、キリストがこの邊で洗禮を受けたといふところに行つ

てきました。私の行つたときは雨上りでヨルダン河の水は隨分濁つてをりました。河幅が十間ほどもあつて相當に深い河です。しかしこの濁つてをることは稀ださうです。ふだんは非常にきれいな水であるさうです。それは本當だらうと思ひました。その河の水源のゼリコへ行つて、附近のタイベリヤといふところで泊つたのですが、この夜湖水に舟を浮べて音樂をやつてをつた人がありました。この湖の水の流れる河ならきれいだらうと思ひました。この水でキリストは身體を洗ひ、罪の清めをして貰つたのです。この頃キリスト教の人の洗禮を受けるのはこのことが儀式化したものです。日本のこの禊の心持と、キリスト教のこの洗禮の心持と通つたところがあります。近來日本人はユダヤの國から來たのだといふ人があります。さういふことを聞きますと禊といふことにも似たところがあるやうにも思ふのであります。しかし私はまだ決定しません。

印度でもさういふことがあります。佛教でも眞言宗や天台宗では灌頂といふことをします。現に印度では禊をやつてをります。中印度のベレナスのあたりでやつてをります。ベナレス、ここははじめてお釋迦樣が說法された鹿野苑のあるところです。ここには印度教の大きな寺もたくさん建つてをります。有名なガンヂス河はこの町の横を流れてをります。このガンヂス河の瀨に多くの人が這入つたり出たりして祈つてをるのが見受けられます。人が死ぬと河の岸に割木を積んでその上に死骸をのせて燒きます。灰になるとそれを河に流します。さうすると人間は助かると云ふのです。私はベナレスに行つた時、舟に乘つて河に出ました。そして舟の中から葬式の光景を見ました。今の印度人はガンヂス河の水に浴びることによつて罪が清められると思うてをります。これは禊です。祓ひ清めです。

世界中で風呂のすきな國民は日本が一等だと云ひます。湯に這入ることは外國人も好きです。殊に錢湯などで完備してをるのはトルコです。トルコ風呂と云うて、全世界を風靡してをります。イタリーのナポリの側にポンペイといふ町がありました。それが今から二千年程前に、ベスビオ火山の噴火のために全町が灰に埋つたのです。そのベスビオ火山は今でもすさまじい勢で噴火してをります。私は見て來ましたが、どつと黑い煙が上つてをります。西洋人は偉いもので、噴火口の近くまでケーブルカーをつけてをります。それが又近く噴火の道が埋つたと云ひます。二千年前、大噴火のためポンペイの町がそのまま灰に埋つてしまつた。それが百年程前に發掘されたのです。昔の町そのまま出たのです。人間が寢てをるまま、夫婦が寢たままのもある。八百屋・穀物屋などもそのまま埋つてをる。その頃の淫賣屋もある。それを又西洋人は熱心に研究して、原形のままに構造したものがあります。それをみますと、中に風呂屋があります。それが又立派な

のである。日本の東京や大阪には立派な風呂はあるが、とても比較になりません。さういふ立派なものが二千年前に建つてをつたことをみますと昔のヨーロッパ人は風呂に這入ることが好きであつたと思はれます。人間はやつぱり清めることが好きであります。目白でもひわでも水浴びることが好きです。烏も水を浴びます。洗ひ清めるとすつとします。さういふことで昔の人は禊が好きであつたのです。

伊邪那岐神は禊をせられました。禊をするとき、上瀬は瀬早し、下瀬は瀬弱し、と云うて中瀬に這入られました。河の中部です。それは日本人の理想が極端にいかんで、中性を得るといふことを現してをります。何でも物の中を考へる。所謂右とか左とか極端な方に傾かんで、それを綜合した中心を選ぶのです。佛教で云へば中道實相といふ中道です。その中道を行く。ここにもやはり日本人の理想があります。和といふことは中です。極端でない。兩極を避けて、その兩極を共に抱く、中を得る。それは和です。伊邪那岐神が中瀬に這入つて垢を洗ひ清められたとき、垢から二柱の神様がお生れになりました。八十禍津日神・大禍津日神であります。八十も大もたくさんといふ意味であります。禍津日とは枉つてをることです。禍の神です。そこでその禍を直すために直毘の精神をもつて生れられた神様が三柱あつた。神直毘神・大直毘神・伊豆能賣神であります。直毘の心をもつて直毘神が生れられたのであります。

日本の神代のことを書いた『古事記』の研究者は古來たくさんありますが、その中に最も科學的な、最も正しいと思はれる研究者は本居宣長だと私は思ひます。この人は伊勢の松坂の人であります。德川時代の國學者であります。宣長翁は三十五年かかつて『古事記傳』といふ本を書かれました。昔の木版木で四十四卷、今の本居全集で菊判本が四冊二千頁ほどのものであります。私は今年の春熱心に讀みました。そして、私がこれまで『古事記』を研究して味うてをつた日本の神ながらの道と宣長翁の味はれたところと、ぴつたりと一致してをることを喜んでをるのであります。私は神ながらの道を味ふとき、親鸞聖人の信心を思ふのであります。私共の信心の基礎が親鸞聖人によつて開かれてをりますので、何を讀んでも、何をみても、親鸞聖人の考で何の中にでも融入るのであります。私は『古事記』の中に正直な素直な心を見出したのであります。本居宣長翁は『古事記』を讀んで、日本國民の中心は直毘の精神であるといふことを感得されたのであります。直毘は眞直ぐなとか、正直なといふことであります。宣長翁の『古事記傳』の首卷の總論の中に『直毘靈』といふ一文があります。それにこの日本精神の中心の直毘の精神といふものを把握してをられます。素直な心、正直な心、眞直ぐな心、飾氣のない、つくろひのない、詔のない、そ

のままです。それが直毘です。枉れるとはまだ垢があるのです。細工があるのです。そのすべての穢をとことんまで祓ひ除けたところが直毘です。そこには何のつくろひがないのです。『維摩經』に「直心はこれ淨土なり。」といふ言葉があります。直心の直は直毘の直です。正直の直です。この正直の心がお淨土だといふのであります。正直の心を親鸞聖人は他力信心或は自然法爾の世界と云うてお出になります。「他力には義なきを義とすと信知せり。」とも申してをられるのであります。頑張がない、素直な心です。そこには豊かな心、明い心、温い心、ふんわりと柔毛で包まれるやうな、羽二重の夜具にくるまるやうな心持、それが直毘の心であります。きれいなそして輭かな直毘の精神からだんだん神が現れて、最後に伊邪那岐神が御目をすすがれるとき、左の御目からお生れになつたのが天照大神、右の御目をすすがれるときお生れになつたのが月讀命、鼻を洗はれた時お生れになつたのが須佐之男命であります。この三柱の神を神々の中の神として崇められて、伊邪那岐神は、天照大神には高天原を知らせ、月讀命には夜の食國を知らせ、須佐之男命には海原を知らせと事依させられました。

須佐之男命はこの神の御命令を怠つて國を治められなんだ。それで神のお叱りを受けられた。そして遂に黄泉の國に追放せられなさつた。そして天照大神のお心が八百萬の神の崇めさせらるるところとなつた。後に須佐之男命の御子孫である大國主命が豐葦原の瑞穗國を治めてをられたが、天神が天照大神に、あなたの子孫が就いて治めよと仰せられた。それで、天照大神は八百萬の神の意を聞き、思兼命の智慧を借り、いろいろ考へられた結果御決心なされ、大國主命と話合をされた。そして遂に日本の國は天照大神の御心のもとに治められることとなつたのであります。

この天照大神の御心が和魂であります。この和魂は禊の表象であります。純の純なところからお生れになつた。しかも、目の雫からお生れになつた、口でない、鼻でない。純な目から現れ給うたといふところに明るさがあるのであります。光があるのであります。智慧の相があるのであります。それが日本の最も大切な國民の中心の信の的になつてをる天照大神であります。天照大神は純粋から現れ給うた神であります。所謂直毘靈の顯現であります。素朴な、そして純潔な、飾氣のないそのままの明い心、それが日本の貴い心であります。そこに和があるのであります。

さて、聖德太子は佛・法・僧の三寶を頼みまつらずには何をもつて枉れるを直うせんとおつしやつたところをみますと、昔の人は水に禊をした。聖德太子様は佛・法・僧の三寶の水で禊をせよとおつしやつたのであります。ただ形の水で身體を洗うてをるのでない。心の穢を取れとおつしや

る。心の穢はどうして取られるのか。佛・法・僧の三寶の水で禊をせよとおつしやるのであります。ここには法と書いてあります。蓮如上人は『御文』に「しばしば信心の溝を浚へて彌陀の法水を流せよといふことありげにさふらふ。」とおつしやつてあります。法の水を注いで、それで禊をせよといふ思召であります。我々の魂の汚い垢を祓ひ清めるのは、佛・法・僧の三寶の水、敎の水に浸つて禊する、そしてありのままな、詔のない、信心の道に出さして貰ふのであります。そこに和の實行が出來ると敎へられたのであります。だから聖德太子の禊は心の垢を法の水によつてそそげよと仰せられるのであります。さうすると我々がかやうな會に出まして、互に佛の讃歎をすることは禊であります。我々はかうした會に集り合うて、禊をしてをるのであります。そして祓ひたまへ清めたまへの衷心の祈を成就せしめられてをるのであります。河に這入る、海に這入るといふのでなしに、現在ここにおいて法を聽聞してをることが、平生の穢埃を取つて、そして、眞の丸の裸になして貰ふ道なんであります。よく今日はお話を聞いて命の洗濯をするのだと云ひます。法を聽聞して、心の禊をする。聖德太子は佛・法・僧によつて禊をするのだとおつしやるのであります。「篤く三寶を敬へ。」何のために三寶を敬ふのか。三寶を敬ふことによつて、直毘の靈を成就する、ここに天照大神の和魂を自分の心の上にはつきりと仰ぎまつり、しかもそれを自分の上に實現することを得るやうにとの思召であるのであります。

第三講（下）

私は滿鐵の招聘を受けて、今年の六月十日に門司を發つて大連の方に渡り、各所で講演をいたしました。そのついでに天津の方でも三日間講習會を開きました。北平の方でもちよつとした會が開かれました。丁度六月二十四日に奉天から北平の方に出掛けました。その間は支那の汽車です。乘つてみますと、殆ど滿鐵の汽車、或はシベリヤ線の汽車と違ひません。隨分行屆いてをります。ただ變つてをるのは汽車の等級で、一等・二等・三等の色が日本と違ふことであります。日本ぢや一等は白、二等は青、三等は赤となつてをります。支那ぢや一等が赤、二等が青、三等が白です。だから赤切符が一番いいのです。日本だと赤切符は惡いのです。それで私はちよつと感じました。ここに支那と日本との民族性の變目があるなと思ひました。日本の昔からの建物などを見ますと、伊勢の大神宮の建物は白木造であります。住吉型或は八幡型といふのは朱塗りであります。神社などが朱塗りになつたのは餘程支那風になつてから出來たものであります。支那文

明の渡來以前の日本の建物は白木です。我々には何か白木が氣持がよいです。

花についてみましても西洋人は白い花をあまり好かんやうです。アメリカのカリフォルニヤには日本人がたくさん花屋をしてをりをります。大仕掛にバラやカアネーションを作つてをります。その畠に行つてみると、白い花はあまりない。赤とか黃とか桃色とかの花が多い。私共日本人は白い花が好きなんです。白バラが好きです。芍藥でも椿でも牡丹でも白い花が好きです。日本人の趣味に白が合ふのです。ところが西洋人は白い花を好かぬ。作つても賣れんさうです。そこにはやはり民族性の變目があるのです。白といふ色はすべての色を綜合した色です。白熱といふと熱力の最も強いものです。白はすべての色彩の綜合された色です。だからきれいであります。そこにすべてを綜合してをるのが白色の特徴です。分析的に云うても白といふ色は複雜な色です。

ところが妙なのは朝鮮です。朝鮮の人は白好きです。洗濯も非常に嚴しくやります。朝鮮は着物を白くするために經濟が惡いのだと云はれます。着物を洗ふために時間が要るからです。朝鮮の川邊にゆくと皆洗濯をしてをる。それだけにしてをつても洗濯が行屆かないで汚い着物を着てをります。日本人は平生黑いものを着てをつても、何か儀式になつたときは白いものを着ます。婚禮・葬禮などは皆白です。敷布などは勿論白です。天皇陛下の御夜具も御寢卷も白であるやうに洩れ承つてをります。白は非常にきれいです。直日とはこの白の精神なんです。

法然聖人の門下で、やはり親鸞聖人とお友達の善慧房といふ方があります。西山派の開祖です。この方の書かれた書物に『白木念佛法語』といふものがあります。有難い本であります。念佛は白木になつて味ふべしといふことを細々と書かれたものです。そのままの心ですな。親鸞聖人のお歌として傳へられてをるものに、

塗りかくす漆の下の黑佛
　　なかなかはげよもとの白木に。

といふのがあります。これは聖人の『末燈鈔』『御消息集』といふやうな書物にも出てをらんのですが、とにかく聖人のお歌として傳つてをるものです。いかにも聖人のおつしやりさうな歌であります。佛像を作つても、漆を塗つたり、金箔をつけたりするのでなく、塗つたものを剝がすのだ。我々が法を聽聞するといふのは、聞いては塗り聞いては塗つてきれいにするのではない。塗つたものを剝がすのであります。

先年印度へまゐりまして、至るところで感じたことですが、印度の佛跡には石佛があります。我々はその石佛のままの佛のお姿に非常に尊いものを見出します。ところがビルマあたりの信者

達は、坊さんでも在家でも、その佛像を尊崇するあまり、それに金箔を塗つてをりました。その時に思ひました。なるほど同じ佛教を聞いてをつても、ビルマ人は金箔を塗る、我々は剝したいといふ氣持を持つてをると思ひました。この塗つた漆を剝す、つけた金箔を取る、その心が祓ひたまへ清めたまへの心、禊の心であります。

道を求めるといふことは、聞いておぼえて塗つて飾つてゆくことではなうて、むしろ塗をはがし、飾をとつてしまふことであります。禪宗の教ではこのことがよく現れてをります。禪宗と云ひましても、臨濟禪と曹洞禪とがあります。京都の建仁寺・妙心寺などは臨濟禪の方であり、永平寺は曹洞禪であります。禪宗はこの二つに分れてをります。臨濟禪では公案を出します。これは白隱禪師の出されたものと聞きます。坐禪する者に公案を出すのです。公案には「雙手の聲を聞く」とか「闇夜の烏の聲を聞く」とかいろいろあります。さういふ公案が二百幾つあるさうです。坊さんでも居士でも坐禪すると師家が先づこの公案を授ける。公案をもらうたものはそれについて考へ得たところを師家に持出して鞭撻をうけるのである。だんだんと公案をたくさん通つた人が偉いとせられてをるのである。だから坐禪をして、公案をたくさん通つた者が偉くなるのです。だから臨濟禪は流行ります。曹洞禪はかうした公案を嫌ひます。曹洞禪は臨濟禪を梯子禪だと云ひます。だから曹洞宗は公案を嫌ひます。私共は專門の坐禪をしたことはありませんが、自分の日常の上に坐禪をやります。寢てをつても、汽車の中でも、どこでも坐禪の場所です。考へてみるとどうも曹洞禪の方がよいやうです。臨濟禪の方は道を間違へる人が多いやうな氣がします。臨濟禪の方には自分で偉いものになつたやうに振舞うてをる人があります。私共はそれをみると野狐禪だと思ひます。悟つてをるやうで悟つてをらんのです。こんなのを生悟といふのです。禪をやつてをる人の中にはそんな臭味のある人が多いやうです。下手に禪をやると人間が高慢になります。私共から云へば、公案の百や二百を通つても何にもならぬと思ふ。皮肉な人がをつて、『公案解答集』といふ書物を出したことがある。師家達がかういふものが出ては困ると云うて、それを買潰したといふことであります。しかし、さういふことをしたつて何にもならぬ。人生の問題はさういふ梯子段を昇るやうにわかるものでない。さういふことをしても物知りになるだけであります。又同じ佛教の研究でも、今度は眞宗、今度は禪宗、或は日蓮宗、今度は支那佛教、今度は日本佛教、今度は印度佛教、今度は『教行信證』『歎異鈔』と一つづつ聞いて覺えてゆく。一座聞いて覺え、二座聞いて覺える。例へば夏季講習會になると、皆ノートを出して書く。ああいふやうな聞き方は野狐禪に同じです。野狐眞宗です。野狐佛教です。ちやからかういふ風な聞き

方をする人に偉い物知りがをります。

私の宅では本年二十二回の夏季講習會を開きました。七月十五日から毎年一週間あるのです。中にはノートを持つて來る人があつた。それで、ノートに書いてゆくやうなものは來るな。覺えてゆくな。お寺へ來たら物を持つてゆくな、帶でも着物でも財布でも皆おいて行きなさいといふ。お寺で金をおいてゆくが法を取つてゆくといふ人があるが、それもおいてゆくがよい。すべてをおいてゆけ。お寺は洗濯場だ。禊の場所だ。汚いものを洗うて行け。法に浸つて垢を落して行きなさい。法の水を持つてゆけばそれも又垢になる。法の水に浸つて垢を落し、純潔な心に生れ變つてゆく。それが御法聽聞の道だと云うたことであります。ところが聞いて立派にならうと思ひ、繕うて行かうと思ふ。所謂佛法者・後世者に見えるやうに振舞はうといふ人があります。だからさういふ人は念佛を稱へてをつても、顏をかたげ、首をかしげて念佛を云ふ。佛法を聞く身になつたら惡いことも出來ません、などといふものがある。あれは繕うてをるのです。だから蓮如上人は「たとひ牛盜人と云はるとも、もしは後世者もしは善人、もしは佛法者とみゆるやうにふるまふべからず。」とおつしやつたことがあります。やはり御法の上にも、法を聞いてそして憍慢になる人があります。俺はものを知つてをるぞ、俺は學者だぞと云ひたいのです。

私は去る九月の十六・七・八の三日間東京で、中央佛教會の連續の講座を開きました。その會は大學の教授や講師の諸君が相代りに話をされるのです。そこへ集つて來る人はさういふやうな話を喜ぶのです。行つてみると皆ノートを持つてをる。それでその時も注意をしました。私の家なら出て行けと云ふのですが、ここでは私にはさういふ權利がない。どうか私の話を聞く折にはノートを捨てて下さい。この話は速記を取つて出版することになつてをりますから若しこの講話を再びききたければそれをよむことにして下さい。だからノートに書いてをるやうな糟は捨てて、書かれんやうなものを持つて歸つて下さい。あなた方が書かれるやうなことはお經の中に書いてあります。又親鸞聖人や蓮如上人のやうな方の書かれたものにもあります。わしのやうな不德な者の云ふことは書かんでもよい。書いたものは駄目です。私のやうな者の話を聞かれるなら、私の顏私の聲の中から何かの淸め祓をうけて行つて下さい。私は學校にをつた時はノートを取らなんだのです。ノートに書かにやならんやうなことは本に書いてあります。ノートに書いておかにや檢査の點はない、と云ふかもしれんが、檢査の點を取つて、佛法者だ、學者だと云はれて地獄へ行くのでは仕方がない。學者だと云はれたら世渡のためにはよいかもしれんが、私共の佛法は佛法の形骸を聞くのでない。生きた佛法を自分に貰ふのだ。自分の生きてゆく命の根元を貰ふの

だ。それにや書いたりしては駄目である。「聖教よみの佛法を申したてたることはなくさふらふ。」と蓮如上人はおつしやつた。法然聖人は、文沙汰してさかさかしき人の參りたるをみて、「往生如何あらんずらん。」とおつしやつたといふことを『末燈鈔』に書いてあります。ですから、あなた方もあまりものを覺えん方がよろしい。物知りになれば偉くなる。偉くなれば佛法は本當でなくなる。我々は偉すぎるから、あつちにつき當つたり、こつちにつき當つたりして困るのです。それに佛法を聞いてもつと偉くなつたらまだ困ります。

昔から佛法を聞いて角の出る人がある。臨濟禪などの公案を通つて角の出る人がある。念佛でもさうです。念佛を數取りでやる人はさうです。千二千と云うて餘計稱へればよいと云ふ。これはやはり野狐念佛です。私は何百念佛を稱へた。私は念佛を稱へて汗が出るやうになつた。佛の顏が見えるやうになつた。もつと稱へられるやうになつたら涙が出るやうになる、と云ふ。涙が出れば何だ。汗が出れば何だ。あの人は五百遍、わしは千遍、あの人は三萬遍と云うて競走してをる人がある。丁度金持が稅金くらべをしてをるやうなものだ。あのうちは稅金を何萬圓出す、うちはこれだけ出す、といふのと同じやうなものだ。中には、あの宗は信者が何萬人、俺の宗はあれより何千人多い、など云うて威張つてをる人がある。それがどうだと云ふのだ。物知りになつてどうしたのだ。物がだんだんわかれば學者になるかもしれん。が佛法は物知りになるのでない。物知りになつて頭を上げるのでない。頭の上つてをる者が頭の上げやうのないやうになるのが佛法だ。それが祓ひたまへ清めたまへです。だから自力の心を振捨てよとおつしやるのです。上る心を振捨てる。頭の上げやうのないやうに打ちなぐつて貰ふ。わかつた、いただいた、喜んだ、さういふものはすつかり捨てるのです。さういふところに依りかからんのです。佛法者・後世者ぶるのはよくないのです。世の中の金・財產・親・子・持物の瘤をつける、又その上に念佛の瘤をつける、そんなにしたら身動きもならんやうになる。瘤取の話がある、瘤のある正直な爺さんが鬼に取つて貰つた。隣の意地惡い爺さんはあべこべに鬼につけられて兩頰に瘤が出來たといふ話があります。佛法はついてをる瘤を取るのです。だから少々痛い。白粉をつけるのでない。取るのです。紅をつけるのでない。取るのです。それが日本の佛教であります。ところがこの頃の佛教は、つけたまへ、塗りたまへといふやうなことをやつてをります。日本の佛教は祓ひたまへ、清めたまへです。皆さんの佛教は祓ひたまへ清めたまへの佛教ですか。それともつけたまへ塗りたまへの佛教ですか。念佛を痂のやうにくつつけてをる人があります。公案などは痂です。ところが臨濟禪でも達觀した人はさうでない。

先度わしに坐禪して何を考へるのかと聞いた人があつた。何にも考へんがよい。が考へたければ、金儲のこと、飯食ふこと、もう一つ極端に云うたら女郎買のことを考へてもよい。それが坐禪ですか。さうかさうでないかしらんが、何を考へるかと聞くからさう云うたのだ。何を考へても同じことだ。隻手の聲を考へるのも、金儲のことを考へるのも同じことだ。隻手の聲を聞いても、それにこびりついてをれば同じことです。ここには禪の穢があるからです。「事に執するも迷なり、理に執するも亦悟にあらず、」です。事物に執着するのが迷であるやうに、道理に執着するのもやはり迷であります。宗教は執着に離れるのです。がその執着から離れるといふことに執着すればやはり迷であります。『般若經』には、空といふことが說いてあります。その空に執着すれば空が有になります。だから空も空であることもしらねばならんと說いてあります。親鸞聖人は、「有念にあらず無念にあらず、平生にあらず臨終にあらず。」と云うてをられます。決めるのがいかんのです。あなた方は決めてをりませんか。一心に彌陀を賴むといふことを心に決めるのでない。偉らさうに決めるのでない。自分の心の土臺をそのままにしておいて、そこに聞いては悟り聞いては悟る、そして皆わかつたと云うたつて何にもならない。これは金平糖の針の出たやうなものである。自分の根本が出來にや駄目である。自分の方にこだといふ執心があつては駄目である。

だんだん聞いて善人になつてゆくのではなく、むしろ惡人だといふことに氣づいてゆくのである。大體梯子で天に昇らうと思ふのが駄目である。昇ることは昇るがだんだん昇つてもう一段で天へ行けるといふ、そこでばつと落ちる、「百尺竿頭更に一歩を進む。」落ちたところが救です。親鸞聖人は「とても地獄は一定すみかぞかし。」と云はれたのはその落ちたどん底であります。

ドイツのニイチエといふ人は『ツアラトウストラ』といふ本の中で、沒落者の道を書いてゐます。一人の人があつて綱渡りをうまくやらうとしたが落ちてしまつた。その落ちたところから本當の道が始る。とかいてあります。そこに己の道がある。普通道德は綱渡りの道である。だから綱渡りは傘をさしたり、棒を持つことを敎へてをる。その綱からばつと落ちて大地に足がつく。そこから本當の道が始るのです。話を聞いては飾り、覺えては飾り、うまく娑婆の綱渡りをする。そしていい顏をしてをる。その間にこれで落ちようかと心配してをる。地獄行きが地獄へ行かんやうにしようとする。地獄行きがゆくまいと思ふ心のある間は駄目である。信心とはすべてが洗ひ去られることであります。何にもなくなるのです。直毘とはそれであります。白木になるとはそれであります。だからそれをありのまま、その機のままと云ひます。その機のままとは、嘘のままでない。嘘のなくなつた、落ちるものは落ちるままです。誤魔化しのなくなつた、飾氣のな

くなつたことです。計うたり、詔うたりするのはその機のままでないのです。丸の裸になるのです。垢が出たら落して、眞裸になるのです。伊邪那岐神が黄泉の國から歸られてから、からだについてをるものをすべて取つて丸裸になられた。そこにはじめて禊がある。眞直ぐな正直な心になる。自力の根性がなくなつて、もう浮ぶ瀬がなくなつた、そこです。

こんな話があります。一羽の烏がをつた。わしのからだは汚い、眞黒だ、と云うて歎いてをつた。又一羽のきれいな孔雀がをつた。烏はその孔雀をみて、わしもあの孔雀のやうなきれいなからだになりたい。わしはからだが汚いと云うて石を投げられたりする。孔雀は皆に大事にせられる。どうしたらあんなにきれいになられるだらう。あ、あれは孔雀の羽がきれいだからだ。と云うて、一つ拾うては自分のからだにつけ、一つ拾うてはからだにつけた。そしてもう孔雀のやうになつたというて、孔雀の仲間へはいつて行つた。始は孔雀達は本當の孔雀だと思うてをつた。そして烏の側へよつてきた。よつて來られるとつけた羽が落ちる、仲間が來たと云うて孔雀達が側へよつてくると烏は除けにやならん。孔雀の仲間へはいつたははいつたが親しくなれぬ。人が孔雀だというて大切にしようとすると羽がとれる。烏でをつた時は仲のよい友達もあつたが、孔雀になつては友達も出來ないので、益、寂寥を感じた。外の孔雀がかはいさうというてよつてきたとき羽が皆とれた。そこで贋物だといふことがわかつて皆からいぢめられた。といふ話があります。私共にもこの烏の根性があります。どうしてもこの孔雀の羽をつける根性が取れません。地獄行の烏が親鸞聖人の羽、法然上人の羽、蓮如上人の羽をつけます。この頃になると、ソクラテスの羽、カントの羽をつけて、そしてしゆつとしてをる。偉さうな高ぶりの心で威張つてをる。それも威張れば威張るほど友達がなくなります。佛法を聞いたら友達がなくなつたといふ人は、聞き損ひをしてをるのです。大分羽がついたのです。烏が孔雀の眞似をすれば、孔雀の仲間へも、烏の仲間へも這入れぬ。佛にもなれぬ。地獄へも行けぬ。地獄では連がないのです。地獄に連のあるのは地獄でない。一人一人の地獄である。惡いものでも連があればそこは極樂だ。地獄でも一緒に行けるなら地獄でない。地獄の釜は大きいから一緒になれる、と云ふが、それは地獄でない。羽の黒いきれいなといふ問題でない。黒いものは黒いもの同志で一緒に打融ければよいのだ。烏は烏でよい。孔雀は孔雀でよい。そのままでよい。雪は白いまま、たどんは黒いまま、そのままにして助かる。ちやから自分の本性をよく知ることです。

「妄念はもとより凡夫の地體なり。妄念のほかに別に心はなきなり。」と横川の源信僧都はおつしやつた。その凡夫を離して助かるのでない。凡夫が我々の地體なのです。先度或人がかういふこ

とを云はれた。「私の惡いところがあつたら云うて下さい。」「あんたは惡いところを聞いてどうするのです。」「だんだん直さうと思ひます。どうかおつしやつて下さい。」と云はれたので私は、「偉いことを云ふな、外の人は知らんけれど、一番惡いことは、さういふことをたづねるその根性が惡いのです。」と私は云ひました。どこか惡いところを云うて下さいと云ふ、その根性の中に、俺はよい者だぞ、大抵のよいことはやつてをるが、百に一つは惡いことがあるかもしれんからそれを云うて下されば直さう、といふのです。偉いものです。わしらは惡いところばかりだから、惡いところがあつたら云うてくれ、さういふことは云へぬ。皆惡いことばかり、いいことがあつたら云うて下さい、ならまだよいが、大抵の人は惡いところがあつたら云うて下さいと言ふものです。それが頭が高いのです。あの人は惡いといふと、どこが惡いと反駁してきます。どこが惡いのでない、皆惡いのだ。あいつは盜人だ、あれは泥棒だ、あれは人殺だ、あれは姦通者だ、と云はれても「はい」と頭が下るのです。俺は覺がない、と一應は思ふ。が覺がないことを深く內省すると、あるぞ、表にはわからんけれど、その種はあるぞ、なるほどさうだとうなづかれます。佛樣に對して、お前は鬼だぞ、と云ふと、うんさうだ俺は鬼だ、と云はれます。お前は畜生だぞ、と云ふと、うんさうだ、俺は畜生だ、と云はれます。お前は餓鬼だぞ、と云ふと、うんさうだ、俺は餓鬼だ、と云はれます。十界は皆俺の中にあると云はれます。何と云はれても「はい」と頭が下る。ちやから世の中にどんな惡いことをする人があつても呆れることはいらない。さうだ、俺もその通りだ。氣の毒なことだと思ふと同時に、一緒に泣かれます。皆受けとられます。しかるに、凡夫人はいい氣になつて飾つてをらうとするのであります。

聖德太子が、和を根本とし、佛・法・僧の三寶に歸依するといふことを敎へられました。それは佛・法・僧の三寶の敎によつて、枉れるを直すのだとおつしやるのです。禍罪の穢を去つて、直毘の心になれ、眞直ぐになれ、初生になれ、と仰せられるのです。初生になつたところに和が生れます。そこに明い朗かな大和魂が生れます。太陽の光のもとに生ひ立つ日本の國がそこに顯現してきます。「土はそれ無量光明土なり、」と『敎行信證』の眞佛土の卷に記されてあります。親鸞聖人の御信心は、この初生のままです。ありていがかりのこのままです。本願の大道をこのままでゆく。繕なく計なく、持つた根性のこのままを打出して、謙虛な心でゆく。頭の上げやうがないと氣がつくと、尊いお情が、種々の方便を持つて、私を攝取し、私を救濟して下さることを喜ばずにはをられんのであります。そこに和があるのです。忤ふ心、喧嘩する心、和のない心、憍慢の心は、自己を知らないことから起るのです。それが深い內省によつて、佛の道を習ふ

ことによつて、初めて自分の値打のないことがわかります。そこに貴む心、敬ふ心が起つてきます。その貴む心、敬ふ心におのづから直心・直毘の心が出てきます。また和の魂が出てきます。そして光明攝取のうちずまひになつて、信心歡喜の味が出て來るのであります。ここに大和魂がはつきり拜まれます。日本は明い光明の輝かせられるお國であることを聖德太子が『十七條憲法』の第二條で、御親切に敎へられたのであります。ここに日本精神があります。ここに佛敎の本意があります。その本意を私共は常に親鸞聖人の御敎によつてお育てにあづかつてをることを深く感謝してをるのであります。

第四講（上）

三に曰く。〈詔を承けては必ず謹め。〉君をば則ち天とす、臣をば則ち地とす。天覆ひ、地載す、四の時順り行き、萬の氣通ふを得。地天を覆さんと欲すれば則ち壞を致さんのみ。是を以て、君言へば臣承はる、上行へば下靡く。故に詔を承けては必ず愼め。謹まずば自からに敗れなん。

聖德太子の『十七條憲法』のつづきをお味ひ致します。今日は第三條目であります。第一條では「和を以て貴しと爲す。」と敎へられました。第二條では「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛・法・僧なり。」のお心を敎へられました。ここ三條目には、

詔を承けては必ず謹め。

のお心をお敎へになるのであります。この第三條がまさしく日本の國體を具體的に述べられたのであります。第一條には人間のよつてもつて立つべき基礎をお示しになり、人間は和の基礎の上に立つて行かにやならぬ。平和といふものに立脚せにやならぬ。といふことをお敎へになりました。

さてその平和を實行してゆくには、その平和の體驗者である佛を敬ひ、佛の法を敬ひ、それを敬うて行く人と共にゆく、といふことを敎へられました。さてその貴み敬ひといふものを具體的にどうして自分に味うてゆくのか。和は天地自然の大道であります。第一條はその和、第二條は和は天地自然の大法であるその大法を敬ふことを敎へられました。その和の精神、天地の大法であるところの和を、我々はどうして承けてゆくか。天意を承けるにはどういふやうにしてゆけばよいか。大道をどうして體解するか。といふことの御敎が第三條であります。

第三條をいただきますと、我が日本人は天の御心をどこから承けたてまつるかといふに、天意を承けさせられた大君よりこれを承けたてまつるといふことを教へられたものであります。大君の仰をかしこみつつしむ。ここに日本の國民道德としての最も大切な點が教へられてあるのであります。

詔を承けては必ず謹め。

詔、みことは御言葉であります。のりはそれがそのまま法であります。みことが即ち法であります。で、天皇の仰を詔と云ひます。その詔を承けては必ず謹め。（仰を承けたならばそれに素直に順うて、その前にかしこみかしこみお順ひ申せ、とおつしやるのであります。）その詔はどなたが仰せられるかといふに、それは申すまでもなく大君であります。

君をば則ち天とす、臣をば則ち地とす。

天照大神の傳統を受けさせられる大君をば則ち天とする。天です。み空です。その外の人々をば地とする。臣下は地であります。天地と分けると、上御一人は天、その他の者は皆地であります。

天覆ひ、地載す、

み空は上からすつと覆ひ、大地は下から載せてをる。覆ふものと載せるもの、そこに四の時順り行き、萬の氣通ふを得。

それが順當に天は空より覆ひ、地は下より載せていつて、春夏秋冬の四の時が都合よく廻つてゆく。春夏秋冬が順當に廻りゆくところではじめて「萬の氣通ふを得。」ここに氣といふ字を漢字の氣の字で書いてあります。氣は即ち氣候の氣の字です。氣勢又は氣魄といふ熟字もあります。氣といふときには氣魄の意味を多分に含んでをるやうです。萬の氣通ふといふのは、それぞれ順序を得て一切の生命が一つに融合ふといふ味ひであります。これが反對に、

地天を覆さんと欲すれば則ち壞を致さんのみ。

下にあるべき地が、空の天を覆さうと思ふ、所謂臣下として君を倒さうと思ふやうなことがあれば、則ち壞を致さんのみ。自ら破壞を招くばかりである。

是を以て、君言へば臣承はる、上行へば下靡く。

それだから順序よく、上の方から下に水が流れて來るやうに、君が言へば臣が承る。謹んで諒承致す。上がかうせられれば下がそれに靡いてゆく。

故に詔を承けては必ず愼め。

かういふ譯合であるから、詔を承けたならば、きつと慎め。慎めといふことは、慎むとはそれを身に實行することであります。

謹まずば自からに敗れなん。

その詔を謹まんでをつたならば、自然に自滅してゆくより外はないのであります。

この一條を讀みまして、私は實に日本の神代の歴史を發生的にいろいろ思合されることがあります。それはどういふことかと申しますと、『古事記』によつて日本の神代のことを調べますと、先づ伊邪那岐・伊邪那美の二柱の神が天浮橋にお立ちになつて、天沼矛を持つて、鹽こをろこをろに攪き、その矛を引き上げられた、その滴る鹽が積つて淤能碁呂島が出來た。二柱の神はその島にお降りになつて、そこに御殿を建て、夫婦の交をされた。といふことが記してあります。さういふことはすべて天神の命を承けてなされたのであります。伊邪那岐・伊邪那美の二柱の神樣が行はせられることは、自分一個の私の見解で行はせられるのでない。天意を承けて行はせられるのであります。天神の詔を承けてなされるのであります。この詔を承けるといふことは、自分の內心に或聲が聞えるのです。それを承けて二神が初めて夫婦の交をされたとき、天の御柱を廻つて、女神が先づ「あなにやしえをとこを。」と仰せられ、次に男神が「あなにやしえをとめを。」と仰せられた。そして子供が出來ました。その子がよくなかつた。で、その子を葦船に入れて流し捨てられました。

今度は又天の思召を承けるために占をせられました。古代では鹿の肩骨を燒いてその割目によつて天意を窺うたのであります。人意でない。天の心を窺ふ、天地の神々の御心を窺ふ、といふのが占であります。日本の古代ではこの鹿の骨を燒いて占ふ太占、或は探湯といふやうな占もありました。二柱の神樣は太占に占うて天意を承けられた。ところが、それは女が先に言葉を掛けたから惡いのだ。男が先に言葉を掛けた方がよい、とおつしやつた。そこで又天の御柱を廻つて、男神の伊邪那岐神の方から「あなにやしえをとめを。」と云はれると女神が「あなにやしえをとこを。」と申された。それから國を生れ、神々を生れた。その御子が日本の國を開かれたのであります。かういふやうなことをみましても、日本人は何をしても天意を承けられるといふことが現れてをります。

私はこの神代のことをみましても、神代そのもののことを考へますやうに、さうした神代を頭に描いてもつてをつた古代の我が祖先の心持といふことを最初に思ふのです。日本の古代の我が祖先は、伊邪那岐・伊邪那美の二柱の神が天地萬物をお生みになつたについても、ただお二人の

お心でお生みになつたのでない。天地の神々の詔を承けてそれをなされたといふことを信じてをつたのであります。極く露骨な話で云へば、男女二柱の神樣が美斗能麻具波比をされた時も神意を承けてなさつたので、決して私でない。伊邪那岐神樣は御自らの思召でなされたのではなく、天の神の御意を承けてなされたのであります。小さい我々の尋常の事件に、非常に深い廣い根柢を見出さずには止まないといふのが、この日本人の性格であるといふことが窺はれるのであります。男女の交といふことについても、それは當事者の意志で出來るのでない。天地自然の心が動いて出來るのであるといふことであります。それが後に到りますと、あの緣結といふやうな思想も現れて來たのであります。昔からこの十月は神無月と申しまして神樣のない月と云ひます。ところが、出雲にまゐりますと、この十月は神有月、神樣がお出になる月と云ひます。どうして諸國と出雲の國とは反對なのか。この十月は諸國の神社に鎭座ます神々が皆出雲の大社にお集りになる、そして神樣の會議があるのです。御相談があるのです。この『十七條憲法』の第十七條に、大事件は一人で定めてはいけない。皆が相談してやれ、といふことを敎へてお出になります。日本の國は何でも大事件が起れば八百萬の神が御相談になるのであります。出雲の大社に寄つて神神が御相談をされる。その題目は何か。緣結びであります。日本中の男女の緣結びであります。

あの娘とこの息子、この娘とあの息子、といふやうに神々が相談せられるのであります。我々は自分で好きで約束して結婚するやうに思ふけれど、やはりこの自分の意志、或は自分の親とか友達といふやうなものの意志でなしに、まだ自分にわからん尊い大きな神樣の心が動いて、結婚といふものが出來てをるのであります。これは日本人の信心であります。結婚といふやうなことを考へてみれば、二人の人が一緒になる、簡單なことぢやが、その簡單なことが出來るといふのが、ただ出來るのでない。八百萬の神樣の思召によつてそれが定められるのであります。大きな背景があつてそれが出來るのであります。さういふことを外の言葉で云うたら、因緣・約束といふ言葉で云ふことが出來ます。私共が結婚する場合に、親類同志挨拶するとき、今度は何といふ不思議な御緣で、と云ふ。因緣といふことは日本人は、神の結ばせられた思召と味うてをるのです。ちやから伊邪那岐神・伊邪那美神の御交も、すべてが天意を承けてをられるのであります。

詔を承ける、といふことは後になりまして天照大神の御上にもあります。天照大神が高天原にお出になつたとき、その頃豐葦原の瑞穗の國は須佐之男命の御子孫の大國主命——出雲の大社の御本尊が治めてお出になつたのであります。ところが或日天照大神に天神の詔があつた。この豐葦原の國は爾の子孫の治むべき國だ、ちやからゆいて治めしめよ、かういふ天意を承けられたの

であります。そこで天照大神は天意を畏んで、その天意を人間世界に實現するために、先づ思兼命――天岩戸隱の時の會議にいつも相談柱となつた神樣です。この智慧の神樣をお招きになつた。そしていろいろ考へさせられました。それから八百萬の神を集め集會を開かれました。そして相談をせられました。思兼命は道理の上からそれを考へて、よろしからうと答へ、八百萬の神はどうかさうしていただきたいとお答へ申した。ここに天照大神の御心に決定を得られまして、それから徐に大國主命の許に使を遣はされ談判をされるのであります。先づ使を送られました。その使の返事がなかつたので又遣はされ、再三の相談の上、遂に建御雷神が使に立たれました。建御雷神は命がけの決心でお話合をされましたので、平和の裡に話合が調ひました。大國主命の御子建御名方神などともすべて心が一致して、この豐葦原の瑞穗の國は天照大神の御前に捧げられることになりました。

そこで天照大神は御孫邇々藝命をこの國にお降しになりました。そしてそのお考のもとに治められるやうになつたのであります。それが萬世一系の天皇陛下の御先祖であります。このことを承りますと、やはり天意を承ける、神の詔を承けさせられるといふことが根柢になつてをるやうであります。それが後に神武天皇の東征せられますときも、天地の神々の詔を承けさせられます。

又大和の方にお出の際にも、初は御兄君が敗れられたときに天意を承けられました。日に向うて矢を放つたから悪いのだといふので難波から船出をして紀州の方をお廻りになつた。そして大和の方にお出になつたのであります。そして遂に大和の橿原宮に御即位遊ばされ、日本國の基礎をお建てになつたのであります。この神武天皇の御一生をみましても、常に天意を承けてお出になります。

それから後に又神功皇后が三韓征伐を遊ばされるときも、やはり詔を承けさせられたのであります。仲哀天皇は神功皇后と共に、竹內宿禰を總大將として、熊襲征伐に九州へお下りになりました。天皇が香椎宮にお出になつて、神にお祈りになつた。天皇は琴をおひきになり、武內宿禰は神の命を請ひまつつた。ところが天照大神が神功皇后にお移りになつた。そして仲哀天皇に對して詔をされました。「この海原の向うに國がある。それを討たにや熊襲は平がぬ。」といふお告であつた。ところが仲哀天皇はかしこまりをなさらんで、「海原を見たつて向うに何にも見えぬ。」と琴もおひきにならんで、所謂口答をされました。さうしたら神樣は、さういふことをいふ者は一道を行けとおつしやつた。一道を行けといふことは、死を選べといふお心ださうです。死んでしまへとおつしやるのです。武內宿禰は天皇にお琴あそばせとすすめたら不精不精おひきに

なつたが、だんだん音が細つて、遂に聞えなくなつた。天皇はそのままおかくれになつたのであります。神功皇后は又天意を受けて、御喪を祕して朝鮮にお渡りになつた。そして朝鮮を平定してお歸りになつた。といふことが記してあります。

伊邪那岐・伊邪那美神は國の初、天照大神も國の初、神武天皇も國の初、神功皇后は海外發展のとき、すべて神の詔を承けて決行されたのであります。御代御代の天皇陛下も常に天の神樣の思召を承けさせてあることを窺ふのであります。

天地の神の聲を聞くといふのは、我々の肉體の耳で聞くのでありません。肉體の耳でない心の耳で天地の神の聲が聞えるやうになるのであります。それを思ふとき、私はギリシャのソクラテスのことを思出します。ソクラテスといふ人は、ギリシャのアテネの人であります。今から二千三百年ほど前の人であります。西洋哲學の開祖と崇められてをる人であります。このソクラテスは、青年時代にデルフォイの神樣にまゐつた。そして神殿の入口に「汝自身を知れ」といふ神の言葉が書いてあつた。それを見て、それから自己を知ることに一生懸命につとめ、七十三で死ぬまでその道に勵んだ人であります。彼がだんだん自己內省の道が進んでくるときに、常に、この自分の內心にダイモニオンといふ神樣の聲が聞えて、何でも自分が惡いことをしようとするとき、それはいけないぞ、さういふことをやつてはいけないぞ、さういふことを云うてはいけないぞと禁止の命令を下されることを感じたのであります。そのダイモニオンの神がいけないとおつしやるときには、自分はいつもその詔を謹み順うてきた、といふことを云うてをられます。これはやはり內心に神の聲を聞くのであります。

それから親鸞聖人の御信心のお味のお聞かせをいただいてもこれに通じたお味を承るのであります。それは南無阿彌陀佛であります。あの南無阿彌陀佛といふことは、サンスクリット卽ち印度語です。その南無といふ言葉を支那に直せば歸命となります。その歸命といふ言葉を古來の學者に聞きますと、三通りの講釋があります。その第一は、歸といふのは據所で、歸る、還元の意味、命といふのは、命の本源、命數といふやうな意味で、天地自然の大道に歸るといふことが歸命である。それで南無阿彌陀佛と云へば、阿彌陀佛に歸るといふことが歸命である。佛の心に歸るのである。かういふのであります。それから第二の解釋は、歸は歸投です。打ちかける、投出す、命は生命で、命を投出す、といふのが歸命といふことである。それで南無阿彌陀佛とは、阿彌陀佛の前に自分の命を投出すといふことである。かういふ味であります。第三の解釋は、歸命の歸の字は、敬順、敬ひ順ふ心、命の字は、命令、仰であります。それで歸命といふのは、命に

順ひ仰に順ふことであります。そこで南無阿彌陀佛といふことは、阿彌陀佛の仰に順ふ心である。かういふ味であります。

この第一のお味をした人は西山派の顯意といふ人であります。この人は善導大師の『觀無量壽經』の講釋の講釋の書物『楷定記』の中に書いてをります。それから第二の解釋をした人は、鎭西派の良忠といふ人です。この人は、善導大師の『觀無量壽經』の講釋の講釋を書いた『傳通記』の中に書いてをります。第三番目の解釋は、まさしく親鸞聖人のお味であります。之は『尊號眞像銘文』や『敎行信證』の行の卷に書いてあります。歸命の歸は敬ふ心、命は仰だといふことは支那でも『起信論義記』を書いた僧肇の議論と同じことであります。親鸞聖人はそれを受け傳へて最もはつきり味うてお出になるのであります。むろん、南無といふと、佛敎では佛樣の心に歸つてゆくといふ味もあります。又命を佛樣の前に投出すといふ味もあります。それで親鸞聖人は命を佛樣の前に投出すといふことはただ投出すのでない、それは佛の仰に順ふ一つだ。先手の呼聲があるのだ。我がかしこくて佛樣の命に歸るのでない。命を投出すのでない。なかなか佛樣の命に歸る人はない。それがさう出來るのは、佛の先手の呼聲が聞えたからである。だから、我々が佛に歸る、佛にすがりつくといふその前に、佛の仰が聞えるのです。

法藏菩薩は初め國の王樣であつた方だが、世自在王佛の敎を受けて、王樣の位にをつても佛樣のやうな明かな日暮が出來ぬ、それで佛樣のやうにありたいといふ願を起された。そして王位を捨てて修行者になられた。御名を法藏菩薩と申します。それから世自在王佛の御許に行つて、御足を禮拜し、お德を讃歎した後に自分の願を述べられた。それが『無量壽經』の中にある偈文で歎佛偈というてをります。

光顏巍々として威神極りましまさず。是の如きの餘明與に等しき者無し。日月摩尼珠の光の餘耀も皆悉く隱蔽せられて猶し聚墨の若し。如來の容顏は世に超えたまひて倫無し。

と稱へられ、その次に、

正覺の大音は響十方に流る。

と仰しやつてあります。佛の悟らせられた悟の大きなお聲は十方に流れる、といふことを語つてお出になります。自分にその聲が聞えてをる。佛のお聲が聞えてをるといふおよろこびなのであります。佛のお姿を見、佛のお聲を聞いてをる。この佛の聲を聞く、さういふ耳が開けるのです。だから我々が御信心をいただくとは、阿彌陀如來の仰が聞える、勅命が聞えることであります。それは肉體の耳に聞えるのでない。心の底に聞えるのです。善知識の言葉の下で佛の聲が聞えて

來るのです。さういふ耳が開けるのです。

四十八願の中に、天耳通の願があります。勝れた耳を得たいといふ願です。それはたくさんの佛の國々の佛の聲を聞く耳を得たいといふ願であります。外の聲を聞くのぢやない。佛の聲が聞えるやうになるのです。ともすると我々の耳は佛の聲を聞かないで、とんでもない雜音ばかり聞いてをることがあります。「心ここにあらざれば見れども見えず、聞けども聞えず、食へどもその味を知らず。」といふ言葉があります。心の耳が開かれないと音響がひびいてをつてもそれが聞えない。そこは妙なものです。

先年私は福岡縣の木屋といふ山村へゆきました。ずつと溪流に沿うて上つてゆくのです。溪川の橋を渡つたとき、橋の下に河鹿が鳴いてをつた。非常によい聲で鳴いてをつた。「この邊に河鹿がをるね。」と云うた。一緒にきた人はわからない。「河鹿て何ですか。」「河鹿つて蛙の一種で、いい聲で鳴くものだ。ほら今鳴いてをる。」「え、どこに鳴いてをりますか。」「どこつて橋の下に鳴いてをる。」「へい。」「へいつて君聞えんのか。」「はい、どんな聲で鳴いてをるのですか。」「君は聾かね。」「いいえ。」「聾でなければ聞えるはずだ。ほら今鳴いてをる。きゆろきゆろと鳴いてをる。」「はあ、あれですか。」「あれですかつて、先からあんなに鳴いてをるのに聞えんだのかね。」「今やつと聞えました。」と云うてをつた。響はある、耳に振動は傳はつてをるが聞えんのだ。音樂を聞いてもさうだ。耳に入つても心が開けなければ駄目である。

四國の新居濱へ行つたとき郭公の聲を聞いた。「この邊に郭公がをるね。今鳴いた。」と云うたら「この邊にも郭公がをりますか。へい。」「へいつて、君は聾か。今鳴いたよ。」「さうですか、一向聞えません。」と云ふので郭公の鳴聲の眞似してやつたら、「あ、あれですか。」「先から度々鳴いたが聞えんだのかね。」と云うたことであります。

佛の仰を聞くとは聞く耳が開けるのです。我々は普通小さい人間の小ぜり合ばかりを聞いてをる。そしてそれで心を滿してをる。が、佛の大きな智慧と慈悲がいただけると、佛のお聲が耳に入つて、力強い、穩かな聲が聞えます。だから、わしはお前を見捨てんぞ、と十方衆生に呼びかけられる佛の大きな聲が聞えるやうになると丈夫なものです、力強いものです。けれどもさういふ丈夫なものはをらんのです。かうするとどうなるのやら、世の中はかう不景氣でどうなるのか、さういふことばかり氣にかけてをる。所謂天意が聞えんのです。小さい人間の響しか聞えんのです。全運命を支配する大きな天地の聲が聞えれば丈夫なものがあるのです。ともかく自分の心の中に仰が聞える、詔が聞えるといふことが大切なことです。信心といふことも、佛樣を信ずると

いふことも、佛の聲が聞えるやうになることです。阿彌陀樣の聲が聞えるやうになることです。昔のありがたいお同行の中に、「はい、はい、南無阿彌陀佛。」と返事をしながらお念佛を稱へてをる人があります。誰かに呼びかけられたやうに返事をしてをる。これは內心に或聲が聞えるのです。

親鸞聖人が南無の二字に、仰に順ふといふお味をせられたことは、全く日本の國民性に基いてお味ひになつたことと味はれるのであります。神々の時代からの國民性には自分で動かない、天地自然の道理に動かされ、必然に動いてゆくといふ信念があつたのであります。私はいろいろの書物のお育にあづかつたので、かういふ一つの覺悟を持つてをります。右へ行かうか、左へ行かうか、と迷うたとき、そこにぢつと立つてをる。どこへも行かぬ。ここへ行かにやならんといふ必然が動いてくるまでぢつとしてをる。向うがはつきりして、何でも行かにやならん必然が動いてくれば行くのです。その時は向うにどんな難儀があつても顧るところでない。その必然の動くままに進んで行くのです。これは全く清澤先生のお敎であります。

清澤先生の許へ何か相談に來る、例へば、中學の先生をしてをる人が、「どうも今をる學校は面白くない、どこそこへ變らうと思ひます。どういふものでせうか。」と御相談すると、先生は「やめなさい、それは今の方がよいですよ。」とおつしやる。それから又、「私はかういふ人を見出しましたから結婚しようと思ひますが、どうでせうか。」とお尋ねすると、「やめなさい。」とおつしやる。何でも先生のところへ相談にゆくと、きつと「やめなさい。」と云はれる。私は先生に、「どうして先生は何でも人がやらうか、やるまいかといふことを相談すると、きつとやめなさいとおつしやる。なぜやれとおつしやらんのですか。」とお聞きしたら、「さうだ、自分に相談してくるやうなことならまだその人の決意が弱いのだ。そんな弱い根性を持つてやつても仕方がない。ぢやからやめなさいと云ふのだ。まだ惑うてをるのだ。本當に必然が動いてきたら、わしに相談せぬ。人に相談せにやならんといふことは、あまりろくなことでない。」とおつしやつた。これは一樣に聞かれません。例へば、元寇の亂の時に、支那が攻めて來た。北條時宗は禪坊さんに尋ねた。蒙直に進前せよ、思ふ通りにやりなさいと云ふ敎を受けて力强く支那に當つたといふことであります。これはどうしようかと云つた時、やれと力を與へたのです。これはよい。これによつてその人は天地の命を感得することはあります。清澤先生がいけない、とおつしやつたのは、そこに天意を受けよといふ敎であります。

ともかくも、我々は何をしても自分の中心に、かうやることが天地の神々の思召に適ふことだ

といふ坐り、確信、たしかなものがなければなりません。親鸞聖人は念佛の道をお味ひなさるについても、この念佛の道は、天神地祇も敬うて下さる道だといふ確信をもつて、そこに丈夫な心で進まれました。我々は何かやつても、俺はかう思ふが、どうだらうかと思ふやうなことでは駄目である。天地自然の神が、わしにかく思はしめ、かく云はしめる、といふ確信がなければならんのです。それと同時に、又一面から云へば謙虛な心が大切なのであります。

更に親鸞めづらしき法をも弘めず、如來の教法をわれも信じ人にも教へ聞かしむるばかりなり。

と親鸞聖人はおつしやつた。これは佛の聲が現れ出て下さるのだ。明かに謹みのお心である。詔を謹む心であります。

かういふやうな御信心を味うて、私はこの第三條を拜讀するときに思ふのであります。ここに「詔を承けては謹め。」とある、この詔を謹めとは天皇の詔を承けて謹めとおつしやるので、思召を第一に聞くのです。天皇の詔は遠く皇祖皇宗よりの傳統の思召であります。「君言へば臣承る。」この君臣のことは第十二條の「國に二の君非し、民に兩の主無し。」といふところに萬世一系の天皇の教が出てをりますから、ここにはあまり詳しく申しません。ただ日本の國には上御一人がある、後は皆臣下であります。天地に分れてをる、その天地の分限が定つてをる。その君の詔を聞くのは、天意を聞くのです。天の御心、神の御心が天皇陛下を通じて我々に與へられるのであります。我々はいろんな議論をしてをつても天皇陛下が詔を下さつたならば一切の議論を打捨てて詔を奉體してゆくべきは勿論です。天意に背くことは滅の道であります。我々は謹んで天意を聞くのです。我々は天皇陛下に咫尺することは出來ない。陛下の御肉聲は聞けない、これをどうして聞くか。日夜に詔を承けるのであります。それはやはり肉の耳ぢやない。魂の耳が開かれるとき毎日天意が傳つてきます。私共は君の詔を耳で聞くのでない。もう一つ底の心で聞くのです。これは日本臣民としての自覺の上に大切なことであります。私共はいつも天皇陛下の御聲を聞く。そこに本當に進んでゆく道があります。日本の國に働いてをる者は、かうやることが陛下の御心に副ひ奉ることである、詔を承けて進むことであるといふ覺悟がなければ、何事も出來ないのであります。これは心の底に聞くのです。或人は、第三條は日本の國の天皇陛下に順ふのだと云ひ、第二條には佛を拜めといふ、何だか矛盾してをるやうだ、と云うた人があります。決して矛盾でない。三寶を敬ふといふ心から君の詔を承けることが明かになつてくるのであります。むしろ、三寶の教によつてはつきりと君の詔を謹むといふことが流出てくることを私は味ふのであります。

ここに注意すべきことは、第一條に貴め、第二條に敬へ、第三條に謹め、といふことを聖德太子が我々に敎へられたことであります。尊いものを貴み、尊いものを敬ひ、尊いものを謹むといふことを敎によつて習ふのであります。だから尊いものの本源が、敎の師匠であるといふやうにも味はれます。謹むとは、まさしくかしこみかしこむ心です。いやしくも事をしない。一擧一動謙虛な態度でやるといふことであります。和と云ひますと、馴れすぎることのやうに思ふが、さうぢやない。本當に和いだものには、敬が出てきます。そしてそこに本當に謹があります。その謹の心が流出たのが第四條のお心なのであります。

第四講（下）

四に曰く。「羣卿・百寮禮を以て本と爲よ。其れ民を治むるの本は要ず禮に在り。上禮不きときは下齊はず、下禮無ければ以て必ず罪有り。是を以て羣臣禮有るときは位の次亂れず、百姓禮有るときは國家自からに治まる。

第一條の貴むこと、第二條の敬ふこと、第三條の謹むこと、これが形の上に現れてくるのが第四條の禮であります。禮とは禮儀です。禮儀はその本の貴・敬・謹といふ心が形に現れたものです。例によつて本文だけで味うて、それから深く味ひます。

羣卿・百寮禮を以て本と爲よ。

羣卿とは、位の高い官吏達といふのです。百寮とは百般の官吏達のことです。群卿百官は禮を以て本とする。禮儀を貴べ。「信心をもつて本とする。」といふやうに、禮をもつて本とする。禮儀を亂さんやうにする。

其れ民を治むるの本は要ず禮に在り。

人民を治めてゆくといふことの本は禮儀にある。禮儀のない國は秩序が亂れる。國がよく治つてゆかぬ。

上禮不きときは下齊はず、下禮無ければ以て必ず罪有り。

上に立つ者に禮儀のないときは、下々の者はよく齊うてゆかぬ。下々の者に禮儀がなければ秩序が亂れるから自然と罪をつくる、禮儀のないことが罪の本になる。

是を以て羣臣禮有るときは位の次亂れず、

群卿百官の間に禮儀のあるときはその位置が亂れない。その時は秩序が亂れない。和合すると

いふことがともすると秩序の混亂を來すことがあります。睦じうすると馴れることがある。やはり人間の心の隙です。和の弊に禮を亂すことがある。「佛にも神にも馴るれば手にすることを足にする。」といふことがあるやうに、最も謹み畏るべき神佛にも、手ですることを足でするやうになる。これはお互に大切にすべきことであります。親子でも夫婦でも兄弟でも友達でも、あまり親しくなるとともすると馴れるといふ弊があります。馴れるときに敬がなくなる。馴れるときは敬はんやうになる。何ぞげになる。貴がなく、敬がなく、謹がなくなつたときに、却つて親しみもなくなる、それはどうかと云ふと、何ぞげに思ふ、輕んずるのですね。例へば師弟の關係にしても、その教をうけて先生を大事にする、大事にしてをるとその言葉に謹がある。それによつて自分が感化を受ける。敬がなければ通らん。ところが、それが馴れると敬がなくなる。さうすると、その言葉に禮がなくなる。だから教が受けられぬやうになる。さうすると自然に師といふものを失ふ。友達もさうです。友達が相敬してをる。それで何かなし遊び友達になる。互に輕んずると友達がなくなる。夫婦でも相敬うてをるときは、互に貴い教を受けて行けるが一歩越えると輕んずる。輕んずるといふのは、融合ふといふより所有する、自分の奴隷のやうに考へるのです。これは大事なことである。我々は一歩謬ると禮がなくなる。それをここにおつしやるのであります。

常に馴れないやうに、輕んじないやうに、禮を重んじ、秩序を亂さんやうにせねばならぬ。

だから儒教にも「君子は和して同ぜず。」といふことを云うてをります。和するとは和ぐこと、同ぜずとは苟も雷同せぬといふことである。心は和いでゆくが、理非直曲を明かにして、有耶無耶にせぬ。はつきりすることははつきりする。そこにやはり禮がある。ものをよい加減に仕舞ひつけぬ。明かにするものはして、そして互に和してゆく、といふことが大切なんであります。

百姓禮有るときは國家自からに治まる。

百姓といふのに大御寶といふ訓がついてをる。これらもちよつとしたことだが有難いことです。大御寶です。人民は御寶です。國の寶です。寶物です。最も大切なものです。『十七條憲法』をだんだん讀んでゆきますと、非常に一切人民を愛し貴んでお出になることが現れてをります。百姓を國の御寶とおつしやる。かはい子供をお寶といひます。私共の國では、子供に、お前はお父さんの寶か、お母さんの寶か、おぢいさんの寶か、おばあさんの寶かと聞くことがあります。一切の人民は國の寶です。いつか、死なれた山縣有朋さんが、憲法學者の上杉慎吉氏をあれは國寶的の學者だと云はれましたが、さういふのは國の寶であります。學者だけが寶でなしに、一切の百姓達が大御寶なんです。そこに日本人の上下心を一にするといふ心が窺はれます。百姓に禮がある

ときは、國はおのづから治る。皆の心の中に禮儀といふ基があつて、そして生活の上に禮儀正しくなつてをるときに、國家はおのづから治るのであります。

この第四條を讀みますと、私は佛教のことを思出します。同じ『十七條憲法』を讀んでをつても、儒教を奉ずる方は直ぐに儒教のことを思ふ。私共は直ぐに佛教のことを思ひます。聖德太子樣は佛教を學び、儒教を學び、それを日本の神ながらの道に融し込んで、この憲法をお書きになつたのであります。儒教の上にもこのすべての箇條の類文があります。又佛教の上にもあります。支那の方には『禮記』といふ特別な書物があります。四書五經といふその五經の中の書物でありまして、禮儀のことばかり書いたものであります。もともとこの禮といふのは、祖先を祭ることを禮と云ひます。天地を祭ること、お祭が禮であります。神々を祭る相が禮の本であります。支那では禮を非常に貴いこととしてをります。ちやから『論語』などで孔子は政の始はこの禮であるといふことを云うてをられます。

「民を治むるの本は要ず禮に在り。」禮は天地の神々を祭るのだ、それを祭ることが民を治める本であります。それを祭ることは政治と同じ意味になります。君が民を治められるといふことは、君御自身神をお祭りになることであります。天地の神々の詔を承けてお祭りなさる、それが禮です。それが人民を治めさせられる本になる。その心が人民に對して現れ、自分自身にも現れて、互に尊み合ひが起る。そのことから禮儀作法といふことはおのづから出てくるのです。

佛教の方から見ますと、禮といふことは、非常に有難く思はれるのであります。七高僧の第二番目の方は天親菩薩であります。親鸞聖人の崇められる方で、お釈迦樣がおかくれになつてから九百年目に、北天竺にお生れになつた方であります。この天親菩薩が淨土の三部經の心を得られて、自分の信心の味を書かれたお書物を『淨土論』と申します。三部經の心に通じてをるといふので、三經通申の論と昔から云うてをります。それを支那の梁の世の曇鸞大師がこれの註釈書『淨土論註』を書かれました。この中に初めて自力他力といふ言葉が出てをります。これは親鸞聖人の非常に愛讀してお出になつた書物であります。『淨土論』には何が書いてあるか、簡單に云ふなら、一心五念といふことを說いてあります。一心とは一つの信心、五念といふのは、五念門とも申しまして、一つの信心がどういふ工合に生活の上に現れてくるかといふことを書いたものです。一心五念といふことは、昔から味うてをります。『淨土論』の一番最初に

世尊我一心に盡十方無碍光如來に歸命し、安樂國に生れんと願ひたてまつる。我修多羅眞實功德相に依つて願偈總持を說いて佛教と相應したてまつらん。

に始り、

普く諸の衆生と共に安樂國に往生せん。

に終る偈文があります。この世尊我一心とは、天親菩薩の信心であります。心を一つにする、その一つの心がどういふ工合に現れるか、その一番先に現れるのが歸命であります。この歸命といふのは、禮拜門であります。盡十方無碍光如來といふのは讃歎門です。願生安樂國といふのは作願門であります。次の「我修多羅眞實功德相に依つて、願偈總持を說いて佛敎と相應したてまつらん。」といふところから淨土の有樣を書いてあるのです。これが觀察門です。「普く諸の衆生と共に安樂國に往生せん」は廻向門です。この五つを五念門と云ひます。禮拜・讃歎・作願・觀察・回向です。これは信心の實現の有樣です。信心を得た者は、先づ佛の前に禮拜する、そして佛を讃歎する、それから佛の國に行きたいと願ふ。さうなると佛になつたらどうだらうか、阿彌陀佛の國はどうだらうかと思ひ樂しむ心が出る。自分が樂しんでをるから人を誘ふ心が出る。これが五念門です。これが信心の現はれであります。信心が得られればすつと頭が下る。それが禮拜門です。歸命といふことは仰に順ふことです。詔をかしこむといふことは歸命です。據所を得ることです。その歸命の心が禮拜です。歸命の心があつて仰に順ふ、仰に順ふ心があるからきつと禮拜することが出來る。けれども禮拜するといふことがただ形の上だけならその中に歸命の心のないことがあります。けれども歸命があればおのづから禮拜といふ形が出ます。

人にお禮をするといふのにいろいろの仕方がありますが、印度では一番丁寧なお禮は五體投地のお禮で、すつと腹這うて寢る、手足を大地につけてひれ伏す、これが禮拜です。それから稽首作禮といふときには首を下げて相手の足をいただく。それから合掌であります。禮拜の形は國々でいろいろ變つてをります。帽子を取るお禮、手を下げてうつむくお禮、これは日本などであります。ローマ法王の前に行くと、足に接吻するのださうです。或はかがんで手に接吻する。チベットに行くと人に逢ふと挨拶の印に舌を出す。これはちよつと面白い。先年印度のダージリンへゆきました。ここはヒマラヤ山中の海拔八千尺程の高いところにある町ですが、そこでチベットの人が歌に合はせて躍るのを見せて貰うた。その歌が日本の歌に似てをつた。躍も日本の獅子舞のやうに面白かつたから、日本人だけで金を集めて花をうつた。ところが挨拶に來た。前に來てべろつと舌を出した。さういふことは書物で讀んでをつたが、その時始めて實際舌出しのお禮をみた。日本ではものを云うたあとにちよつと舌を出すことがあるが、あれはチベットから來たことかもしれん。しかし日本では舌を出すことは無禮になつてをる。チベットの舌出しのお禮は形は違ふ

が、そこに親しみ敬の心が含まれてをります。

『十七條憲法』によるとこの貴・敬・謹が形の上に現れて來るのは禮であります。本當に謹むときは頭が下ります。頭が下るといふことは憍慢の角が折れることです。素直な心です。心に頑張があつたのが取れるのです。素直になるとすつと頭が下ります。これは自然の表現であります。素直な順ふ心、崇める心持が禮になつて現れる。本々禮といふのは貴む心ですから、支那ぢや天地の神を祭るといふことです。佛教では尊い佛を禮拜する、拜む、これが一般人に及んでゆくのです。一切恭敬です。すべてを敬ふ。『法華經』に書いてある常不輕菩薩は、すべてのものを敬ひ尊んだ菩薩であります。すべてを佛樣のやうに敬うて歩かれた。それで常に輕しめない菩薩、常不輕菩薩といふ。これがいつの間にか眞似事になつたのであります。私共は鹿爪らしい形の禮は嫌ひです。何だか形ばかりの禮とか儀式とかはいやな氣がします。さういふやうなのは虛禮です。腹の中に何らの敬意のないのに頭を下げることがある。例へば商賣をする人がお客にぺこぺこ頭を下げる、こんな時には腹の中に何にも敬の心はないのだが、かうやれば儲かると思うて下げるのである。敬のために下げるのでない。儲けるために下げるのである。これは誤魔化しである。下げることによつて向うを誑かさうとするのです。だから眞實を求める者は虛禮虛僞は嫌です。

しかし眞實の禮は大切なことです。

いつか遞信省で新年の賀狀は虛禮だから廢止したらよいというたことがあつた。それで皆賀狀を出すことを止めた。私はその時思うた。その年はあまり年賀狀が來なんだから、今迄よこした人は虛禮でよこしたのだな、止めと云うたから出さぬ。それはをかしい。眞實で出すなら止めんでもよい。面白いです。自分に眞實があるなら止めんでもよい。人の送り迎へもさうです。いつか、曉烏先生は虛禮は嫌ひだから送り迎へをせんでおかう、といふ人があつた。送りたくないが送らにやすまんから送るといふのならいやだが、迎へてよくその人の顔を見たいと云ふのならよい。又送つて少しでも長く側にゐたいといふ心で、せめて停車場までででも、玄關までででも一緒にをりたいといふのなら睦じい心です。それは誰もいやでない。早く顔が見たい、一緒にしばらくでも長くをりたい、といふ心でするなら迎へもよい、送りもよい。がさうでないのがある。官吏などは、あの人が轉任して行くさうな、みんなが送つてゆくからわしも送つてゆかう。今度新しい人が來るさうな、みんなが迎へにゆくからわしも迎へにゆかう、と云うてゆく人がある。さういふのはおもしろくない。さういふやうな形ばかりの送り迎へは私は嫌ひである。

今年の夏私の友人の寺に夏季講習があつたので、一日話に行つてきました。その友達は京都か

ら或友人を呼んで話をして貰つた。その京都の友人とも私は逢うた。京都の友人がその日に發つのであつた。發ち際に私の國の方の友人が京都の友人の前へお禮を出した。お禮を洟紙のやうなものに包んで、盆にも載せずに出した。私はその時默つてをつた。國の友達はその京都の友達を驛へ見送りもせなんだ。それで後でその友達に逢うたから、その時に云うた。「先日は君は尊んでをる先輩をわざわざ京都から招いてあの態はどうした。他の者と違うていつも人からお禮を貰うてをる者が、洟紙に包んだお禮を出すといふことがあるか。」と云うたら「お禮の中があまり少かつたから……」と云つた。「少くて恥しければたくさんあげればよい。恥しいと云うて洟紙に包めば尙無禮だ。それに盆に載せて上げればよい。」と云うたことがあります。丁度その頃です。私は或村から招かれて行きました。村の軍人會・青年團などが皆一緒に開いた會で、たくさん集つてをつた。お話がすんだら、その村の坊さんが盆にも何にも載せんでひよつと何やら出した。私は目が惡いから「これは何か。」と聞いたら「今日のお禮です。」と云うた。葉書でも配達するやうに前においた。それで「これは誰が出した。君は村の何だ。」「私は村のもんです。」「君は村の坊主か。今日は村長はどうした。」と云うたら「はい、私が村長です。」と云うて前へ來たので「君は今日わしを招待したのだらう。招待した者がお禮を出さんか。君が持つて來んか。物を投げるやうにして何だ。一村の村長をしてをつてこんなことがわからんか。こんな無禮なことをしてよいか。」と叱つた。「何にもわからんから……。すみません。」と云うたので「わからんなら敎へて上る。もつと丁寧にしなさい。この暑いのに遠方からわざわざ來たのに、君が司會者だから君が禮に來ねばならん。ともかく、今日は禮はいらんから當前に禮に來なさい。」と云うたら「へい」と云うてをつた。翌日禮にきた。「よく來られた。それでよい。」と云うたことであります。この頃私は年を取つたから若い村長などに我がままを云ひます。さういふことでも私はきちつとやるべきものはやるのが當前と思ふ。あまり心安立てはよくない。どこかの村で、何でもありのままがよい、と云うたら、金をそのまま攫んで、ひよつとよこした。「どうしたのだ。」と云うたら「あんたはありのままとおつしやつたから……。」と云うた。さういふ工合に聞き損うては困ります。丸の裸と云ふことは、着物を脱いで裸になるといふことでない。それをさういふ工合に誤解するのです。

私の近邊の町にをつた商業學校の校長の細君の話ですが、郡長の家に寄つたら、どこへ行くと聞かれたので、曉烏先生のところへ行くと云うたら、「あこには面白いことがあるさうですな。裸になつて踊るさうですな。西洋間があつて、下紐まで解いてそこで踊るさうですな。あんたもそ

の仲間ですか。」と云はれたさうです。それで「そんなことはない。」と云うたら「それでも皆さういふぢやないですか。」「さういふことはありません。」と云うてもその郡長は皆さう云ふというて承知せられなんだといふ話である。なるほどさうだ。私はいつでも裸になれと云ふ。踊れと云ふ。さういふとその通り裸で踊出すと思うてをるのである。だからお布施を裸で出す。送つたつて送らんだつてよいといふやうに表面の言葉だけを聞いて、誤解するものがある。或時私の本を讀んでをる人が私の寺へ來られた。私の宅では本堂のお勤を大切にします。それをみてその人が、先生はかういふことをなさらぬ人かと思うてゐた。平生云はれることと矛盾してをりませんか。と云はれたことがあります。私の平素の話をさういふやうに聞かれては困ります。虚禮はいらんが、眞實の見える嚴かな禮は要ります。親しんで馴れないといふことが大切です。友達でも夫婦でも兄弟でも師弟でも、先程も申しますやうに、敬が形に現れると禮になります。禮があつて、互に亂れんといふところに自然に秩序があります。禮が亂れると親しみが阻害せられます。かういふことはよく氣をつけねばならんことであります。聖德太子は初の三箇條で極く親しく云はれ、四條目で禮をおつしやるのは、非常に御念の行屆いたことと思ひます。我々は本當に親しみ睦み、敬の心が起り、謹の心が起ると、そこに非常に謙虚な相が現れてきます。そしてそこに社會組織といふものが秩序整然として來るから自然と順序よく選ばれてゆくのです。信は一念に現れ、行は多念に勵むべしといふ御教訓などもさうした心持の上に味はれることと思ひます。

第五講（上）

五に曰く。棄を絶ち、欲を棄て、明に訴訟を辨へよ。其れ百姓の訟は一日に千事あり、一日すら尚ほ爾り、況して歳を累ぬるをや。頃訟を治むる者は利を得るを常と爲し、賄を見ては讞を聽く。便ち財あるものの訟は石をもて水に投ぐるが如し、乏しき者の訴は水をもて石に投ぐるに似たり。是を以て、貧民は則ち由る所を知らず、臣道亦焉に闕けぬ。

この第五條は主として官吏の方に對しておつしやつたお言葉であります。これをいただきながら私共は自分の生活の上にもよく考へさせていただかにやならんことを思ひます。

棄を絶ち欲を棄て、明に訴訟を辨へよ。

棄を絶ち、味は食物です。食物をむさぼる。人間がこの世に生きるためには、ものを

食べるといふことは大切なことであります。決して惡いことでありません。養になるだけのものはつとめて食べにやなりません。又、食べたいといふ心のあるのは、それが食べられるやうなからくりになつてをるのです。ところが親しい心から馴れるといふことになつて本の意義を害ふやうに、ものを食べるといふことが主になつて、それをむさぼるといふことになる。その本を忘れるといふことは誰でも陷りやすいところです。食過ぎ或は時ならんものを食ふといふことがあると、自分を害ふのです。だからその糞を捨てよとおつしやるのです。よく食へんで死ぬと云ひますが、食へんで死ぬ者も稀にありませう。が食過ぎて死ぬ者も相當に多いやうであります。だんだん世の中が贅澤になりますと、食物のむさぼりが多くなります。

昔、ローマ帝國の盛な頃に、むやみに食物をむさぼつた。そして腹が減らんで困つたのでその食べたものを吐いては又食うてをつた。さういふことが記されてあります。今日ではまだ吐くといふことはないが、その代りに藥品を飲む。消化藥を飲んでたくさん食ふ。かういふやうな傾があります。料理法でもいろいろ考へ出されてをります。そしてむやみにたくさん御馳走を食べる。支那の第一流の御馳走は七十八通り並べるさうです。先日北平へ行つたとき三十通りあまり卓の上に並んだが、隨分手數のかゝつた料理をたくさん出す。さういふことになるとどうしてもその御馳走を食べさすために多くの人がかかりはてにやならん。それにかかりはてる人は御馳走を食べずに働かにやならんことになります。さういふ風に御馳走を食べることは外のものを妨げ、自分も害はれるのであります。食物などにも餘程注意せねばならんです。食へん食へんと心配してをる人が往々あります。けれども最低限度で最少の勞力で食ふといふことは始終心がけてゐにやならんことです。支那人は日に四五錢で食ふ。そして相當に榮養分を取るといふことです。日本人は商賣をして、支那人と競爭しても、とても支那人に及ばんといふのは、全く日本人は生活費が高くなるからです。支那人は日本人より安いものを食べて榮養分を餘計とるといふことです。そこらに支那人の偉いところもあるのです。日本人も昔はお米に魚を食べてをつたが、近來は牛肉などを食ひます。むやみにいろいろのものを食ひます。これは大いに考へにやならんことだと思ひます。ここにはその糞を捨てよとおつしやつてあるのです。

「欲を棄て、」財とは多くはお金です。そのお金をあるが上に欲しがる。今日のやうな經濟組織になつてをると、大抵の願は金で換算することが出來るので便利なこともある。それで金を大切にする。金を大切にするといふことは結構なことであります。ところがそれを大切にしすぎるために、人と自分と融合うてゆけなくなることがある。人と自分と安らかさを得るための金を

持つて、却つて不安になるのは所謂欲をするからであります。貪欲です。相當のことをして金をとるのはよい。それを人をだまして取る、或は誤魔化して取る、といふやうなのはやはり貪です。財のほしみです。さういふやうな欲を棄てて、明かに訴を聞けとおつしやるのです。「食物のむさぼりがあつたり、財のほしみがあるとそれがために心を動かされて、公平に訴を辨へることは出來なくなるのです。ここに「明に訴訟を辨へよ。」とおつしやるのは、今日でいふ刑事上のことばかりでない。橋をかける、道路を直す、さういふことも訴の中へ入るのです。すべて上に對して云ふことは訴です。

第一の饗といふのを思ふと、御馳走政策を思出します。石川縣の金澤の私の檀家の人が知事附の車屋でしたが、知事さんは春先になると一晩に二箇所三箇所宴會がある、かういふ話をしてをつた。隨分ああいふ地位の人は宴會が多いらしいです。昨年或地方で晩餐會だといふので、或料理屋で開かれる宴會に招かれた。その時、なぜ費用をかけてかういふことをやるのか、と聞いたら、知事などが講演會だと出て來ないが、宴會に招くと出てくるからかういふ催をしたのである、と會を世話する人が語つてをられた。それでは官吏はやはり宴會が好きなのかね、と云うて笑うたことがあります。昭和四年にアメリカから歸つてきたとき丁度民政黨の内閣が出來たときであつた。緊縮でやかましい頃であつた。石川縣の知事が逢ひたいといふので逢うたら、どういふ工合にして緊縮をやつたらよいかと聞かれた。それで「まあ緊縮といふなら一番先にあんたが宴會に行くことを止めなさい。知事の宴會廻りを止めたらよい。あんたが行かにやよい。何でも知事など轉任すると料理屋のおかみさんや藝者が送つてゆくが、ああいふことはあまりよいことでない。そのくせ高潔な眞面目な人がその割合に送つてゆかぬ、そこに平生の交際ぶりが思はれるではありませんか。」と云うたことがあります。隨分宴會といふことが流行ります。官吏の宴會ばかりでない。民間でも村あたりに議員の選擧の時など飲まされるやうです。それを近頃選擧法で取締つてをる。私の村などでは、新年會をやると、會費よりも御馳走がたくさん出る。これは選擧の時のだといふと惡いからだまつて出す。この頃は選擧前後六箇月間内に宴會をするといけないといふので、六箇月後に飲む。丁度官吏が宴會で誤魔化されるやうに、人民も亦宴會で誤魔化される。そして心なき選擧をするのです。今日でも聖德太子の敎へがうなづけるのであります。人民は宴會政策に乘る、官吏も乘る、宴會で心を動かされるとは意地汚い話だ。

昭和四年に私の村の隣の町松任の農學校の同窓會に話をしてくれといふので話をした。私の國の方には地方の產業狀態を檢査するいろんな檢査員があります。丁度その農學校の卒業生あたり

で檢査員をしてをる者が多い。村の者の話を聞くと、檢査員がくると一杯飲ますために村費が何十圓とかかる。それに區長、村會議員が一緒に飲む。それでいろんな金がいる、と云ふことであつた。それでそんなものはいらんだらうといふと、いや油をひかにやいかん、かういふことを聞いてをるが、大抵この同窓會に出てをるあなた方のうちには檢査員をしてをらるる方がたくさんあることと思ふ。村に御馳走してくれる、その御馳走もあなた方を慕うて、懇意に心から饗應するのでない。さうしておかんと、云ふことを聞いてくれぬといふのでするのです。歡迎のためでない、買收のためである。さういふやうな御馳走は村の人がいやいやながらしてをるのです。あなた方はこんな御馳走がうまいですか。ビールの二本や三本飲みたいのですか。立派な男がどうしたのです。酒位飲みたいのですか。人が親切で下さるなら喜んで受けるがよい。いやいや饗應する酒を何で飲むのか。もつと元氣よくなられませんか。かういふことを云うたら、皆その日はいつも歸りに松任で料理屋で宴會があるのだが、どうも今日はああいふ話を聞いたら氣色が惡いから家へ歸る、と云うて飲まんで歸つたさうである。後で町の人に逢うたら、あんたがああいふ話をされるから町の損になつた。いつも會費二圓位の宴會をする、それに二次會をやる、それで何百圓も町へ落ちるのに、あんたのために損したと云うて町の人が笑うてをつた。かういふことが相當あります。

贄は隨分汚いものである。それを捨てよとおつしやる。

「それから欲、これは收賄です。勳章を賣つたとか、鐵道を食つたとか、さういふ問題が未に起つてをります。先度も福岡縣のあるところで、そこの一番金持の人が贈賄問題で刑務所へ行つてきた、その邊に私設鐵道がある。その鐵道を政府に買收して貰はうと思うて贈賄した。それで刑務所へ行つたのだ。或人は、あの人は私利私欲のためにやつたのでない。全く氣の毒だ、と云うてをつたが、私利のためにやつたのでも、公共團體のためにやつたのでも、同じことなんです。やる者も惡い、とる者も惡い。さういふものに味まされて、是を是とわからん、非を非とわからん、是を非にして、非を是にしてゆくものがある。それを聖德太子がお戒しめになつたのです。我々は食物や金のために自分の明かな智慧を曇らせる場合が大いにあります。我々の日常の行爲に隨分氣をつけねばならないのです。

印度のガンヂーといふ人は、國民に精神的の基礎を與へるにはサチヤグラハ卽ち眞理を把持することによる外ないと云うて、サチヤグラハ・アシラムを建ててをられる。サチヤグラハ・アシラムとはむづかしい言葉で云へば、「眞理把持の修道院」とでも云ひませうか。一種の學校のやうなものです。その學校の先生の資格を得るために守るべきことを六箇條にしてある。

一　眞理の誓
二　アヒムサ（非暴力）の誓
三　獨身の誓
四　慈味節制の誓
五　盗まぬ誓
六　所持せぬ誓

この中の第四の慈味の節制といふのが養を絶つことです。この慈味といふ中には、酒・煙草・茶・コーヒー・ココア・獣肉・鳥肉等の一切を含んでをるのです。それを却けるのです。それから第六の所持せぬ誓は私有財産を持つことを戒められたものです。私達ははつきりした心持になつて理非を見てゆかねばならんです。

其れ百姓の訟は一日に千事あり、一日すら尚は爾り、況して歳を累ぬるをや。百姓の訟は一日に千もある。一日でさへさうだに一年二年と年を累ねるときは數へきれんほど多い數に上る。

頃訟を治むる者は利を得るを常と爲し、

これは聖德太子の時代の官吏のことを申されたものであります。この言葉を見ますと、その頃さういふことをやつたものがあつたと思はれます。現代もさういふことはないだらうか。この頃訟を治めるものは、利――利益を得ることを常としてをるものはないだらうか。これはどうでせう。この頃の官吏政黨員といふやうな人達は所謂利權といふやうなものを得ることを欲しないか。官吏をしてをつたもので月給をそのまま積立ててをつても作れないやうな澤山のお金をためたものをる。それはどこか公にしない收入があるのぢやないかと思はしめられる。聖德太子はこの頃訟を治める者は、訟を聞いて何か利益を取ることが常のことになつてをることを戒められたのであります。

賄を見ては讞を聽く。

賄とは賄賂です。賄賂をみて訟を聞いてやる。たくさん持つて來ればなるほどと聞く。持つて來ん人のことは聞かぬ。今日の世の中とよく似てをります。しかし今日でもさういふことをしない人があります。私の知つた人に、この頃中學校長になつた人があります。地方の人は、あの人は、堅い人で物を持つて行つても直ぐ小包で返す、返へせんやうにしてゆくと、それと同じ位の價のものを返すといふことです。それを聞いて感心な人と思うた。又會社の重役をしてをる人

があるが、その家に訪問者がない。隨つてその家には菓子箱がない。私宅で逢はにやならんやうな仕事はせぬ。菓子箱なども持つて來れば返へす。なかなか高潔な人が日本にもある。しかしさうでない者もをる。あの人は賄賂で動く、あの人は少し持つて行かにや動かん、かういふことを間聞きます。さういふことは昔から流行つたことですね。今でも流行つてをります。私の村に面白いことがあつた。まだ私の父がをられたときのことです。本山から下つた佛さんは値が高いが普通の佛師の作つた佛様は値が安い。商賣人が安い品物を高く賣りつけようとします。或時一人の商賣人が安い佛像を高く賣らうとしました。村人は佛像を求めるときにはきつと私の父に鑑定を乞ふことになつてをりますので、商賣人は父によく云うてもらひたいと思つて、菓子箱をもつてきた。父は某が菓子箱をもつてきたのは、安い佛像をよいのだというてほしいからである。まあみんなで食べ食べというて若い者に食はしました。しばらくたつて村の者が、時にかういふ佛像を某が持つて來ましたが、本物かどうか見て下さいと云うてきた。父はそれは本物でないと言ひましたので、その人はその佛像を買ひませんでした。その商賣人が後に、あんたのお父さんのところへ菓子箱を持つていつてえらい損をした。食うて仕舞うてから惡いものは惡いと云はれるのですからたまりません。と云うて笑つてゐました。父のやうな藝當はよほど腹が坐つてをらにや出來ません。我々は餘程さういふことに迷ひ易い。例へば寺の世話をする人などでよからん振舞のある人に、それは惡いとはつきり言ふことはなかなかむづかしいことであります。恩人のすることを惡いと思ひながら忠告もせずにおくことは恩を仇で返すことになります。世話になればなる程惡いと思うたことは惡いと云はねばならんのです。それでこそ人の世話をやく甲斐もあるといふものです。本當の親切があるなら叱ることは叱らにやならぬ。叱らにやならんことを叱らんでおくことは、もしも叱つたら物をくれなくなるであらうと恐れるからであります。かういふことは實に不親切なことであります。かういふ心は賄賂を貰ふと同じことです。物によつて心を昧まされる。恐ろしいことです。かういふ點で寺の世話などをやく人が却つて適切な教をうけられぬやうになります。金持などの氣儘になるのは、周圍の人が彼の持つてをる金に媚びて、本當のことを云うてやらんからいつの間にやら高くとまるやうになつてしまふからであります。私共でも始終さういふやうな心持が起つてまゐりますので身慄ひするやうなことがあります。そんな心が起るときにそれを超えてゆくやうにさしていただきたいと思うてをります。

便ち財あるものの訟は石をもつて水に投ぐるが如し、

財産のある者の訴訟は、石を水の中へ投げるやうにすつと通る。これに反して、

乏しき者の訴は水をもて石に投ぐるに似たり。

貧しい者の訴は水を石に投げるやうに中へ通らぬ。金持の訟は通り、貧乏人の訴は通らぬ。

是を以て、貧民は則ち由る所を知らず、

さういふ工合だから貧しい民は由る所無し。少々無理であつても貧乏人に口はない。聖德太子はかう申されますが、今日でもさういふやうな傾をみます。聖德太子の時もさうだつた。貧乏人に口なし、これは聖德太子の非常に歎かせられるところであります。

臣道亦焉に闕けぬ。

さうなれば百姓を育ててゆかにやならん臣の道がここに闕ける。民が由るところを知らんといふやうになれば官吏たる者の道が闕ける。すべてが公明であれば貧民の訟でもよく聞かれるやうになる。隨つて人民は政府を信頼するやうになります。あまり不公明で貧乏人がものを云へん、貧乏人の訟が通らんといふやうになると、貧乏人の據所がなくなる。それぢや天子樣の思召を受けてをる政治家として道が立たんと云はれるのであります。

我々はこの章を讀みますにつけても、常に食ふことによつて、或は金錢によつて、自分の本心を昧まされるやうなことがあつてはならぬ。食ふことも惡いことでない。金も惡いものでない。がそれがために自分の大切な、行かにやならん道が穢されるといふことのないやうに常に氣をつけさせて貰はにやならんのであります。

第五講（下）

六に曰く。惡しきを懲し善を勸むるは古の良典なり。是を以て人の善を匿すこと無く、惡を見ては必ず匡せ。其れ諂ひ詐る者は則ち國家を覆すの利器たり、人民を絶つの鋒劍たり。亦佞しく媚ぶる者は上に對ひては則ち好みて下の過を說き、下に逢ひては則ち上の失を誹謗る。其れ如此の人は皆君に忠無し、民に仁無し、是大なる亂の本なり。

この第六條目は嘘といふことの恐しいことをお戒めになつたものであります。諺に「嘘は日本の寶。」といふことを云ひます。ところが聖德太子は嘘は國を亡す本だと云はれるのであります。嘘の中にもいろいろの嘘がありませう。が、諂ひ詐る――諂ふといふことは外面は柔かな言葉を使うて、內心は恐しい心を持つてをることです。外面は菩薩の如く、內心は夜叉の如しといふ、かういふのが諂です。これは非常に惡いことです。普通に良いことなら眞似でもよい、嘘でも良

いことならよからうといひます。これは一番悪いことであるとおつしやるのであります。

悪しきを懲し善を勸むるは古の良典なり。

勸善懲悪、善を勸め悪を懲す、これは支那の儒教の教でもかうです。又佛教の教でもかうです。「諸悪莫作衆善奉行自淨其意是諸佛教。」諸の悪を作す莫れ、衆の善を奉行し自ら其の意を淨する、是れ諸佛の教なり。昔支那の白樂天といふ人が縣知事になつて或縣に下つてゆかれた。その縣内に鳥窠禪師といふ面白い和尚があつて、いつも樹の上に坐禪をしてをられた。白樂天がその樹の下に行つて、「和尚の身危し。」と云はれたら、和尚が「お前こそ危い。」と云はれた。白樂天が「如何がこれ佛教。」と尋ねたら、「諸悪莫作衆善奉行自淨其意是諸佛教。」と申された。白樂天が「そんなことは三歳の童子でも知つてをる。」と云うたら、「三歳の童子でも知つてをるが、八十の老人も實行することはむづかしいのだぞ。」と禪師が申された。佛教といふのは悪いことをするな、よいことをせよといふ教であります。これにや異論はありません。どんな教でも教と云はれるものは皆これに結歸すると云うてよいのであります。悪を懲し善を勸める。悪いことはしていかん、よいことをせよ、これは古の良い典であると太子はおつしやるのであります。

是を以て人の善を匿すこと無く、悪を見ては必ず匡せ。

さういふことが昔の教にあるから、人が善いことをしたときは、これを表彰する。また悪いことをしたら、それは悪いぞと云うて、誰のすることでも正してゆくのがよい。善きを善しとし、悪しきを悪しとする。有耶無耶に葬らんやうにする。理非を正す、悪いことは悪い、善いことは善いと、はつきりしてゆくがよい。一方には和合してゆけと教へられるのでありますが、和合してゆくといふことは、ものをごつちやにしてゆく、ごたごたにしておく、朦朧としておくことでない。和合の中に、平等の中に差別をはつきりするのであります。

聖德太子はこの前置をおいて何をおつしやるのか。その自分の云はんと欲せられるところを次におつしやるのであります。

其れ詔ひ詐る者は則ち國家を覆すの利器たり、人民を絶つの鋒劍たり。

詔ひ詐る、うまい工合に云うて人の機嫌を取る、佛教で、兩舌・悪口・妄語・綺語といふ中の綺語にあたります。兩舌も悪口も妄語も悪いでせうが、ここには殊に綺語を戒めてあるのであります。「其れ詔ひ詐る者は則ち國家を覆すの利器たり。」詔ふ者は、國家を轉覆する鋭い器である。さういふ詔ひ詐る者によつて國家が轉覆されるのです。「人民を絶つの鋒劍たり。」もう一つ云うたら人民の命を絶つ鋭い劍であるといふのです。隨分ひどくおつしやつてあります。次に目上の者

と目下の者とに對する心得について數へられます。

亦佞しく媚ぶる者は上に對ひては則ち好みて下の過を說き、下に逢ひては則ち上の失を誹謗る。

佞しいとは奸佞なことで、腹の冷い者はうまく誤魔化してゆく。奸佞邪智、さういふ人は、上の人に向うては好んで下の者の過を云ふ、上官に對して下の者の惡口を云ふのです。又下の者に對しては上官の失を云ふ。さうだから人の中にはいつてうまいこと云うて操つてゆくのです。世には隨分かういふ人があるものです。面と向うてはよいことを云うてをつて、蔭でごたごた云うてをる。對立してをる。親子がをると、親に向うては、あんたの子供にかういふことがあると云ひ、子供に又親の惡口を云うて喜ぶ。そしてその中に自分が氣に入られていかうといふ、かういふやうな人が相當にあります。

其れ如此の人は皆君に忠無し、民に仁無し、是大なる亂の本なり。

かういふやうな人達は天皇陛下に對しては忠義がない。又人民に對しては仁情といふものがない。不忠である、不仁である。「是れ大いなる亂の本なり。」これは大亂の本だ、とおつしやるのであります。

この章を讀みますと、しばしば話しますが、ガンヂー氏のサチャグラハ・アシラムの規則を思ふのであります。ガンヂー氏は印度の獨立のために一生懸命になつてをる人ですが、印度の國がなぜイギリスの屬國になつたかといふことを論じてをられる。その中にかういふことを云うてをられます。印度がイギリスの屬國になつたのは、イギリスに無理があつたためでない。印度人自身がさうしたのである。何か外のものの支配を受けにやならん狀態にあつたのだ。だから、イギリスが支配せにやフランスが支配するか、スペインが支配するか、ポルトガルが支配するか、又印度人に支配されるにしても少數のバラモンのために支配されてゐたかもしれんのである。それをたまたまイギリスが支配するやうになつたのである。どうして印度の國が他の支配を受けるやうになつたのかと云ふと、その根本原因は、國民に眞理を把持する、眞實を守るといふ心がなかつたからだ。だから亡國の本は嘘であると云うてをられます。私は、國が亡びると力がなくなるから氣が弱くなり、壓迫されるからだと思うたことがある。因果はどつちかわからんが、嘘つくやうな誤魔化しの人間は獨立者でない。印度の國の人に眞理を把持する力がない、ただ目先のいいことを得て眞實を得ぬ。毎日その日その日のよささうなことをやる。だから印度は亡びるのだ。印度がイギリスから離れて獨立するのは國民にサチャグラハ、眞理を把持する、誠を把持す

る、といふ精神がなければ駄目である。これが國を興す本である。嘘詐は國を亡す本だと云うてをられる。そしてその眞理を把持するために、サチヤグラハ・アシラムを建ててをられるのであります。その學校の先生になる資格の六箇條は先程申しました。その第一條が「眞理の誓」であります。所謂サチヤグラハで、絶對に嘘を云はんのです。ガンヂー氏は興國の根本としてこのサチヤグラハの主張をしてをられます。

これは私共は自分を守ることでも大事なことと思ひます。自分を大事でないといふ者はをりません。私はこの頃身を大切にせよと皆さんに云ひます。手紙を書いても「御身お大切に」と書きます。やはりすべての人に對してさういふ氣持が起ります。どなたに逢うてもおからだをお大事になさいと云ひます。いろいろの點に大事にするといふことは云はにやならんが、自分を大事にするといふことには一番氣をつけにやならんです。自分を粗末にせぬ、粗末にせぬといふことは約束を守ることです。それは大事なことなんです。人と約束したときは必ず守らにやならぬ。ちやからいやしくも約束してはならぬ。約束をしたら命の限りそれを守らにやならぬ。人と約束したことをよい加減にして違はす、といふことは、その人の他に對して存在する値打を缺くことになります。偶話にさういふのがあります。或所に子供がをつた。野原へ出て大聲で狼が來た、狼が來た、と叫んだ。百姓達はてんでに持つてゐた鍬やら鎌やらを持つて飛んで來た。ところが嘘だつた。その次に又その子供は、狼が來た狼が來たと叫んだ。今度は又嘘かと思つて誰も助に來なんだ。その時は本當に狼が來たのであつたので、この子供はたうとう喰ひ殺されてしまつた。といふ話があります。これは自分自らが度々嘘を云うたために自分の存在の意義を失うたのです。

私の友人に極く詩人風の人があつて、人と約束してよく忘れる。人のところへお話に行くと云うてしばしば忘れる。しまひにその地方へ行くと、誰それさんは來て下さると云ふが、あの人は忘れるから廣告は出さん、迎にも出ぬ。さういふことにきまつてしまつた。その友人に、かういふ工合になつてをる、自分でもおもしろくあるまいから約束はきちつと守らにやいかんぢやないか、と忠告したことがあります。自分を大事にするというても、いつ行くと約束したところで、病氣になれば行けぬ。親や子や家族に重病人が出來れば行けぬ。だから、行けんことは稀にあります。けれども出來るだけ約束を守るといふことをしなければ、自分の存在が人の間に保てぬ。一遍金を借りて嚴重に濟さんと、あの人には貸せぬといふことになります。嚴重に返せば又何時でも借られる。その人といふものがはつきり出る。これは皆さんも既にお氣附のことと思ふ。氣附かん人に對してもさうです。親や子供に對しても、孫に對しても約束を守らねばなりません。

親が子供にお土産を買うて來てあげると云うて買うて來んと、お父さんの云ふことは何やらわからんとなる。さうすると、大事なことでもお父さんの云ふことはどうやら、といふのになつてしまふ。だから、いやしくも人と約束してはいけない。又したらそれを實行せねばならぬ。私は人と約束をする、その人がきちつと守つてくれぬと、どうもその人と相談が出來んやうになります。危うてならない。しかしその人を憎みもせぬ、責めも出來ぬが。何かもう一つしつかりしたものをその人に見出すまでは一緒に事が計れないのです。あの人は何を云うたつて、やるやらやらんやらわからん、今度はやらにやならんぞと云うたつて、わからんからしばらくその人のことを見てをらにや出來ぬ。私はさういふ工合に人から扱はれることは嫌ひです。だからなるべく約束を實行せにやならんと思うてをります。けれども時々その通りにいけんことがあります。これは大事なことと思ひ思ひ、自分で自分がはがゆいですな。かういふことは多いです。

誠を守らない。そこに詐が出る。所謂表裏不相應です。裏と表とが違ふのです。かうなるとその人が何を云うてをつても、ああの人か、かういふ工合になります。さうすると自分の存在がなくなるですね。だから詔ひ詐るといふことは、自分自身の存在を危くすることであります。ひいてはこれがために國も亡び、人の命も斷つことになる、亂の本だ、とお戒めになつたのであります。

ガンヂー氏が、嘘は亡國の本だと云はれたのはこれと同じ氣持なんであります。

嘘のないやうにしたいものです。例へば人が「あなた御飯を上りませんか。」と云はれたら、欲しければ、はい、いやならいやと云へばよい。ところが、欲しいのにいやといふ人がある。さういふことがわかると、いやと云うても、まああがれといふ、妙な習慣があります。御法事や嫁取りに、いやと云うてもたくさん飯を盛るのを強ひ飯と云ひます。いやぢやいやぢやと云ふのを強ひて盛る、それを食はせられる。あれはいつもほしいのを嫌と云うた罰である。ああいふことはいらんことです。嫌なら嫌だと云へばよい。欲しければ下さいと云へばよい。ところが欲しいものをいやだと云うたり、いやなものを欲しいと云うたりする、他所へ行つて、うまくないものをおいしいと云うたり、結構ですと云うたりする。まづいならまづいと云へばよい。今度行くと先度結構とおつしやつたからと云うて、又それを出される。さうするとあの人はそれが好きだからと云ふのになる。そして一生涯すきなものが食へんやうになります。私でもさういふことがあつた。これは私は嫌ひです、と、どうも氣の毒で云へん、と云ふ人がある。が始に氣の毒がらさにや次からすきな御馳走がいただけぬ。結構ですと云うてをると、うまかつたのだと思はれ、一生涯腹からお禮が云へぬことになります。だから始に甲を脱がにやならんです。あんたがせつかく

してくれたのですが、これは皆嫌ひです。と最初に云うてしまへば次からうまいものが食へます。人と仲よくしてゆくときは、是是非非、善い悪い、氣に入る、入らぬ、をはつきりしてゆく。そしてそれで向うにいやがられたら仕方がない。そのままをさらけ出したらよい。そして呆れられたらそれも仕方がない。丁度烏が孔雀になつたやうに嘘でかざつてをると白粉がはげるか、紅がはげるかといふ心配ばかりせにやならぬ。時々田舎へ行くと白粉がはげて斑猫のやうになつた顔をした人を見ます。塗つてをるとさういふことになるのです。詔ひ詐るのはお上手を持つてをるのです。人のことは餘計云はんでもよい。云ひたくなければ一時間や二時間は默つてをつてもよいではないか。人の顔を見ると、暑い寒いと云ふ、暑ければさういふもよいが、默つてをるのが變なものだから云ふ。云へば云ふほど變になる。ちつと睨んでをればよい。睨んでをつて疲れたら目をつむればよい。そこにをるのがいやならあつちへ行けばよい。何でもない。あんたのお國はどこですか。と心配でも何でもないことを聞く。それで覺えてをるのかと思ふとちつとも覺えてをらぬ。どつちでもよいことだから何遍でも聞く。問題にならんことを聞いてをるのである。そして人を輕んじ、自分を卑しくしてをる。つまり、詔うたり嘘を云うたり誤魔化したりする、これは他を輕んずると云ふより自分を輕んずることです。これは大事なことです。ガンヂー氏は嘘は國を亡すと云はれた。佛教には五戒と云うて、殺生・偷盗・邪淫・妄語・飲酒と云ふ五つの戒があります。又八戒とか十戒とか云うていろいろの戒律があります。その中には嘘詐を云ふことを戒めてあります。信心爲本とは嘘はいけないといふことであります。疑は嘘です。信心とは眞裸になることです。ありのままです。ありのままで出したら愛想つかされる、と云ふが、愛想つかされるものはつかされたがよい。捨てられるものなら捨てられた方がよい。それでもよしと相手になつて下さつたら、それを喜ばにやならぬ。うまいところばかり見せてをると、かはいがつて貰へば貰ふほど不安です。はげようかといふ心配がある。ちよつと見るとよささうな人でも側へ寄ると逃げる人がある。側へ人が寄るとつけたものがはげるかと恐しいのです。はげるものはげてしまへばよい。さうやれば人とつき合うてゆくにも安堵してゆける。それを誤魔化してゆくのは人を害し國を亡す本になるのであります。

第六講（上）

七に曰く。人各任有り、掌ること宜しく濫れざるべし。其れ賢哲を官に任すときは

頌むる音則ち起り、賢者官を有つときは禍亂則ち繁し。世に生れながら知るもの少し、
尅く念ひて聖と作る。事大と少と無く、人を得て必ず治まり、時急と緩と無く、賢に遇
うて自から寛なり。此に因て國家永く久しくして社稷危きこと勿し。故、古の聖王は官の
爲に以て人を求む、人の爲に官を求めたまはず。

聖德太子の『十七條憲法』のお話をつづけます。今日は第七條目であります。この一章は政治の最も大切なことは人であるといふことを教へられたものであります。何事をするにも人がなければいけない。殊に國の政をするには、上に立つ人によく道を悟つた人がゐなければならぬ。といふことを教へられる一章であります。これも官吏のためにお示しになつたやうであります。が同時に又我々一般にも教へて下さつたことと思ふのであります。

人各〻任有り、掌ること宜しく濫れざるべし。

人にはそれぞれ任――今日の言葉で云ふと任務です――がある。自分の持つてをる責任と申しませうか、その人その人に任されてをる務である。男には男、女には女の仕事がある。それが又その人で違うてをります。どこから與へられたといふ決つたことでなくても、官吏のうちでも、警察官ならかういふこと、學校の係ならかういふこと、兵事の係ならかういふこと、任務が分れますが、さういふ工合に他から與へられたことでなくても、家庭の上におきましても、自分のせねばならん一つの分擔とでも申しませうか、或は責任と申しませうか、さういふものがあります。それです。

「掌ること宜しく濫れざるべし。」掌るとは責任を果してゆくことです。任があれば責任があります。宜しく濫れざるべし、と云ふのは、責任を果してゆくのに間違はんやうにするのです。ところが我々がともすると自分の任、自分の任務を全うせずして、人のことをかれこれ喙を入れて、そしてその暇に自分の掌るべきことを怠つてをることがあります。さういふのは濫です。自らなすべきことをなさずして、他人の仕事に喙を入れたり、手を入れたりするのは濫です。さういふことのないやうにせよ、とおつしやるのであります。

其れ賢哲を官に任すときは頌むる音則ち起り、

ここに賢哲と書いてある。賢者哲人、賢も哲も智慧の明かな人です。理非曲直を明かに知つてをる人です。その賢哲を官に任すときは、官吏に任用するときは、「頌むる聲則ち起る。」皆喜ぶのです。この頌むるといふ字は頌德表といふときに書く頌といふ字です。結構だと皆が喜ぶのです。それはどうでかと云ふと、賢哲は皆の心をよく知る、すべての人の望を知るから、それ

を適はしてあげるといふことに骨折ります。それで自然と有難いことだ、結構なことぢやといふ聲が國の中に起つて來るのです。その反對に今度は、

奸者官を有つときは禍亂則ち繁し。

奸者――佞奸な人です。かういふ人は相當の智慧はあるけれど、その智慧は利のために曲げられるのであります。第五條に、今の人は皆利を得ることを常とするといふことを戒めてありました。「頃訟を治むる者は利を得るを常と爲し、賄を見ては讞を聽く。」といふことを申してありました。さういふ利益のために道理を枉げるやうな者が奸者です。さういふやうな人が官吏になつてをるときは、「禍亂則ち繁し。」世の中に禍が出て來る。また世の中が亂れて來る。ちやから治らんやうになる、とおつしやるのであります。

世に生れながら知るもの少し、尅く念ひて聖と作る。

「世に生れながら知るもの少し、」生れながらにしてものを知つてをるといふ人は少いのだ。「尅く念ひて聖と作る。」聖といふのは、聖人です。支那では孔子を聖人、孟子を賢人と云ひます。さういふ風に聖と賢とを分けてをるやうです。賢人といふのは、理非曲直を明かにする智慧のある人であります。聖人はその上に德の具つた人を云ひます。この「尅念作聖」尅く念ひて聖と作るといふことは、『千字文』にある言葉です。孔子も『論語』の述而篇に「我は生れながらにして之を知る者に非ず。古を好み敏にして以て之を求めたる者也。」と云うてをられます。これは、わしは始からものがわかつてをつたのでない。汲々として勉強して考へ、そしてだんだんわかるやうになつたのだ、かういふのであります。又『書經』といふ本の中に「惟れ聖も念ふことなければ狂と作り、惟れ狂も克く念へば聖と作る。」といふことが書いてあります。聖人でもよく念はねば狂になるといふやうな言葉などは非常に深い經驗から出た言葉と思ひます。

これらの支那の聖人の言葉をみますと、蓮如上人の『御文』に、「そのままにうちすて候はば信心もうせ候べし。しばしば信心の溝を浚へて彌陀の法水を流せといふことありげに候。」と教へられたお言葉を思出します。いくら立派な家を建てましても、掃除もせず、修復もしないで放つておきますと汚く壞れてゆきます。やはり「珠磨かざれば光なし。」です。立派な庭を作つても手入を怠れば駄目になります。北海道あたりの開墾地をみると、五年十年かかつて開いた水田も、三年作らんで放つておくと荒地となると云ひます。どんな立派な人でも念はずにをると――この念ふといふのは常に考へる、或は內省するといふことです。さういふことを怠つてをると狂うて來る。いい氣になつてをると倒れる、又、どんなつまらん人間でも、常に考へて內省してをるときつと

聖者になれる。これは非常に大切な教であります。

「世に生れながら知るもの少し、尅く念ひて聖と作る。」『無量壽經』の中には、「努力自求之」努力して自ら之を求むべし、とおつしやつてあります。又、「勇猛精進にして志願倦むことなかれ。」或は「至心に精進にして道を求めて止まずんば會ず當に刻果すべし何の願か得ざらん。」といふ言葉があります。精進する或は努力するといふことを返す返すお知らせになつてあるのであります。佛はただ佛になつたのぢやない。法藏菩薩の因位の修行が要るのです。五劫の間の思惟、永劫の間の修行を終て阿彌陀佛にならせられたのです。だから阿彌陀佛は始から佛樣でない。苦勞に苦勞を重ねられて佛とならせられたのです。

日本の神々はただ生れられたやうに思うてをります。しかしよく味ひますと、殊に伊邪那岐神は始終苦勞を重ねてをられます。思惟をしてをられます。ただぼんやりした方でない。天の浮橋に立つて夫婦が仕事をなさるにつけてもやはり天神の思召を承け給ふ。又國をお作りになつたときもいろいろの天意を窺はれる。その中に奥樣の伊邪那美神がおかくれになつた。非常に歎かせられる。黄泉の國へ奥樣をお迎に行かれる。そこで悲しい別がある。お歸りになつてから祓ひ清めの禊を遊ばす。始終いろいろの難儀に遇うて、その中から天意を仰いで修行をしてをられます。その骨折から天照大神がお生れになつた。その天照大神は又須佐之男命の難に遇はれ、いろいろ苦心をせられます。そして遂にこの豐葦原の瑞穗の國に天孫をお下しになつた。三種の神器をお授けになり、殊にその中の鏡を大切にして行けとおつしやつたところに、內省をせよ、思案をせよといふことを教へられました。殊にこの鏡に思兼命といふ智慧の神樣を添へさせられたことにも深い味があります。よく念へ、自分を省みよ、といふことは我が皇祖皇宗の御遺訓であります。それから出雲の大國主命の御傳記をみましても、大國主命はたくさんの兄弟の末つ子であつたが、よくお兄達に事へ、いろいろの難に遇うて、幾度も幾度も生死の巷に立つて、命がけの仕事をしてお出になります。その中にだんだん磨き出されて大國主命とならせられました。非常な修行をなされたのであります。日本の神樣はただぼんやりしてをられた方と思うてをるが、記錄をみますとさうではない。やはり修行をなされた方であります。

我々は報身佛を拜むといふ信心を持つてをりますが、報身佛とは報いられた佛です。因位の願から修行を經てそれから出來上つた佛が我々の本尊です。ただ天成にある法身佛といふ道理が本尊ではない。人のために現れた應身の佛も本尊でない。ただ因果の形を取つて願を起し修行をして、骨折から佛になられた、その相をこそ私共は鏡としてゆくといふことを先覺者が味うてをら

れます。これは尊い思召と思ひます。

この十八日にアメリカのエヂソンといふ人が八十四歳の高齢で亡くなられた。二十一日にお葬式がありました。アメリカの大統領フーバー氏の提議で、アメリカの全國民が、十時に一分間の消燈をして默禱をしたといふことが新聞に出てをりました。アメリカ全體の人が一分間電燈を消してエヂソンの最後を送つたといふことで、如何にエヂソンがアメリカに多大の貢獻をした人であるかといふことがわかります。エヂソンは電燈・電話・活動寫眞・蓄音機・ラヂオさういふやうな方面に非常に功のあつた方です。そのお蔭で日本の國の我々までが日々利益を受けてをるのです。だから現代十六億の人類の中に、エヂソン翁程たくさんの人に利益を與へてをる人はないのであります。私は先年アメリカへ行つた時に、わざわざニューヨークから五六里隔つたエヂソン翁の家の門前でお禮をしてきました。むろん逢はんだのです。友達が逢ふなら紹介狀を書かうと云うてくれましたが、朝から晩まで研究してをられる方の暇を取らせるのはお氣の毒と思ひ、門前で敬禮を表してきたのでした。かういふことはよく考へにやならんことです。田舍から東京へ出て行つて、その人の顏を見るために用事もないのにわざわざ面會を求めて人の時間を費さすことは氣をつけねばならんことです。大きな仕事をする人は一分間でも大切なのです。それを單にお禮を云ふだけに時間を費させるのは氣をつけねばならぬことである。敬意を表すならその門前で禮をする、或は簡單な手紙を出す。そのお禮に門前へ行つてくる位が非常によいことと思ひます。私はさういふことを思うて行つたのです。

ちよつと今思出したのですが、東福寺に敬仲といふ人がありました。今から三十年程前に亡くなられた方です。その頃天龍寺の滴水といふ人が修學院に病氣で寢てをられた。修學院は叡山のちよつと下で東福寺は稻荷の側ですから二里ほど離れてをります。今のやうに電車はなかつた。敬仲師はてくてく歩いて修學院に滴水師のをらるる處まで行つて、玄關で、東福寺の敬仲が見舞に來た、お前もいいころ加減に死んでもよいと告げてくれ、と云うて又てくてく歸られたといふことである。極く若い頃にこの話を聞いて貴いことと思ひました。わざわざ足を運んで行つて、そして逢はんで來る。單に逢はんのがよいと云ふのでない。そこまで足を運んでをるのである。足を運んで行つたところに充分心が滿ちてをります。滿ちた心で行きながら逢はない。そしてどこまでも滿ちた心で、お前もいいころ加減に死んだらよからう、かういふ言葉を殘して來られた。私はその親切に感じたのであります。さういふことを思うて、エヂソン翁の家の門前で禮をしてきたのであります。今度死なれたといふについても、深い感謝の思が湧くのであります。エヂソ

ン翁はああまでたくさんの人に利益を與へてをらるるといふことは尊いことであります。

この偉大なエヂソン翁も學校ではあまり成績がよくなかつたさうであります。この子は成績があまりよくないと云うて退學にされた方だと云ふことです。數學なども大へん成績が惡かつた方ださうです。お母さんが一生懸命に教へられたと云ふことです。エヂソン翁は非常な勉強家で、或發明をされる時に、一日二十四時間のうち、休む時間は四時間で、あとの時間を研究にあて、それを一年つづけられたといふことです。身體も丈夫だつたらうが、心が滿ちてをつたからであります。天才は一分で、努力は九分なければ出來んものだと云うてをられたさうです。『十七條憲法』の第八條に、よく働けといふことが出てをります。始からお大將になられんのです。よく勉めなければなられんのです。

生れながら知るものは少い、尅く念へ、とおつしやるのは、生れながら知るものは殆どないとおつしやるのです。私は馬鹿で御座います、と云ふ人がある。馬鹿ならもつと勉強せにやならぬ。どんなに出來るものでも油斷して勉強せんでをれば駄目になります。蓮如上人に或人が、「私はとてもものがわからん、聞いても保がなくて直ぐに忘れます。まるで笊のやうなものです。」と云うたら蓮如上人は、「笊でも水につけておけばいつも水がいつぱいになつてをる。お前も法の水の中につかつてをればよい。」とおつしやつたことがあります。法然聖人が「蓮臺に手をかけるまでは安堵の思をしない。」とおつしやるところは、「聖も念はざれば狂と作る。」といふことの反映であると思ひます。聖者は努力されます。むしろ、聖者は不斷に努力する人であるといふことも出來ます。

親鸞聖人の教を他力の教と云ひます。他力は寢てをつて來るものと思うてをる人がある。それは間違である。親鸞聖人が他力信心をいただかれるまで二十年の間、血の涙を流しての御苦勞をなさつた。法然聖人は三十年の御苦勞をなさつたのであります。他力は寢てをるのでない。本當に努力してゆくのです。骨折らにや御利益を得ることは出來ないのです。我々のやうなものは願も持たん、行も出來ん、と云ひます。願もない、行も出來んといふのは、餘程骨折つた人の云ふことです。我々はよく味ひもせんでさういふことを云うてもしようがない。一生懸命にやつてやつてやり拔いて、さて出來ん奴ちやといふことに氣がつくのです。それを始から何にもいらんのちや、寢てをつてよいのだ。寢たら寢ながら、起きたら起きながら、そのままのお助だと云うてをる。そのままのお助がわかるには、本當に骨折つてみねばならんのであります。

「生れながら知るもの少し。」これはちよつと氣をつけておくことだが、「少し。」といふことは聖

徳太子の常の筆法です。第一條にも「人皆黨有り亦達者少し。」第二條に「人尤だ惡しき者鮮し、能く教ふるをもて從ひぬ。」ここに「生れながら知るもの少し、」とあります。非常に圓滑な言葉です。達れるものは無い、とおつしやらない。達れるものはあるかもしれんが少い。甚だ惡しきものはあるかもしれんが、鮮い。ここには、生れながらに知るものは無いと云はれないで、少いとおつしやる。これをみますと、聖徳太子は非常に聰明な、論理を亂さんお方であつたといふことを思ふのであります。頭の粗雜なものは、何でもものを云切ります。かうに違ひないと斷定します。それはよく考へないからです。この頃でもよく生物學者とか進化論者は人間は猿から生れたものだといふことを斷定します。又天文學者は、太陽は廻らんが、月や地球は廻つてをる、かういふことを斷定してをります。さういふことを決つたことと思うてをります。ところが、さういふことは一つも決められんのです。或は人の性は善だとか、惡だとか云ひますが、さういふことも決められんのです。それはさういふ工合に考へられもするといふのです。さうと決められんのです。これだけの材料があつて、かういふ工合に考へられもするといふのです。だからさうでないかもしれんのです。だから本當の學者は斷定しない。例へばニュートンが萬有引力說を發見したが、わしはかう云ふけれども、これはたくさんの眞理の一部分だと云うてをります。まだたくさんの眞理があるといふのです。これが本當の學者の態度です。その時の材料經驗を合して、かう考へられることも、また材料經驗が殖えると、さうでないといふことになるかもしれぬ。これは非常に大切なことであります。經驗の狹い人は却つてよく斷定します。深く考へない人は早く結果を斷言します。私が八つ位の時婚禮の席に招かれて行きました。どうして親達がやつたのかしらんがともかく招かれて行きました。家へ歸つたら父から「お前嫁さんの顏をみたか。」と聞かれたので、「はい」と返事したら、「美しい人だつたか。」と聞かれた。「お母さんを殘したら村で一等だ。」と云うたことを覺えてをります。お母さんを殘したら村で一等だと思うてをる。子供の間はあまり餘計のことをしらんから、その晩お嫁さんが白粉などつけてをるのをみてさう思つたのだらう。子供は面白い。

よく田舍へ行くとあれは日本一だ、世界一だと云ひます。都城のお西の寺が日本一の鐘を作つた。お東の寺は又それより一寸大きい鐘を作つた。そして、世界一の鐘だと云うてをる。さういふものは京都へ行けばいくらもあるが都城ではさうだ。何でも智慧の淺いものは斷定しようとする。かうに違ひないと云ふ。が、さういふことは云へんです。どんな學問の本でも斷定してをる本ならそれは嘘です。若しも斷定といふことがあつても、これだけの材料でかう考へられるとい

ふ斷定でしかないのです。お釋迦様を例に出して今更めきて讃歎するのも御無禮であるが、お釋迦様は決して斷定せられません。『無量壽經』の中で、わしが今かう云うてをることは、髪の毛を百に割つたその一つの先から滴つた一雫の水のやうなもので、まだ云はないことは大海の水ほどあると仰せられてあります。だから釋尊のお經に現れてをる法は全體でない。八萬四千の法も宇宙の法に比べれば髪の毛の雫ほどのものに過ぎないと云はれます。今日の佛教徒はその又一部分の研究をして、これが佛教だ、と云うてをります。わしはこれだけ知つてをると云へばよい。もつとあるか、ある、無限にある。それが本當です。聖德太子はさういふやうな態度で斷定せられんのであります。「少し」とおつしやるのは、私には今日まで見當らんとおつしやるので、無いと云切られんのです。

先度或處で「幽靈が出たさうだ、大體さういふことがあるのですか。」と聞かれたので「あるでせうよ。」「へい、本當にあるでせうか。」「だからあると云うたでせう。」「あんたあると思うてゐるのですか。思ふも思はんもない、人が見たと云ふのに、私があるともないとも云はれぬ。自分が見たことがないかつてないとは云はれぬ。見た人に聞けばよい。」と云うたことがあります。或若い人が、「死んでから地獄や極樂はない。」と云うたから、「君は見たか。」と聞いたら、「いや、さう思ふのです。」「そんなら、あると思はんなら、あると思へぬと云へばよい。地獄極樂があると書いた人は、あると思ふから書いたのだ。だからないと思ふ者は、ないと思ふ、と云へばよいのです。」人間が猿から出た。猿の人間になりかけたのを見た者があるか。ない。さう考へられると云へばよいのです。家庭の爭もさうです。親爺はかうだといふ、細君はさういふことはないといふ。兩方が智慧のないくせに頑張るから爭になる。私はこれだけのことがわかる。俺はこれだけわかる、そんならもつと研究しようと云へばよいのだ。親子でもさうです。この頃の議會でもさうです。政友・民政にしても、一方がこれだけしかないと云うたら、自分らの調査はここまで、あちらの調査はここまで、それならもう一遍考へ直さう、それが議會の論議である。そして又考へて行けばよい。それを兩方がこれでなければいかんといふ。それが獨斷です。非科學的です。

聖德太子の智慧は滑かに、細いところまで氣がつかれます。だから「少い。」といふことがおつしやられるのです。「世に生れながらの知るもの少し、尅く念ひて聖と作る。」ないとは云はんで少い、わしは見たことはない、皆學んで至るのである。聖人だと云うても學んで至られるのだ。これはお互が非常に氣を附けにやならんことです。わしはつまらんものだ、と云うてをらんのです。始からお大將はない。つまらんと氣がついたら、人が一時間の勉强をするものなら、自分は

三時間も勉強して追附いてゆかうとする、その努力によつて聖者の位置に行けるのです。

事大と少と無く、人を得て必ず治まり、

大問題でも小問題でも、どんなことでも人を得て必ず治る。この頃は制度をどうする、制度が悪いといふことをよく云ひますが、さうでない。制度もよくして行かにやならんが、制度がよくなつても、それを運用する人がよくなければよく治らんのです。人を得て始めて治るのです。

時急と緩と無く、賢に遇うて自から寛なり。

その時の急なこと或は緩こと、時に緩急はあるが、どんな急ぎの場所でも、ゆるゆるした場所でも、自分の目が暗いとつき當る。が賢しき人に遇ふと順序よくやられる。急いでやつてをつても寛、ゆるゆるやつてをつても寛です。ところが不明な者のやつてをることはどうなつてゆくかわからんのです。急いでをつてもせかせか、ゆるゆるやつてをつてもせかせか、せかせかするのは暗い證據です。

此に因て國家永く久しくして社稷危きこと勿し。

聖賢が官にあるときかういふ工合になつてゆくから、國が亂れず續いてゆくのです。家を社稷と書いてあるが、社稷は支那の言葉で、本の意味は國土の神・五穀の神を云ふのですが、それが轉じて國家社會を云ふやうになつたのであります。國家永く久しといふときの國と社稷と同じ意味ですが、社稷といふと國家を尊んで云ふやうであります。この國家といふときは國そのものであり、社稷といふときは先祖の靈代といふことになります。それで、國と國の靈代といふやうに分けられたものです。

故、古の聖王は官の爲に以て人を求む、人の爲に官を求めたまはず。

それで、昔の立派な聖賢の王様は、官のために人を求められた。「官の爲に以て人を求む。」官といふものがあつて、その官の仕事を運んでゆくのに、人がなければよく運べぬ。だからいい人を求め探された。「野に遺賢無し。」で、いい人を皆用ひます。尊い王様といふものは、臣下に偉い人を持つてをります。偉い人を側に引き寄せてをる人が尊い王様です。賢者聖者を自分の身邊に寄せる。それは王様自身聖賢を尊ませられるお心からであります。聖賢を崇めさせられるお心でお側に招聘せられる。そしてその人達の心を聞いてゆかれる。でおのづから聖賢の德によつて國がよく治るのです。

「古の聖王は官の爲に以て人を求む、人の爲に官を求めたまはず。」人のために官を求められない。あの人がをるから、あの人のためにこんな官をこしらへよう。さういふ冗員をこしらへられ

ない。公を私のために左右されない。官を運んでゆくために立派な人を求めることは大切であるといふことを教へられるのであります。

この條で一番大事なところはどこちやらうかといふことを考へますと、皆が賢くならにやいけない。何を云うても官に立つ人が聖賢にならにやならんといふ御教であります。自らの心が賢しく美しくなつてをるときに身は修り、世は治る。どうしたらそのやうに聖賢になられるか。尅く念うてなるのだ。だから聖となることに心掛けて行け。自分が聖となれば、自らも修り、國も治る。人物が大事だ。といふことは單に國家の政治をやる人が眞劍でなければならんといふことばかりでなしに、皆が自分自ら立派になるといふことによつて、國が治るといふことも反面に深く教へられてあることを思ふのであります。

第六講（下）

八に曰く。羣卿・百寮早く朝り晏く退でよ。公事は盬靡し、終日にも盡し難し。是を以て遲く朝れば急なるに逮ばず、早く退れば必ず事盡さず。

この第八條は、「よく働けといふことを教へて下さるる條文と思ひます。第七條には「世に生れながら知るもの少し、尅く念ひて聖と作る。」學んでなるのだ。「學びて時に之を習ふ亦說しからずや。」と孔子は云はれます。ここでは、よく勉めよといふことを教へられたやうに思ひます。表面はやはり官吏に對しての御教であります。

羣卿百官は早く出て晏く退出せよ。早出の晩上りです。私等の方の百姓達の言葉に、あの人は早出の晩上りと云ふことがあります。又あの人は遲出の早上りといふこともあります。人々の風であります。官吏などは朝の出勤に遲く出て、晝から早く歸る人があります。朝早く出て晝から晩く歸る人があります。聖德太子は、早く參り晩く退れとおつしやる。早く役所に出て晩く退る。なぜさういふことをおつしやるのか。

公事は盬靡し、終日にも盡し難し。

天下のことはたくさんあるものだ。隙がないほどたくさん出て來るものだ。先の條文に、「百姓の訟は一日に千事あり、一日すら尙爾り、況して歳を累ぬるをや。」とありました。國家のことはたくさんある。「終日にも盡し難し。」朝から晩までやつてをつてもある。これですんだといふこ

とはないのです。

是を以て遲く朝れば急なるに逮ばず、早く退れば必ず事盡さず。

さういふやうにたくさん仕事があるのに、遲く出る。さうすればいくら早く仕事をやつたつて追附かないわけである。時間が少いからいくら急いだつて出來盡さず、早く退れば事柄がすまない。どつちしたつて事が出來ない。仕事をやつてゆくには、早く出勤して晩く退る、さうすれば仕事も片附いてゆく。かういふことです。私らには經驗のないことでありますけれど、或は會社でも、しまひの鈴が鳴ると仕事をさしておいて直ぐに仕舞つて家へ歸る風の人があります。それから仕掛けた仕事はきつと一通り仕舞をつけて歸る人があります。あれはまあどつちが當前であるかしらんが、時間の規定があるなら、規定通りやれば仕事は濟むが、それが自分のする仕事の中にも仕舞をつけんで、歸られないやうな時もあるのぢやないかと私は思ひます。上に立つ者はあまり長いことやつてをると、下の者は早く歸れんで困る、かういふこともある。餘程苦勞なものであらうと思ひます。この文字通りに皆實行出來るか、それは問題であります。

この頃は、何事も時間づくめになつて來てをる。勞働時間の問題もやかましい。或は十時間勞働にする、或は八時間勞働にする、或は六時間勞働にする、といろいろ議論が出て來ます。今日の勞働時間の問題も、資本主と勞働者との對立から考へられてくることが多いやうであります。株主から云へば、勞働者が多く働けば儲が多い。その儲を資本主だけが取る。だから働く者は働き損である。だから餘計働かんことを考へます。かういふやうなことが考へられてをります。又そこに衞生といふことも考へられます。人は何時間寢て、何時間働いて、何時間娯樂の時間を取つたらよい。かういふやうなことも隨分考へられてをります。さういふことを考へても惡いことはないが、今日のやうにあまりにああしたことを考へてをるのが衞生によいか惡いかわからんです。一昨年です。朝鮮の釜山に行つて、午前中に中學校で話をすることになつてをつた。中學校へ行きますと、その頃ヨーロッパの旅行から歸つて來られた、元東京高等師範學校の校長嘉納治五郎さんがその中學校に來てお出になつた。丁度嘉納さんの講話が濟んだところへ行つたので控所で逢ひました。七十五とか云うてをられました。非常にお丈夫です。何でもシベリヤ線で朝早く着いて、商業學校で柔道の講評をして講話をし、又中學校で柔道の講評をして講話をし、まだ講演するのだと云うてをられました。あなたはどういふ工合に衞生をやつてをられますか。と聞いたら、私には衞生法は別にないが、一日や二日寢んでもよいものだ。或は飯も仕事の工合で拔いても身體に障らぬものであるといふことを考へてをる。何時間寢にやならんとか、どれだけの時

間勞働すれば身體によいとか、いふやうなことを考へんでをるのが私の衞生法である。と云うてをられました。これは積極的な衞生法を知られんのかもしれんが、近代のやうに睡眠時間は何時間、勞働時間は何時間と杓子定規的に云うてをることは却つて身を害にするといふことを考へて、あいふことも精神に入れておいたらと思ひます。

よく、あなたの睡眠時間何時間ですか、と聞く人があります。私は考へたことがない。少々眠いときに起きても何ともない。寢不足は惡いと云ひますが、二日目に補へばよい。人間も時には寢不足などして無理するもよい。こなれのよいものばかり食うてをらんで、時にはこなれの惡いものも食うて、胃の腑を困らすもよいといふことであります。勞働時間も杓子定規的に考へんでよいことです。いくら働いてもその儲が資本主にみな取られてしまふといふことのあるやうな場合には勞働時間の研究も必要であらう。全體にいうたら、面白くて働く時間は長くても身體に支へぬし、いやいや働く時間は短くても身體に障のあるものです。又今日のやうに機械が發達して、機械のために人間の勞力が省かれる。だから、人間の勞働時間を少くする、そして人間らしい生活をするといふことの議論の出てくるのも當り前である。けれども紡績或は鑛山の機械的事業に使役されてをる人には勞働時間の規定は必要であるかもしれんが、機械に携はらん大工・左官或は單な會社に勤めてをる者まで何時間勞働といふことを一般に規定する必要がないやうに思ふ。機械的の勞働時間と一般人の勞働時間と餘程意味が違ふのです。それを一般的に考へてをるのは間違であります。普通はこの生活においては、やはり早く起きてそして晩くまで働くのがよいです。人の起きる時に起きて、人の寢る時に寢るやうなものは、當前のことしか出來ない。少し大きいことをして世の中のためになることをしようと思ふなら、それだけ多く働かにやならん。自分は頭が惡いと思つたら尙よく働かにやならん。よく百姓の人達は、星を戴いて出で、星を戴いて歸るといふことがあります。そこに自分の仕事に趣味が出て來る。さうなければいかんですね。いやいややると時間が長く感ぜられるものです。面白味をそこに發見するといふことが大事です。

七月朝鮮を廻りましたが、面白いことを見てきました。百姓のあの田の草を取るのは隨分いやな仕事らしいです。三番目の草取りになるとなかなか暑い頃ですから、私の國の方では皆いやがります。朝鮮で、晝からどんどんぢやんぢやんやつてをつたから、あれは何かと聞いたら、田の草取りだと云ふことであつた。一人の人が「神農遺業」と書いた大きな旗を持つて道に立つてをる。神農遺業とは、農は神樣の遺された業であるといふのです。一人は銅鑼、一人は太鼓、その銅鑼や太鼓に合して二十人程の人が踊りながら草を取つてをる。草取と踊と一緒だ。泥餡すくひとい

ふ踊があるが、ああいふやうに踊つてをる。草取に疲れると一杯濁醪を呑んで又やるのです。なかなか面白いと思うてみてきました。今でも田植唄を唄ひながら田植をしたりする。紡挽唄を唄ひながら紡を挽く風があります。紡績工場などでは女工が唄を唄うてをる暇がない。唄うてをると叱られるかもしれん。昔の人は唄を唄ひながら仕事をした。怒られても唄うてやる。よく學びよく遊べと云ふことがあるが、自分自分面白いといふことになると一番幸福だと思ひます。だから面白く働く。さうするとあまり疲れません。いやな仕事は時間が長い、好きな仕事は時間が短い。聖德太子の憲法の第八條は自分の仕事を樂しんでやるといふことを敎へられたものであります。

それからもう一つは、この箇條をお書きになるについても、如何に人民を大切にしてをられるかがわかります。皆が一生懸命に聞きにくるのだ、それを聞いてやれとおつしやるお心がよく現れてをります。第五條に、「財あるものの訟は石をもて水に投ぐるが如し、乏しきものの訴は水をもて石に投ぐるに似たり。」とあります。さういふやうなことから民の訴はよく聞いてやれといふ思召がよく現れてをります。國家のことは人民のことだからよく勉強してやれ。官吏は一般の人の迷惑にならんやうに勤めよとおつしやるのは、御自分も民の心を心とせらるるお心から流れ出るお言葉であります。世の中に運の取れんやうな訴のないやうに、事が溜つてをらんやうにと敎へられます。仕事が溜るといふことは、反面に熱心でない怠慢だといふことを語つてをります。擔當箱にせにやならん仕事を殘すのはよくないことです。私は會社などへ行くとひよつと目が擔當箱にゆきます。すつと側に行つてみる、殊に午後などそれがたくさん溜つてをると氣持がよくないです。その日に來たものはその日に裁決出來るものはした方がよい。よく何でもないことが溜つてをることがある。ああいふことは官吏でも會社の人でもよく氣をつけた方がよいと思ひます。ところが事の結末をつけんでおく。それが今日の官吏のやりかたであるのです。東京の或方が、あまり早くやると上官の目が光るから二時間の仕事を一日かかつてぶらぶらやつてをる。と云はれたので、そんなことせんで早くやればよい、と云うたら、それが出來んのです。どうしてです。早くやつて新聞でも讀めばよいぢやないですか。と云うたら、それがいかんのです。さういふことをしたら上官の目が光ります。それで一日かかつてぶらぶらやるのです。それほどつらいことはありません。と云うてをられた。それが官吏になる一つの修行だといふことです。妙なことです。會社などでも、朝から晩まで仕事をしてをるやうな顏をしてをる。それも頭が惡いなら仕方がない。一軒の家の針仕事でもさつさとやればよい。朝飯がすんで茶碗も洗はんでそのま

まにして雜誌を讀んだり、掃除もせんで新聞を讀んでをる細君がある。檀那が歸つて來るとあわててやり出す。昔カアライルといふ人のところへ或婦人が煩悶の解決を聞きにきた。カアライルは、あなたの手箱の絲の亂がないか、それを整理しなさい。さうするとあなたの煩悶はなくなる。と敎へたといふことであります。絲の亂を整理するといふことによつて煩悶がなくなる。絲の亂れをそのままにおくことが煩悶の心である。小さいことから仕舞をつけてゆく。これは私共もよく氣がつく。手紙の返事をちよつと書けばよいのを、書かにやならん書かにやならんと思ふと書かぬ手紙に疲れる。ちよつと書けばよいことを延したばつかりに、御無沙汰しまして、といふやうなことを書かねばならなくなる。さうすると書くのがいやになる。巧遲よりも拙速を貴ぶと云はれる。その日のことはその日にやる。夜一時になつても二時になつてもその日のことはその日にやつてしまうた方がよい。その日のことをやつて翌日からつとして起きた方がよい。頭にいつぱい持つて寢ていろいろ思うてをるより附けて寢た方がよい。どこの家でも仕事は多いが、なるべく片附けて寢た方がよい。さういふことをこの條に敎へられるのであります。如何に聖德太子は人民の心を思ひ、又國運の進展といふやうなことを心がけてお出になつたかといふことが窺はれるのであります。所謂事務の停滯をお戒になつたことと思ふのであります。

九に曰く。信は是れ義の本なり。事毎に信有れ、其れ善きも惡しきも成るも敗るるも要ず信に在り。羣臣共に信あるときは何事か成らざらん。羣臣信無ければ萬事悉に敗る。

「十七條憲法」の第九條目にこの條文のあることを、或は太子自らはお氣がつかんでお並べになつたかもしれませんけれど、私共から見ると不思議に有難い氣がするのであります。この條は十七條の丁度眞中です。一番初に「和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。」といふ箇條で始つたのです。そして一番しまひの十七條目には「大なる事は獨り斷む可からず、必ず衆と與に宜しく論ふべし。」と敎へられました。第一條は和、ようしまひはその和の實行してゆくために相談するなら、皆と相談してゆけ。忤ふことなきを宗とする、忤らはんといふことの反面が皆と相談してゆくといふことに現れてをります。この初と終とは相照應してをるのであります。この中心に今の第九條があるのであります。この條は信を敎へられるのであります。

信は是れ義の本なり。

信は信です。信は義の本です。義はことわり或は計ひ、儒敎にも仁義禮智信とあります。信は義の反映であります。信は一です。二つのものが一つになることです。義は、善惡と分れ、邪正と分れ、二つとなります。義理は二の世界、計ひの世界、善惡の世界であります。信は平等の世

界、融和の世界、一つの世界であります。この一つの世界が二つの世界の本になる。蓮如上人が、「聖人一流の御勸化のおもむきは、信心を持つて本とせられさふらふ。」とおつしやつた。信心は何の本か、生活の本だ。「信心をもつて本とせられさふらふ。」何の本か、生活の本である。これに基いて生活するのであります。ここに義とある、義とあるのは、我々の普通の生活であります。普通の生活は朝から晩まで、あの人はどうだ、この人はどうだ、又そこにいろいろの經濟上の問題やらいろいろの相談やらがある。世の中のことは、常に別々になる。ものの運をつけるのに、これはよい、これは悪い、かういふ工合にするとよい、かうするとぎしつく、といふやうなことを考へたり云うたりする。その義を考へて行く根本がこの信であります。信がなければ本當の義といふものは出ないのであります。このことを敎へられるのが第九條であります。

これを讀んでをりますと、親鸞聖人が「義なきを義とすると信知せり。」とおつしやつたことを思出します。

聖道門の人は皆
自力の心をむねとして
他力不思議に入りぬれば
義なきを義とすと信知せり。

他力不思議に入るとは信です。信です。信の世界に入れば、義なきを義とする、義は計ひ、善悪邪正の計ひです。この計ひがなくなつて計はれるのです。計はれるといふことは、善悪邪正に順ふのでなしに、天意に順うてゆくのです。佛智に順ふのです、他力に順ふのです。大道の意志で動くのです。義なきを義とす、の初の義は凡夫の計ひ、後の義は天の計ひであります。義なきを義とするは信に依るのです。天意に任すのです。もう一つ進むと、「つねに自然を沙汰せば、義なきを義とすといふことはなほ義のあるなり。」といふことになるのです。これは親鸞聖人が『自然法爾章』の中で申してをられます。さういふ計ひはいらんのです。そこに「有念にあらず、無念にあらず、平生にあらず、臨終にあらず、一念にあらず、他念にあらず。」と親鸞聖人の常におつしやる眞意があるのであります。

「信は是れ義の本なり。」信心は生活の本だ。世の中は何によるか、信心が本である。聖德太子は信心爲本を十七條の中の九條目においてをられます。初には和してゆけ、最後には衆と相談してゆけ、と云うて、中心を信といふことでちやんと括つてお出になります。始の八箇條と後の八箇條とを、信の一箇條でちやんと帶が出來てをります。

事毎に信有れ、

どんなことに當つても、そこに信有れ。確信を持つてやれ。これが出來るか、出來んか、さういふやうな危みを持つたり、疑を持つたりしてゆくことではない。はつきりと、事に望んでは眞底に徹するのですな。その事柄に融入るのです。眞底に徹する、徹すればそこに運がついて來る。これが信であります。どんなことでも信あれといふことは、信とは、事と自分と融合ふことです。事柄の外に自分があるのでない。事と共になる。一緒になる。融合してゆく。事と自分と一緒に動く。そこに信がある。「事毎に信有れ、」とは事と自分と融合ふことです。

其れ善きも悪しきも成るも敗るるも要す信に在り。

善といふことも、悪といふことも、事の成敗、成るとか敗れるとかいふことの根本は信だ。信があるときは善であります。信のないのは悪であります。信があれば事が出來る、信がないときは事が敗れる。信じてやることは何をやつても善だ。疑うてやることは何をやつても悪だ。信じてやるときは出來るし、信心がないときは敗れる。ここに善悪成敗の判斷を聖德太子は示してをられます。信といふものの上にすつかり判斷してをられます。ぢやから第一條の和といふことをもこの信の上に味はれます。又第二條の敬する、三寶を敬ふといふことも信の上に味はれます。

第三條の謹といふことも信の上に味はれます。第四條の禮といふことも信の上に味はれます。だんだん箇條によつてみますと、すべてが信の上に味はれます。信の上に味はれます。聖になるといふことも信であります。それから朝早く出勤して晩く退るといふのも信です。信から出て來るのです。すべては信です。

羣臣共に信あるときは何事か成らざらん。

それだから群臣――官吏の人達よ、「共に信あるときは何事か成らざらん。」信があれば何事でも出來んことはない。何でも出來る。それに反して、

羣臣信無ければ萬事悉に敗る。

互に信といふものがなかつたら、何をしても皆失敗だ。現代に苦悶があるといふことは、いろんな方面から見られませうが、富の分配がよろしきを得ないといふことも論ぜられます。富の分配のよろしきを得ないといふことは、どこに原因があるか。人に信がないからであります。個人主義に囚はれすぎてをるからです。親子・兄弟・夫婦、皆個人主義になつて、その間に通ひがないのです。信がないからです。だから人を見れば疑ふ。昔の人は命をそこに投出したけれど、今はそれがない。「義なきを義とすと信知す」るやうな大まかな心がないのです。信ずるといふことがな

いのです。任さないのです。ちよつと信じてみるのです。例へば、或人が金を貸して下さいと云ふと、あげませう、と貸す。あの人はきつと濟せるだらうと思うて貸す。信じて貸した。今度は期限になつても返してくれぬ。上げたいと思ふけれど今ないから濟せぬ、と云ふと、今度は貸した方は、あの人はああいふ人でないと思うて貸した、と今度はもうその人を疑ふ。それは信に徹してをらんのです。もつと深く信じて貸したら、その人が濟すと云うたから貸した。濟せんなら餘程のことがあるのだらう。あれ位自分に約束しておいた人が濟せないのは、よくよくのことがあるのだらう。さだめてつらいことがあるのだらう。信が強ければその濟せんことにも尙同情する。もつと貸さうといふ氣になる。ところがそこまで行かぬ。嘘に信じてをる、徹底せぬ。濟すものと思うて貸したのに濟さぬことによつてその人を疑ふのは信が深くないのだ、淺いのだ。それは中心が一緒にならんのだ。魂が一つになれば、濟せても信ずる、濟せんでも信ずる。人を信じたというても、その人が惡いことをした、と聞いて、あの人は隨分な人だ、信ぜられぬ人だ、かういふやうな考の出るのはまだ本當に信ぜんのである。あの人がああいふことをするのはよくよくのことである。どんなに悲しからうと一緒に痛むことがある。俺もさういふ場合にはする、その人がさういふことをするのはよくよくのことであると、却つて同情する。あの人がああいふことをしたと云うて驚くのは、まだ信じてをらんのです。近代人はそこまで信じ切れぬ。親鸞聖人は法然聖人を信じて、聖人の渡らせられるところなら地獄へでも行かう、とおつしやつた。それほど信ずるのは徹底的の信であります。事に對してもです。わしはこのことを仕上げようと思うたら、この事柄と命を共にしようといふだけの熱心が要るのです。少々そのことがむづかしくても、尙一生懸命になるのです。一遍で失敗すれば二遍、二遍で駄目なら三遍と何遍でもやる。事の上に命を與へてゆく。事と自分と一緒に生きてゆくなら、何遍敗れてもそれと一緒にゆく。

或人が日露戰爭の時、沈沒したロシヤの軍艦に金塊があるといふので、十何年かかつて引上げにかかつてをる。親類の人は馬鹿だと云うてをります。しかし私は偉いなと思つた。貧乏してやつてをる。私はこの事に一生かかりますとその男は云うてをります。一つの事をやればそれに命を賭けてするといふのは信があるからです。信があれば何事でも一心にやれる。よいことがあつても惡いことがあつても共にするといふ信がほしい。それまではまればきつと事が出來ます。ところが近代人はちよつと手を掛けて、いいことがあるとやる、惡いことがあると皆引込んでしまふ。本當に引込んでをるのかと思ふと又手を出す。手先を操ることは、小利巧な人に多いのです。そして自分の元を落さんやうにする。信がないといふことははまり込んでいかんことです。信の

あるのははまり込んでゆくのです。しかし、盲目的にはまり込んでゆくのはよくない。明い信があつてはまり込んでゆく。それが本當です。

信は義の本といふことは信は生活の本だといふことです。差別的の生活の上に事が運ばれてゆく、これが信です。極く通俗的な言葉で云へば、商賣をやるにも信用が本です。本當云うたら、何をやるにも信がなければ事が出來んのです。先度或人が私に、もつと親切に誤魔化さんで話して下さいと云うたから、待つて下さい、わしが誤魔化してをるとか、不親切といふ氣があるなら話したくない。尙話をすれば又誤魔化すと思はれるからもう話はせぬ。私を嘘つきだと思ふ人には默つてをるより外はない。君が私を誤魔化しとか不親切といふなら、默つてをるより外はない、と云うた。人の云ふことが自分ではつきりうけとられぬやうな場合には、どういふ風に云うたらよいでせうか。さういふ場合に私ならかう云ひます。あなたの云はれるやうだと私には嘘のやうに誤魔化しのやうに聞えますが、これは私の間違だと思ひますから、尙一應聞かして下さい、というたらよいと思ひます。かうなれば信をおいた上に質問するのですから素直に答辯も出てくるわけです。

よく店などへものを買ひに行つて、これはまからんか、まけてくれ。品物がよいからまけぬ。と押問答する人があります。いやしくも人の家へものを買ひに行くのに、信ぜなければ買ひに行けんのです。あの商人は何やらわからん、人絹を賣るに本當の絹と云うて賣る人なら、なかなか買ひに行けぬ。ものを買ひに行くときに、これは人絹が混つてをらんか、をりません、さう云ふならさう思うて買うて來るより外ない。向うの人が人絹やら何やらわからんと云うて賣つてをる者があるなら、さういふことに明かな人のところへ買ひに行くより外ない。さういふやうなことを思ふと、信といふものがなければ何にも出來んのです。國家に對しても、人類に對しても、信が大事です。それが近來は信がない。無信の傾向があります。個人的にばらばらに分れてをります。信といふものは、分れ分れの個人が一つに融けることです。信心とは二つの心が一つの心になることです。如來の心と凡夫の心とが一つになるのです。分れ分れの思が一つに融ける。それによつて社會が成立つ。それによつて人類の信が成立つ。それによつて皆が世の中に明い生活が出來て來るのであります。

聖德太子が『十七條憲法』の第九條、卽ち十七條の中央に信心のお勸めがあるといふことは、非常に大切なことと思ひます。そして「信は是れ義の本なり。」と云はれましたところに、信心爲本といふ親鸞聖人のお心持の根本を味はしていただいたことを非常に喜ぶのであります。

第七講（上）

十に曰く。忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り、心各執有り、彼是むずれば卽ち我は非みす、我是むずれば卽ち彼は非みす。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是みし非みするの理詎ぞ能く定む可き、相共に賢く愚かなること鐶の端無きが如し。是を以て彼の人は瞋ると雖も還つて我が失を恐る。我獨り得たりと雖も衆に從ひて同じく擧へ。

この第十條は腹立といふことをお戒めになつたのであります。そしてその根本になつてをる聖德太子の人生觀をはつきりと窺ふことが出來る貴い一章であります。今月の『願慧』にも、最近私がこの條によつて導かれたことを書いておきました。非常に奥深い廣いお心の敎であります。この一章をちつくりお味ひしたいと思ひます。

忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。

漢字ではいかるといふことを、忿とも瞋とも怒とも書きます。ここには昔から讀習うてをるやうに、忿といふ字に忿といふ訓をうけ、瞋といふ字に瞋といふ訓をつけてあります。さうすると、忿を絶ち瞋を棄てとあるのは、心の中の腹立つてをるものを絶ち、又顏に出して腹立てるといふことを棄て、「人の違ふを怒らざれ。」これは忿瞋といふものはどこから出てくるかといふと、人の違ふといふことから出てくるといふので、ここでは忿を絶ち、瞋を棄てよとおつしやつてあるのであります。その忿瞋はどこから出て來るかといふと、人の違ふといふところから出て來るのだ。ちやから人の違ふを怒らざれ、腹の中でも腹を立てず、表でも腹立てるな、といふ敎であります。

「人の違ふを怒らざれ、」怒といふものは自分の心と先方の心とがしつくり合はないときに起るのであります。つまり逆境にある時に發る心の作用です。順境にある時に發る心の惱は或は愛欲であります。或は貪欲であります。逆境にある時に發る心の惱は瞋恚であります。腹立であります。自分の對手の人が自分の思通りにしてくれぬ、といふときに腹が立つ。例へば外から歸る、玄關へ迎へに出てをりさうなものだと思ふのに出てをらぬ。さうすると腹が立つ。或は御馳走をしてくれさうなものと思うて歸つて來るのに御飯もしたててない。或はやさしい言葉でもかけてくれさうなものだに一向何とも云はない。さういふやうなときに腹が立つ。むかつとする。自分

が何か先方に望んでをることがある、かうもしてくれさうなもの、ああもしてくれさうなものと思うてをるところへ、向うがしてくれない。さういふときにむかむかとしてくる。さういふやうに人の違ふときに怒る、腹が立つ。この腹立といふことをだんだん太子がお考へになります。そのことを次に書いてあります。

人皆心有り、心各執有り、

人には皆心がある。一寸の蟲にも五分の魂がある。この心といふのは魂といふやうな意味です。人間には皆人間としての命の本源ともいふべき魂がある。その心に各執がある。執といふのは執着です。一つここぞと持つてをるものがある。何か持つてをる。執着してをるものがある。男なら男、女なら女、老人なら老人、若い者なら若い者、それぞれ細かに云うたらば、一人一人何かしつかりと持つてをるものがある。固執してをるものがある。各さういふものを持つてをる。

彼是むすれば卽ち我は非みす、我是むすれば卽ち彼は非みす。

そこで、向うの者がいいといふと、自分が反對に惡いといふ。かういふやうに反對したくなるものです。「是むする」とは是とすること、「非みする」とは非とすることです。是非が分れてくる。その反對にまた「我是むすれば則ち彼は非みす。」わしがよいとすれば向うが惡いとする。かういふ工合に違うてゆくのだ。何かかんか執着があるものです。例へばそれが夫婦といふやうな關係の二人の間においても、夫は夫で、妻は妻で、何か心に持つたものがある。夫がよいとすることでも妻は惡いとする、妻がよいとすることでも夫は惡いとする。かういふ場合に違ふ。さういふ時に腹立が發る。だから腹立が發るときには、そこに何か根柢に違つたものがあるのです。そこに是非善惡が分れます。きつとよしあしといふやうなものが出てきます。大抵の者は自分は善い、向うは惡い、とかうなります。ちやから一面腹立といふことも向うを責めることです。だから腹が立つと向うが見えなくなる。向うが見えなくなるのは先方の存在を見失ふことである。親が子供に腹を立ててむかむかして尻を毆る。それが怒です。自分が向うに對して一つだと思うてをるのに一つにならん場合に何かなし、むかむかする、いらいらする、その點で云へば腹立といふことは一面一つにならうとする願の反動的な現れともみられます。忿怒するといふことは、人間はどうしたつて別れてをられないといふこと、一つにならんでをられんといふことから發る心の現れであります。二つに分れてをられぬ、お前はそつち、わしはここ、さういふやうになつてをられぬ、一つになりたい、といふ心の現れであります。その點からいふと、腹立といふことも眞實への道なんです。

ところがちつとも腹を立てぬ人間があります。それは悪ずれにすれて、そしてへいへいと云うてさへをればよいといふ間違つた悟を持つて、人をいつも門外漢においてをる者であります。ずるいのです。人を門外におく、商賣人や政治家や坊さんにさういふ人があります。學校の教師にもある。これは人をなめるのです。こんな人はなかなか腹を立てぬ。これは腹を立てるよりもつと誠意のない徴です。腹の立つのはまだやや誠意があるのです。腹が立たんやうにこじれてしまうても仕方がありません。いつも人といふものはわが思通りにならんものだ、あれはあれ、わしはわし、といふのは一種の悟です。凡夫は助かつても、二乘地は助からんといふ。二乘地といふのは辟聞緣覺です。悪ずれに悟つてをるのです。殊に緣覺などは一人でこれでよいと決めてをるのです。さういふやうなのは助からんとお經に書いてありますが、本當なんです。さういふことから云ふと、腹立つといふことはよいことなんです。腹立つ人はまだ氣はよいのです。腹も立たんやうな人は佛にもなれんのです。腹立つてをるのは佛の相かといふに、さうぢやない。その腹立からもう一歩向うに出ればよいのです。ところが退却する腹立があります。腹立を解脱したのと、腹立さへ起きんのとあります。だから悟つたのとずるいのとは同じやうだ。何をしても「へい、へい、」どんなことをしても默つてをる、ちやんと一種の悟を持つてをる。あれはあれ、俺は俺、と妙に向うを輕蔑したやうな、さういふやうな悟があります。さういふやうに片寄つてをると、どこまでも人と和合出來んです。さういふ點から云ふと、腹の立つのは正直なんです。あの人は腹を立てるが根が正直なんですと云ふ。それは本當だ。腹立が緣になつて道が開けます。が、その腹立といふことがわかつたら、よくそれを考へてゆかにやならぬ。その考へ方を太子はよくよく詳しう教へ下さるのです。彼が善いとすると我は悪いとする。かういふ工合に違うてをる。かういふ工合に考へると、

我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。

大抵腹の立つのは自分を是認して、他人を否定するのです。自分を是にして押してゆかうといふ心があるから、聖德太子樣はここにそれをあばいて、「我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず。」とおつしやるのであります。自分はきつと聖人君子だと決つてをらぬ。又向うの者も愚な者、道理のわからん者だと決つてをらぬ。腹を立てるのは自分はよい者で向うは馬鹿な者と決めてをるからです。ところが、「共に是れ凡夫のみ。」とおつしやる。さうは一應は思ふけれど、ああ、靜かに考へてみると、向うもこつちも凡夫ぢやないか。凡人ぢやないか。世の並の人間ぢやないか。殊更にこつちがよくて向うが悪いことはない。ぢや、向うがようてこつちが悪いかと云ふと、

必ずしもさうでない。互に並の人だ。凡夫のみ。この凡夫といふことは親鸞聖人もよくおつしやいます。この日本の最初に書かれた書の中に凡夫といふ言葉のあるのは、非常に心丈夫であります。そして聖德太子御自分が凡夫だといふ御自覺なんです。私はこの箇條を讀みましても、聖德太子御自身の御反省から出た言葉であることを思はずにはをられません。德川末期の國學者或は漢學者が聖德太子を非難してをります。その非難の主なことは、推古天皇の前に崇峻天皇がお出になりました。崇峻天皇が在位五年にして朝鮮からの歸化人である東漢直駒といふ者のために弑逆の難に遇はれました。これは日本の萬世一系の天皇の上にただ一遍あつた不吉なことです。それは、或時崇峻天皇に猪を獻じた者があつた。天皇はこれを御覽になつて、「この猪の首を刎ねるやうに朕の嫌ひな者を斷る者はないか、」とおつしやつた。その陛下の朕の嫌ひな者とおつしやる人間は、その頃政治のすべてを裁いてをつた蘇我馬子のことであります。そのことを馬子に告げた者があつた。馬子はそれを聞いて非常に怒つたのです。といふのは、用明天皇の御崩御になつたとき、皇位繼承の爭が起つた。それに臣連等の黨派の勢力爭と一緒になつて、爭が大きくなつた。用明天皇の皇子の聖德太子はその時十四歳でましましたがお位にお即きにならなかつた。用明天皇の御弟君に穴穗部皇子と申すお方がお出になつた。が馬子と反對黨の物部守屋がこのお方をお位に即けようとして不臣な振舞があつた。それで炊屋姫大后——敏達天皇の皇后、後の推古天皇——の大命によつて、馬子は守屋を討つた。そして穴穗部皇子をも討ち奉つた。この討手には諸皇子達も御參加せられたのです。馬子は自分の政敵守屋を滅してしまつたので皇位繼承のことは自分の思ふままになつた。それで自分の妹の腹にお生れになつた崇峻天皇をお立て申した。馬子は、崇峻天皇を擁立して、自分の手の内として、その袖に隱れて我儘をしようと思つた。實際馬子は天皇の後立となつて、我儘を振舞つた。崇峻天皇にはそれがお氣に召さなかつた。それで悶々してお出になつた。たまたま猪を獻上したものがあつたので、「この猪の首を刎ねるやうに、自分の嫌ひな者を斷つてくれればよい。」とおつしやつたのである。このことを馬子に告げた者があつた。といふのは、天皇のお妃に大伴糠手連の女の小手子嬪といふ方があつた。この小手子嬪が天皇の寵愛が、馬子の女の河上娘に移るのを嫉んで、人をして天皇の猪をみて仰せられたあのお言葉を馬子に告げさせたのです。それで馬子は怒つたのです。世俗的に云へば、誰のお蔭で位に即いたのだ、わしの後立があつたから兄さんが即くべきのを弟が即くことが出來たのだ、それをわしをない者にしようなどとは以ての外だ、といふやうに思つたのです。臣下としてさういふ心を抱くのは畏多いことです。ところが馬子は怖と怒のために畏多くも天皇を弑逆し奉らうと

考へたのです。しかしさすが自分で手を下すことを憚つた。それで朝鮮の歸化人で、當時天皇に對して或事情のため快く思つてゐなかつた東漢直駒を示唆して天皇を弑逆し奉つたのである、と『日本書紀』に書いてあります。そして馬子は自分の罪狀の顯れることを恐れて、東漢直駒は自分の女の河上娘をかどはかしたといふ廉によつて駒を殺してしまつたのです。そしてその日に崇峻天皇の御大葬の儀をしてしまつた。天皇陛下の御大葬をおかくれになつた日にするといふことは古今に例のないことです。馬子は何喰はん顔をしてをつたのです。駒がしたことだ。俺は何にも知らぬ、といふやうな顔をして、今度は推古天皇をお立て申したのです。この時聖德太子は十九歳でましましたから、當然お位にお卽きになるべきお方だつたのです。が馬子は推古天皇をお立て申したのです。

推古天皇は女帝でましましたけれど、なかなか男まさりのお方であつた。天皇の御英明は馬子の野心を見拔いてをられました。それで、馬子の我儘を抑へる意味で、御卽位になるとすぐに聖德太子を皇太子にお立てし、攝政の宮とお定めになつた。この太子の攝政の間やはり馬子は大臣であります。太子は馬子と共に政治をされました。太子は馬子と共に佛敎を日本に傳へることにおいて殊に骨折られました。これをもつて、かの國學者や漢學者達が、太子は佛敎が好きだ、だから佛敎に眼が昧んで、そしてその馬子と力を合せて政治をせられた。この大逆無道の馬子をなぜ罰せられなんだのか。それは太子が佛敎に眼が昧んでをつたからだ。と云うて非難します。甚しくなりますと、太子は佛敎に目が昧んで、馬子と一緒になつて天皇陛下を弑逆し奉つたのだ、だから太子も逆徒だ。さういふやうに明治の初まで議論されてをつたものです。ですから明治二十年頃までは太子の影は日本歴史の上に薄かつたのです。馬子と同じやうに思はれてきたのです。後にだんだん太子の本當の研究者が出てまゐりました。一途に佛敎に反對するといふやうな固定觀を持たない歴史家も出てきたのであります。そして、近來はさういふことを云ふ者は少くなつたのであります。そして、文化日本の根柢を建てられた太子を讃歎するやうになりました。そして却つて馬子と共に日本の政治をみそなはしつつそこに陰忍してをられた太子樣に御同情申すやうになつたのであります。

この頃私の面白いと思ひますのは、太子樣が崇峻天皇が馬子の弑逆にお遇ひになつたことをお聞きになつて、「業報因緣だな。」と申されたといふことであります。太子樣は業といふことをおつしやつた。私は歴史研究はまだ淺いのですけれど、ひよつと考へてみますと、崇峻天皇が馬子に力を協せて御兄の穴穗部皇子に對して弓を引かれた。今度は馬子によつて御自分の命を縮めさ

せられた。馬子によつて天位に卽かせられ、馬子によつて弑せられ給うた。太子樣はさういふことをお考へになられたのでありませう。誰だつて因果の業報は遁れられない。さういふときもやはり馬子を咎めてお出になつたのであります。聖德太子の第二の妃は馬子の女で刀自古郎女と申します。馬子は自分の女を太子の妃に入れて思ふままをしようといふ氣があつたのです。が太子はさうなられなんだ。太子は豐聰耳尊と稱へられ給ふほどに御聰明なお方である、何で馬子の惡逆無道の振舞を御存知ないことがあらう。又今妃を自分に納れた馬子の心の底をみすかされないことがあらう。しかし、太子の業報因緣と仰せられたやうなお考への中には、すべてをお覺りになつたお相が見えます。太子は因果の廻り合せをしみじみお考へになつたに違ひない。そして、下手に手を出すことは、前車の覆を繰返すことをお覺りになつた。そこに太子の忍從の御生活がはつきり窺へるのであります。太子が攝政の宮になられたことは、太子として非常につらい位置にあつたのです。表向きの政治の責任は太子の上にありながら、內部の權力は馬子が握つてをつた。馬子は兵馬の權を握つてをる、だから輕々しく手を下されるときは天下の大事なのです。當時日本は內治に外交になかなか難儀な時であつたのです。太子は御英明であらせられただけに御惱はきついのです。太子の泣いてお出になつたことがわかります。ぢつと忍んでお出になつた。

太子の時から百年程後に出來た『日本書紀』といふ本には、馬子が東漢直駒を示唆して崇峻天皇を弑逆し奉つたといふことを明かに書いてをります。太子の當時だつてそれはわかつてをつたらうが、太子はぢつと隱忍してお出になつた。しかしその太子のお德は傲岸な蘇我馬子を感化せられた。馬子は太子がおかくれになつた後、太子の御前に跪いてをる繪を描かせて、自分は無量永劫までも太子の御足を拜んでゆくというて死んで逝つたさうであります。さうしますと、太子は馬子の身體を誅戮せられなんだが、太子のお德によつて充分に、馬子は太子の前に懺悔してをるのであります。かう考へられるのであります。あの傲岸不屈な馬子、これを初にしては蘇我馬子、後にしては平淸盛あり、といふその馬子が太子の御足許に平伏して死んで逝つたのであります。

聖德太子は御年四十九歲の二月二十二日におかくれになりました。それより一日先の二十一日には第一の御妃菩岐岐美郎女がおなくなりになつたのであります。或人は御病死でないと云ひ、或人は自殺であると云ひ、或人は他殺であると申します。しかしどうも今云ふコレラかチブスであつたらしいのです。太子がおかくれになつてから六年目に馬子は死にました。そしてその子の蝦夷が大臣になりました。蝦夷はその子入鹿と共に馬子以上の專橫を極めた。蘇我家にとつては太子の御一家は常に怖の種であつた。推古天皇がおかくれになつた後には太子の御子山背大兄皇

子が御位にお即きになるべきはずであつたが、蝦夷・入鹿が邪魔して、舒明天皇をお立て申した。その次には舒明天皇の皇后をお立て申した。皇極天皇です。皇極天皇の次には山背大兄皇子より外にお立て申すお方がなかつた。それが又蘇我家にとつては非常な恐怖だつたのです。聖德太子の御志を繼がせられる山背大兄皇子を天皇にお立てすることは蘇我家に不利であることは見えすいてゐる。そこで入鹿は最後の手段として、太子の宮であつた斑鳩の宮を攻めて、山背大兄皇子の御一族を滅してしまつたのです。太子がおかくれになつてから二十六年目に、太子の御一族一人も殘らず皆殺しにしてしまつたのです。山背大兄皇子に兵を集めて蘇我家に反抗してはとお勸め申した人もあつたが、皇子は、自分のために人を騷がすのは氣の毒であるとて、潔く蘇我家の毒手にかかられたのであります。殘念なことです。蘇我家のために、この御英明な太子の御血統は皆斷えてしまつたのであります。太子がおかくれになつて二十六年目に太子の御一門は亡び、その後僅に二年目にして蘇我一族は、中大兄皇子や中臣鎌足の手によつてすつかり滅されたのであります。この時聖德太子のお力で出來た古い日本の歷史の本も蘇我家の屋敷の燒かれると共に灰燼に歸してしまつたのです。惜しいことです。それがため日本の古い歷史の記錄はなくなつたのです。それから後孝德天皇の御代皇太子中大兄皇子の御手によつて、又中臣鎌足や、聖德太子によつて支那へ留學生に行つて歸つて來てゐた太子のお心を繼ぐ當時の學者らの助力によつて大化の新政が出來たのであります。ここに聖德太子の御理想が政治的に實現せられたのであります。

そこで太子樣は馬子に對して憤慨してをられただらうか。怒つてをられただらうか。太子は推古天皇の攝政の宮でおはします。馬子は太子より年がいつてをる。勿論太子は馬子の專横を怒つてお出たにちがひない。しかも、それがために馬子を誅戮もせずして、ぢいつと忍んでお出たところが、太子樣の太子樣たるところです。佛敎の研究をせられたのもただ事でないと思ふ。第一馬子の心を直したいといふ思召であつたと思ひます。「其れ賢哲を官に任すときは頌むる音則ち起り、姦者官を有つときは禍亂則ち繁し。」とおつしやつたとき、その前に馬子の姿がありありと見えたと思ひます。忿懲の心も始終起つたと思ひます。その忿懲の心を如何にして抑へてをられたか。どういふ工合にそこから道を開かれたかといふことは、この十條目の研究の上に私は拜ましていただくのであります。

私は十一の時に父に別れました。一人子で家の總領である。母の許で一人子でもてはやされてをつた。その頃叔父さんが家に三人をられた。それに寺だから世話方がある。實權はこれらの人にある。さういふ時に始終私は叔父さんと世話方との壓迫を感じた。憤慨の心が起る。腹が立つ。

自分とは力のある者が自分の前に立つ。自分の腹の中には、自分は戸主だ、この家の主人だ、といふ氣がある。向うは世話方だ、權力がある。叔父さんは寺の世話をされる。そして小僧が何だと云うてをられる。子供でもわしは戸主だといふ氣がある。さういふことで憤慨した。母にはお父さんがをられんために種々な迫害があつて、仲が悪い。叔父さん同志喧嘩する。門徒同行がわかる。その三人の叔父さんは皆細君があつて、仲が悪い。叔父さん同志喧嘩する。門徒同行が喧嘩する。私がその中へ入つて喧嘩すれば寺が持つて行けぬ。憤慨しても、それを私が纏めてゆかにやならぬ。こつちの怒をうちに疊み込んでゆかにやならん位置にある。一人で腹立ててそれで行けるものはよいが、一緒になつて腹も立ててをられぬ。皆が腹を立ててをる、どうしても纏めてゆかにやならぬ。自分は腹立を持つては行けぬ。さういふところにやはり惱はある。考へにやならぬ。さういふことで私は修養といふことを考へせしめられた。怒を戒めるといふことは始終考へてをつたが、二十二三の時に感じたことは今でも殘つてをる。怨仇討ち、さういふことが始終出て來る。聖德太子がここに書いてをられることはよく味はれます。

怒はどこから出て來るか。やはり自分だけを正しいとするところから出て來るのです。向うを責めるからです。ところが退一歩内省すると、自分はどうか、向うは悪いとしても、さて自分はどうかといふことを考へてみる。自分もやはり凡夫だ。向うが馬鹿で、俺だけ賢いのでない。俺はろくな者でない。その點で親鸞聖人が愚禿とおつしやつた。あの愚とおつしやることが非常に有難く味はれます。先日も或處へ行つたら、或お寺の若い者、大學を出て家に住職をしてをる人です。先生私の部屋に掛けておきたいから、座右の銘を書いて下さい、と云うた。「座右の銘を書けといふのは面倒だ。何やらわからん。あんたが選べば書いてあげる。それとも私が常に座右の銘にして聞いてをることを書けといふなら書いてあげる。」「それを書いて下さい。」といふので「斯婆迦」と書いたのです。「へい、これは梵語ですか。」「梵語だ。訓點をつければ斯婆迦。」「どういふ意味ですか。」「意味は考へなさい。私は何事でも、事が起つたとき、斯婆迦といふと直ぐにすつとする。」「はあん、馬鹿ですか。私はお母さんから云はれてをります。」「そんならお母さんが座右の銘だ。お母さんが馬鹿と云はれる。そんならよい。私はお母さんもお父さんもをられんから、お父さんかお母さんかしらんが、誰か來て馬鹿と云はれる。何か腹が立つとき、馬鹿と云ふ聲が聞えるとすつとする。」と云うたことがあります。

我々は腹が立つとき、自分だけがよい者と思うてをる。そして向うを馬鹿と思うてをる。とこ

ろが「共に是れ凡夫のみ。」と太子はおつしやつてあります。凡夫です。それを自分だけよいと思うてをる。さういふ場合に「馬鹿」と明い光に照らされると、ぴんとする。すつとする。親鸞聖人は悪人凡夫とおつしやる。悪人凡夫であることがわかると腹立がなくなる。眞宗の話を聞いてをる者が、悪人だ、凡夫だと云うてをりつつ、やはり腹を立てる。あれはまだ凡夫でない、悪人でないのです。押立てて出るものがあるのです。執着が深いから、人から悪口を云はれると「えへん」といふ。「えへん」といふときは自分のものをそこらあたりで掻ねさがす心である。凡夫ちやないか。餘程わが一人が賢うて、人が馬鹿に見えるのだ。けれどもよく考へると人が馬鹿に見えるのは、自分が馬鹿な證據である。聖德太子樣は「我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。」とおつしやつた。聖德太子樣のお心から云へば、わしが聖者でお前が馬鹿だといふわけはない。彼も俺も共に凡夫だ。かれもこれも牛角ぢや、とおつしやるのです。これは深い内省から出た言葉であります。

是みし非みするの理詎ぞ能く定む可き、

それだから、善い悪い、さういふ理はなんぞよく定むべき、どうしてわかるだらう。是だ非だといふことがどうしてわかるだらう。共に凡夫だ。自分が是と決めたことが、それで是だらうか。自分が本當に聖者なら是と決めたことは是であらう。それに對するものは非であらう。ところが「我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず。」さういふ是非・善悪・邪正を決める標準が立たんのである。

相共に賢く愚かなること鐶の端無きが如し。

よく考へれば、互に賢いとか、愚だと云つてをるが、極端な賢いものもなければ、極端な愚なものもない。丁度「鐶の端無きが如し。」である。鐶といふのはその頃の人が耳にしてゐたのでせう。その鐶の輪の端のないやうなものだ。賢い、愚だと云うてをつても、賢いところが廻れば愚なところへゆく。愚なところが廻れは賢いところへ行く。極端なものはない。だからさう頑張つて人を咎めて、是だ非だと云うてをるものは本當のことがわかつてをらんのだ。人間同志のことはさう頑張つてをられぬ。本當に世の中のことにはさう極端な善もない、悪もない。圓いものだとおつしやる。ここに非常に深い人生觀が現れてをります。ここまでいかれるにや大變なお苦しみの坂を越えさせられたことと思ひます。私共のやうなつまらんものでも、人生は圓いものだ、曲線的なものだ、善悪はさうわかるものでないといふことが、ここ六七年前に漸くわかつたのであります。太子は三十の歳に達してをられたのである。この『十七條憲法』の思召を窺ひま

すと、餘程深い懺悔と內省とがなければ、とても達しられないやうなことをお書きになつてあることを、今更のやうに驚いて拜讀してをるのであります。

第七講（下）

五六年前に『楕圓と圓』といふ本を出したことがあります。その後しきりに考へてをつたことですが、今度のこの『十七條憲法』の第十條目の「相共に賢しく愚かなること鐶の端無きが如し。」とあるのをみまして、新しく思出しました。この人生を直線的でなしに曲線的に考へるのです。直線とは幾何學的に云ふと、點と點との最短距離の線をいふ。その直線をずつと延長する、さうすると、その線の左の方の端と、右の方の端とは、永遠に別れて行つて再び逢ふものか逢はんものか、と云ふに、普通には逢はんというてをる。左を善とする、右を惡とする、左に向ふのは善、右に向ふのは惡、左は極樂の道、右は地獄の道、眞中で別れて、さいなら、あんたは地獄、私は極樂、と云うて後向きに行く。その別れた人は永遠に逢はないだらうか、といふのです。世の中を直線的に考へる人は、そこで別れたらもう逢はんといふのです。ところが面白いことには、數學の上では、普通の數學だと直線はもう逢はんのです。それが別の數學といふものになつて、全體といふ考、無限といふ考に入ると、その直線が、或無限の世界にゆくと逢ふといふのです。無限の境地で逢ふ。無限といふ考が出ると直線でなしに、曲線といふものになる、といふのです。我我が眞直だと思うてをることが、やはり皆一つの曲線を描いてをるものなので、きつと逢ふといふのです。どこかで逢ふのです。さういふことをだんだん考へてゆくと、我々が普通に地獄へ行く道、極樂へ行く道と、後向きになつてゆくが、無限の境地にゆくと、あらあんたか、あらあんたか、あんたは地獄、ええ、あんたは極樂、ええ、ここはどこちや、ここはどこやら、地獄の向う、ここは極樂の向う、あらと云ひ合ふやうになる。今度は又さいならで後向きになつて、地獄行の者が極樂、極樂ゆきのものが地獄へゆくと、又向うで一緒になります。善人といふものも、惡人といふものも、もう分れたものでない。ただしばらく傾向の違うたものなのだ。だから善に徹すると惡に、惡に徹すると善になる、善と決つたものもない。惡と決つたものもない。或點においては惡、或點においては善である。かういふ工合に考へてをるのです。それを何かどこまでも決つたものがあるやうに思うてをる。そこに腹が立つたり、愚痴が出たりするのです。私は病氣は苦しいものでもあるが、その中に直ると思うてをる。又、苦しみづくめといふこともない。長う

てというても二日か三日である。苦しくなれば死ぬ。さうでなければ苦しんでをる、又その中に直ることもある。私はシャトルから船に乗つたとき、横濱へつくまで十四日間陸を見なんだ。又セイロンのコロンボからアラビヤのアデンまで八日間船に乗つた。そのときに海が荒れてくることがあつた。皆が困つてをつた。私も困らんことはないけれど、その中にまた晴れると思うてをつたから荒れてをるときも寢てをつた。いつまでも荒れてをると思はんのです。二三日辛抱すれば晴れるに決つてをる。世の中のことは何事でもさう長いこと續かぬ。善いことも惡いこともさう續かぬ。人もさうだ、逢うて機嫌がよいが又腹立てる。また機嫌がよくなる。さう決つてをらぬ。波のあるのも面白い。星の出てをるのも面白い。日の照つてをるのも面白い。夕立も面白い。朝も面白い、晝も面白い、夜も面白い。兩端があつて面白いのだ。さういふ工合に考へてみると、人が腹立ててをつても、又泣いてをつてもかはい、一生懸命に子供が泣いてをる。地團駄ふんで泣いてをると、えらいやつてをるなと、かはい氣がする。人が腹を立て、憤慨してをると、偉いなと感心してをる。人が惡口を云うてをるときも、偉いなと思ふ。こつちの惡口を云はれるときもやつてをるなと思ふ。そこいふと人間はかはいものである。子供は一番かはい、今笑うてをつたかと思ふと泣く。泣いてをつたかと思ふと、又笑ふ。大人になるとこぢれる。お饅頭上げようか。いらん。もう少しするとおなかが減る。それでも欲しいと云へぬ。上げようかと云ふと、欲しいと云へぬ。先にいやと云うたから欲しいと云へぬ。やらうと云うたら、はいと云へばよいのだ。それを先の義理で云へぬ。そこいふと子供は面白い。今いらんと云うても直ぐにくれといふ。そこが子供です。ところが我々は直線的にものを決めて行かうとする。四角張らうとする。棘々して角張る。よく考へると世の中にはさう角張つたものはない。親鸞聖人は晩年に、「是非知らず、邪正もわからぬこの身なり。」とおつしやつた。是非もわからぬ、邪正もわからぬ。又かういふこともおつしやる。「よしあしの文字をも知らぬ人はみなまことの心なりけるを、善惡の字知りがほは、おほそらごとのかたちなり。」善だ、惡だといふことがわかると思うてをるのは大そらごとだ、さういふことはわかるものでない。何にもわからぬ、とおつしやる。それが二十や三十の人でない。七十八十のお歳になつてさうおつしやる。親鸞聖人はぼけられたのだらうか。よしあしがわかつたと思うてをるのがぼけてをるのだ。本當にわかつてくると、それがわからんものだといふことがはつきりしてくる。智慧の少い者は善惡といふことを斷定する。そしてちやんと差別の世界を持つて或は善い或は惡いと決めてしまふ。先度或人が「酒は人間の身體に害になるからやめなさい。」と云うてをつたから「それは誰に對して云ふのか。」「それは一般に對して云ふのです。」

一般にさういふことは云へない。或分量は或人には藥になる。昔から酒は百藥の長と云うてをる。禁酒を云ふ人は酒の惡いことばかり云ふ。そして酒飲の惡い例ばかり出してをる。さういふこともあるし、さうでないこともある。或人に弊害があると一般的にさうだと決めるのだ。モルヒネは毒だといふが、なければならんことがある。藥になる。あのコブラといふ蛇がある、あれは毒蛇だが、印度人はあのコブラに嚙まれたときあのコブラの毒素で直す。毒を毒で直す。蜂蜜を藥だと云うて朝から晩まで舐めてをつたら胃病になる。卵がよいと云うてやたらに飲んだら下痢する。この頃はよく運動法を云ふが、あれも人による、場合による、身體による。それを世の中の者は誰にでもよいと云ふ。ちよつと藥を飲んでよいと、誰にでもよいと思ふ。事はさう早計に決められぬ。善も惡も藥も毒も決つたものでない。場合により人による。人でも大抵用ひ場による。炊事に間に合ふものもをる、炊事に出んでも喋舌らしておくとよいものもある。手は動いても喋舌られんものもある。眞面目なものでも細かいことに間に會はんものがある。ああいふものは間に合はんからと思うてをつても用ひ場所によつては役に立つこともある。人の惡口を云ふことを好きなものなどは仕方のない人だと思はれるが選擧競爭の場合には間に合ふこともある。人は適當の場所におけば皆間に合ふ。適所適材で、人殺の好きなものは刑務所の絞首臺か、死罪の宣告臺に備うて貰へばよい。牛殺の好きなものは牛殺し、人殺の好きなものにはその役がある。人殺の好きなものは志願したらよい。さうすると死刑執行員になられる。先年アメリカのシカゴで豚の罐詰を拵へる工場を見に行つた。足を繩で括つた豚が大きな針金にぶらさげられて運ばれてくる。それを裸の男が鋭いナイフを持つてゐてざくつと突く、赤い血がだらだらと垂れる、豚は悲鳴をあげる。私は一目見てさへぞつとした。同行した青年は深い感激に打たれ、以後肉食を廢した。ところが、そんなことを朝から晩まで職業としてやつてをる人もあるのだ。まんざらいやではやれまい。面白い仕事を選んだものだ。魚釣の好きなものは、魚を釣りあげたときに魚の跳ねるのが面白いと云うてをる。私共からいへば、それが堪へられぬやうな氣がするのに、人には妙なことを好くものもあるものだ。けれどもそれが好きなら商賣になる。面白いもんです。だが必ずしも一つの事を惡いと決めてしまふわけにはゆかぬ。例へば親が鯉を食ひたいと云へば鯉釣ることが親孝行にもなる。世の中はさう決つたものでないから、人のやつた事が惡いからというて、ひどく責めるわけにもゆかぬ。よく考へてみると、どんな人だつて深く責めることは出來ない。責めることが出來ないといふことも、あながちに決められもせん。責めるも又場合によるのである。藤武さんのところで昨夜燒魚を食はなんだ。ところが今日は家内の膳に燒魚がついてわしのにつ

かなんだ。どうしたのだと聞いたら、ゆふべあなたがあがらなんだからお嫌ひなのかと思うてつけなんだと云はれた。私は燒魚は嫌ひではないが、御馳走がたんとあつたので、それまで食べられなんだのだ。一度燒魚に箸をつけなかつたからといつて、わしがそれを嫌ひだと斷定せられては困ると笑ひながら話したことであります。私が子供の時分に或村の檀家へ行く毎に、いつでも大根と揚を煮て出す家があつた。そしていつでも父上が好きだつたと云ふのであつた。親の好きなのを子まで好きだと思うて、いつでもそれを出すやうなのは固定した考をもつのである。

世の中はさう鹿爪らしう決つたものでない。この頃鹿兒島の人達は滿洲事變のあつたためにこの秋鹿兒島へ天皇陛下の行幸あらせられることがお取止になつたとか、ならぬとか評判してゐます。天皇陛下のお出になることさへはつきり決らぬ場合もある。決つたり決らんだりするのが世のありさまである。本當は中々わからぬのだ。決つた善もなければ惡もない。世の中は丸いものです。それを四角に考へこちこちに考へる。三角だ、四角だ、と思うて窮屈に考へる。丸いところへ行けば樂だ。世の中を三角に考へてをるものはその三角の中へ這入つて、そして身動きも出來んやうに窮屈になつてをる。大抵の人間は自分の狹い考の中に這入つてゐて世の中が狹いと云うてをる。世の中は決して狹いのでない。自分が垣をこしらへて這入つてをるのだ。窮屈な世の中といふ人は自分の胸で狹い世界を作つてその中に這入つてをるのだ。だから腹が立つのだ。この頃になるとよく蜂など部屋に這入つてをる。それが暖い日に外へ出てゆかうとする。そして障子にぽんぽん當る。開いたところに廻つてゆけば出てゆけるのを開かんところにばかり當つてをる。ああいふことを我々もやつてをる。ひよつと廻ればゆけるのだ。外の者のやつてをることをみると馬鹿げたことをやつてをると思ふこともあるが、自分のことはわからぬ。そして自分は賢いものと思うてをる。世の中のよく腹を立てる人は自分が賢いと思うてゐます。が、或點から云へばなかなか愛敬がある。あの赤い顏して腹を立てる人はなかなかかはいと思ふ。血があると思ふ。私も時々赤い顏をする。さうするとまだ命があるなと思ふ。腹立も長いこと續くと惡い。腹立つてもよい。腹立が長く續くと惡いがひよいひよいと出るくらゐはよい。さつき腹立てたから直したいが直らんといふのは惡い。さつき腹立てたから今も腹立てにやならんというていつまでも持つてをる人がある。あの怨、忘れられん、と云うて持つてをる。忘れられたら忘れればよい。聖德太子は世の中は丸い耳輪のやうだとおつしやる。曲線的なんです。人生の本然は曲線的なんです。世の中はすつと眞直ぐなものでないのです。もつと穩です。家など建てるときは四角ですが、自然の世界には四角いものはない。人間はこんな四角いものを建てるが、出來上つてをるものに

四角いものはない。けんと角の立つたものはない。何か丸みがある。木でも四角の木はない。石でも四角の石はめつたにない。缺けた時はあるが、自然の石なら丸みがある。世の中といふものは丸いのです。曲線的なんです。地球も丸い、宇宙も丸い。丸い中にをるから皆丸いのです。それで角ばらんと圓滑に行ける。角立つてゐても、丸くならにやいけん世の中です。あの人は丸いといふ。徹底的に角がとれたのと、人を馬鹿にして角のとれたのとある。すりつこかしと、悟道に入つたのとある。すりつこかしの人は人を馬鹿にする。悟道に入つた人は人と和ぐ。するくて腹立てんのと、悟つて腹立てんのとある。聖德太子は鋸の端無きが如し、とおつしやる。非常に味のあることです。我々の師匠清澤先生は四十一歳で亡くなられました。その一週間前に書かれた御信心の告白の中に、何が善だやら何が惡だやら、一つも知り分くる能力のない私であると、はつきり書いてお出になります。人間の義務、親に對する義務、子に對する義務、妻に對する義務その一つも出來んわしはこの世に存在する値打のないわしだとおつしやる。先生は東京帝國大學に在學中はいつも優等であつた。學校の豫備門にをられた時、今の滿鐵總裁內田康哉さん、それから今の宮內大臣一木喜德郎さん、文部大臣岡田良平さん皆一緒だつたが、これらの方々は、どうしても清澤先生を越えて一番になれなんだと、先生の御法事の時に云うてをられた。それ程頭腦の明晳なお方だつた。さうした先生がお亡くなりになるとき、何が善だやら、何が惡だやら、何が正だやら、何が邪だやら、一つも知り分くる能力のないわしだ、そのわからんものが、わからんままにかうして生かしていただいてをる、この生かして下さる力を信じてをる、と云うてをられます。惡と決めて惡になるのでない、惡に決めて惡を避けるのでない。善惡なしに投げ出したとき、「計なく慮なく彼の願力に乘ずれば定んで往生を得と深心す。」といふ信味が得られるのであります。『阿彌陀經』には少善根福德の因緣をもつてをつては佛の淨土へ出られんとおつしやつてある。又親鸞聖人は、善を好み、惡を惡むものはまだ佛の道に遠いとおつしやつた。勸善懲惡は佛敎の道であり、諸惡莫作衆善奉行は佛の敎であると云ふが、その道に徹底的に進んだとき、善惡の差別がなくなるのです。決つた世界、それを超えていつたところに最上の生活がある。最上の生活は丸い世界であります。こだはつて善惡を思はんところに本當の生活がある。無上善・絕對善がある。親鸞聖人の御信心のお味を、聖德太子はずつと昔にお味ひになつてある。信心爲本は聖德太子の憲法の中にある。この凡夫往生といふことも聖德太子の憲法にあります。私はこの憲法を讀んでをりますと、親鸞聖人の淨土眞宗の御安心の根源が明かになります。親鸞聖人から六百年も前に、聖德太子樣の御信心の上にはつきりそれを示して貰へるのは非常に有難いことと

思ひます。親鸞聖人は、聖德太子を父のごとし、母のごとしと崇めてお出になります。私共はこだなとはつきりわかるのであります。

聖德太子は日本のこのあらゆる政治・教育・藝術等、文化日本のすべての基礎を開かれたお方であります。そしてここに日本佛教をお開きになつた佛樣であります。印度にお釋迦樣がお出になりますやうに、日本には聖德太子佛がお出になるのであります。印度のお釋迦樣は妻子を棄てたお方であります。日本の聖德太子は妻子の中にあつて悟を開いて、成佛の道を得させられた所謂在家の佛樣です。尼さんの佛でない、出家の佛でない。在家止住の佛樣であります。その佛の法は今日の日本を生かしてをり、日本の光であるといふことを思ふのであります。

是を以て彼の人は瞋ると雖も還つて我が失を恐る。

かういふわけであるから、彼の人は瞋る、向うの人の腹を立てるのは、何かこつちに惡いことがあるからだ。向うが自分を是として、こつちを非としてをるから、瞋つてをるのである。こちらがその非の自分にあることがわかれば却つて向うをして腹を立てさしたのがわるかつたとあやまらねばならんのであります。こちらの失を感じた時、自分に何か咎があるぞと內省するのです。これは有難い心です。向うの腹立ちによつてこつちの非を悟り、こちらの凡夫であることを氣附かして貰ふのであります。人が惡いと云うてきたら、ああ惡かつたと氣がついて凡夫だといふことがわかる。それが向うに反映するときに、俺も凡夫だつたといふことを內省せしめるのです。自分が凡夫だといふことがわかれば明い道が開けてまゐります。

我獨り得たりと雖も衆に從ひて同じく擧へ。

このお言葉によつて私は貴い教訓を得たのであります。私は恐らく五六年前にこのお言葉を讀んでもよく味はれなかつたであらうと思ひます。最近このお言葉で教へられたのであります。「我獨り得たりと雖も」自分でわかつてをる、「得たりとも」とはわかつてをると思うてをることです。外の者がわからん、さういふ場合にですな、支那の聖人は云はれた、「千萬人と雖も我行かん。」我に反對するものが千萬人あつても我は行く。これは眞理を行くものの道です。皆反對しても、わしは信ずる道を行く。私はこれまでさういふ道を歩まうとしてをつた。それは若いのです。今から約三十年程前、私の鄕里の方に非常な信心の熱が起つた。金澤の醫學專門學校や高等學校の學生或は村の青年、學校の教師、若い坊さん、皆お慈悲に感動して、涙を流して喜んだのであります。自分が喜の世界に入ると、今までの同鄕の坊さんの生活が氣に喰はない。それでかういふよい世界があると云ひ出した。さうすると教界に風波が起つた。今まで佛教を聞かんだ若い者や學校の

教師なんかが喜んでをる。今まで佛教を聞いてをつた者はけろつとしてをる。今まで佛教を聞いたことのない者は有難いと云うて泣いてをる。今まで聞いてをつた者は何にもわからぬ。そして喜んでをる人の境地がわからんものだから、あれらの喜んでをるのは佛教と違ふと云ひ出した。所謂異安心呼ばはりをしました。その頃私は東京にゐて折々郷里に歸つたのです。新しい喜に入つた人達が私に關係のふかいところから、古い頭腦の人達は若い人が妙な喜をしてをるのは曉烏のせゐだ、と云ひました。そして、異端者を惡む怒の心は私に對してむけられました。加賀あたりでは、信心といふことが一つの學問のやうになりまして、たのむ一念の信心が要めだといふ教に引かかつて、一念の講釋に骨を折つて、却つて一念の信心をいただけない人が澤山をるのです。たのむ一念が肝要だといふのはよいが、そのたのむ一念を自力の心でたのむやうに思うて重荷に病んでをる人が多くあつたので、たのむとは助かることである、お助けが先手である、お助けの先手の呼聲が聞えたときがたのむ一念である、如來のお助けが自分の上にあるといふことがわかれば、その外にたのむ一念はいらぬと云うたところ、舊來のたのむ一念の講釋に頭をつきこんでをる人達は、曉烏は法體づのりである、十劫安心であるといひました。その頃、私と懇意にしてをつた或僧侶がゐました。彼が或處へいつて、私共には學問もいらぬ、ただ信心一つでよい、御文や御和讃の講釋はいらぬ、ただ南無阿彌陀佛一つでよいといふ話をした。するとその席にゐた頭の古い人が、今あなたが信心には御文も和讃もいらぬと云はれたのは本當ですか、本當なら一札書いて下さいと云うたところ、無頓着な彼はさう書いてやつた。その書いたものを貰つた人は、異安心の證據を押へたと云うて喜んでゐた。これに類した問題があちこちに起つて來た。丁度東本願寺では、親鸞聖人の六百五十回の御遠忌をつとめる準備のために法主はじめ金澤に滞在してをられたので問題は中々大きくなつた。若い連中に信仰熱の起つたのは、親鸞聖人のお德の然らしむのであるのだが、その意味のわからぬ者には相當に不審の廉もあつたであらうと思はれます。とにかく、あちこちに起る信念上の紛爭の根本は私にあるといふので、金澤市と石川河北二郡の僧俗三萬人ほど連署をして本願寺に對して曉烏は異安心であるから取調べて下さいといふ請願書を出した。當時の本願寺の役僧は皆私の知合の方であつたので、始の間は請願した人々をなだめてもをられたが、火の手がはげしうなると、とても押へきれなくなつたので、京都の方に私を呼びました。先輩の二三士から問題の事情を聞かれたのです。二三の問題の異義について説明をして了解を得ました。畢竟こんな風に本願寺の僧俗が問題を起してをる。御遠忌前に困るから、どうか穏かに話をして誤解を招くやうなことのないやうにしてほしいといふ注意をいただきました。

そして請願書を出した人達に誤解をせぬやうにと注意があつたはずです。かういふ問題のあつた折に、すねぶん殺氣立つてをるので、私を知れる或老人などは、一人で外出をするなと注意をしてくれた位です。しかし、その時分から私はこの連署をした人達に對して憎い氣はしませんでした。それらの人々は大切な印章を私の問題の爲に押してくれるだけでも、私を思つてゐてくれるのであると嬉しく思うたのであります。今でも鄉里の人々が一番私をかはいがつてくれられるやうに感じてをります。澤山の人の反對を受けながら、それに屈せずして自分の道を行くのは中々愉快なものです。「千萬人と雖も我行かん。」といふ勇氣はたしかに味ひました。しかし、今から思うてみると、ここが若かつたのです。今日も面白い話を聞きました。菊永の邊では、曉鳥の話を聞いた異安心者は御繪像を捨ててしまふといふことです。そして、それを拾うたものがあるといふことです。私の話を聞いたものというても、相當に澤山あるから、その中には、いろいろの聞き方をしてをる人もあらう。御繪像を捨てるものがあつたといふことも、あながち否定出來ない。私としては、佛を崇める心を傳へたいと思うて、或は右から或は左から、いろいろ話してをるのである。それが妙な工合に誤解せられて、或は誤解の遵奉者があり、或は非難者があるのであります。かういふことを聞いて、若い時分の私なら、何でも勝手に云うてをれと一笑に附しますが、この頃の私には、そんな評判にも充分に耳を傾けて自らを省みる餘地はあるのです。私はけんくわ好きな男です。人に反對して行くことが面白い男です。多數黨に這入つて勝利を得るよりも少數黨に這入つて多數黨を苦しめるやうなことも好きな男です。紀平正美君は私に對して「君は何糞の權化である。」と云うてをります。同君は「何糞」が日本精神の一面であると云うてをります。そして、私の上に和魂の活動よりも荒魂の活動の相がよくみられると言うてをります。これは、たしかに當つた批評であります。しかし、今日の私は、その「何糞」の自分に慚愧の思を禁じ得ないのであります。そして和魂の提唱が殊更力強くせられるのであります。

六月滿洲から天津・北平の方へ行つて、非常に日支の關係の迫つてをることを感じてきました。殆ど何か勃發せにやならんやうになつてをつた。滿洲を拋棄するか、或は滿洲を取るか、もう一つ滿洲を中立地帶とするかの三つの孰れかを選ばねばならぬやうになつてをつた。あの二十萬の同胞の血を流した場所をおめおめ返すことはとても出來ぬ。それかと云うて、支那人が日本に對して惡感を持つといふことが無理とは感ぜられぬ。といふのは、日本からあちらへ行つてをる者の狀態を見ると、丁度印度人に對するイギリス人のやうな態度の人も尠くない。だから、支那人が排日をするのは無理はないと思つた。滿洲を歩いたとき、それが見えたので、支那人を大切にし

たらどうか、といふことを云うてきました。

戰爭はいやだ、どうか戰爭のないやうにしたい。かういふやうに思うてをる。殊に二三年前から陸軍の軍人に逢うても、戰爭をしなくてはならぬ、海軍の軍人に逢うても戰爭をしなくてはならぬといふ人が多かつた。日本の軍隊は非常に力が充實してをるので、世界中を對手に戰爭をしてもよいさうです。非常に不景氣になつたといふので、鑛山などやつてをる人は戰爭のあつた方がよいと思うてをるさうです。又、東京あたりの人は、あまり世の中が停滯してをるから、何でもよいから一變化があつてほしいと云うてをる。それで、火事が起るか、地震が來るか、戰爭があるか、何か待つてをります。さういふやうなことで、一戰爭やらにや——とかういふことになつてをります。けれども我々が考へるときは、大體戰爭すれば若い人達が戰に出にやならぬ。死なんで戰は出來ぬ。いくら支那の兵隊が弱いと云うたところで、こちらだつて少しは命を捨てねばならぬ。その命を捨てる人にも親がある、兄弟がある、妻がある、子がある、何かそこに悲しいことがある。戰爭があれば同胞が命を棄てにやならぬ。又向うの人も死ぬ、やはりかはいさうです。だからなるだけさういふことがない方がよい。それから又、一國として考へても、支那に對して戰をすれば、アメリカが支那に對して經濟上の應援をすることが見えてをる。今でも見えてをる。支那には自國の人民の生命財産を保護する力がない。日本がこれを助けてやらなければ聯合國は支那に代つてこれをするに違ひない。アメリカは金があるから金で助けるでせう。日清戰爭のときに三國の干涉があつたやうに、今度はアメリカが干涉するかも知れない。日本が惡いあまりに支那は自國を賣つてまでも第三國の後援を買ふことがないとは斷定しきれない。さうなると日本はアメリカを向う側にして戰はにやならぬ。が、アメリカを向うに廻しても勝てる見込があるさうです。今度の國際聯盟の樣子で見ても聯盟國が支那の味方をすることがわかつてをるのです。こんなことを思ふと世界の舞臺に孤立になつて遂に亡びに瀕してをるドイツのことなども思ひ合はされてくる。

六月旅行中にいろいろ心配してゐたのですが、たうとう九月十八日に所謂奉天事變が起りました。軍人諸君はこんどの奉天事變はまだ事變であつて日支戰爭といふわけではないというてをります。

そこで戰爭が起つたら私はどうしようと考へた。今までは私はどこへ行つても非戰論者です。私の頭はどうか平和の和魂の活動がほしいと思うてをりますが、戰爭が起つたらどうするか、といふことを考へました。今ぢや私は態度がはつきりしてをります。その時取るべき態度が二つある。

どこまでも自分の信じた非戰論を唱へる、國から追放されようが、殺されようが、牢へ入れられようが、主張してゆく。その道が一つ。さうでなければ外の道へ行く。どつちへ行くか。といふことを考へてをります。まあ自分のやや思想上信じてをる人がどんなことをしたと云ひますと、歐洲大戰の時、フランスのロマンローランです。この人は非戰論を唱へてパリーから追放せられ今はゼネバ湖畔に幽棲を占めてをります。ロシヤのトルストイも非戰論を唱へた。イギリスのラッセルも非戰論を唱へて牢に入れられた。マクドナルドも非戰論で牢に入れられた。かういふ例がある。それからもう一人、印度のガンヂー氏、ガンヂー氏は平生は非戰論者であつた、彼は人を殺すことを嫌ひであつたばかりでなしに動物の命をとることさへ嫌ひ、印度の獨立運動にも無抵抗主義を主張してをつたにもかかはらず、歐洲大戰の際には英軍に從つて出征しました。どこまでも劍を持たず鐵砲をとらず。たとひイギリスの兵隊が武器を持つて攻めて來ても無抵抗にしてしかも獨立を主張せねばならぬというてゐたガンヂーも、歐洲大戰が始つてからはその徒黨の人達がこの擧に乘じて獨立運動をせにやならぬというたにかかはらず、英國には他年の恩顧があるからこんな場合に獨立運動をするのは卑怯である、今の際は英國に加擔して戰爭に從事する方がよいと主張して自ら率先して戰場に出たのである。が病氣で歸つて來られた。歐洲大戰がすんでから、再び印度獨立の運動に盡してをられる。こんな際に獨立をやらにや、と云うたのを却けて、却つてイギリスのために盡し、大戰がすんでから又運動をやつてをる。イギリスはこのガンヂー氏の正しさの前には頭があがらぬのであります。ガンヂー氏は無手で働いてをるが、强大な兵力を持つてをるイギリスも、これをどうすることも出來ないのです。時々牢へ入れることがあるけれど殺すわけにゆかず、今度は圓卓會議に引張つて行つた。あの四角張つてをるイギリスの宮廷へ裸で、印度のままの服裝で行かれたといふから面白い。このガンヂー氏は非戰論者であるが、すでにイギリスに屬してをる以上、イギリスの國難に殉じて戰場に働くことを辭せぬといふのが彼の正義觀である。

さて、私はガンヂー氏のやうな態度を取るべきか、或は、ロマンローランやラッセルのやうな態度を取るべきか。ぢつと考へた。その中にこの『十七條憲法』のこの一章を讀んだ。そこではつきりした。「我獨り得たりと雖も衆に從ひて同じく擧へ。」自分獨りすつかりわかつたとしても、皆のやつてゆくことは、皆と一緒にやつてゆけといふ聲が聞えました。清澤先生はエピクテタスの語錄を非常に愛讀してお出になつた。エピクテタスは今から二千年程前の人で、ローマのネロ王の頃の人である。その語錄はアリヤヌスといふ弟子が集めたものである。清澤先生はこれを西洋

第一の書物と云うて、愛讀してお出になつた。エピクテタスは跛の奴隷であつた。エピクテタスは、暴君があつてわしの首を刎ねることが出來ても、わしの志を奪ふことは出來ぬというた位意氣の盛な人であつた。ところがエピクテタスの云うてをる中に、お祭に、たくさんの人がよいしよよいしよとやつてきたときわしはどうするか。わしは一人それを避けてをるだらうか。わしはさういふことはせぬ、というてぢつとしてをる者はまだ悟れんのだ。皆よいしよよいしよと來たら、その中に入つて、よいしよよいしよとゆく。それが本當に悟つた人である。と云うてをる。この話は清澤先生は常に面白う話されたのであつた。私はどうしてもさうして行く方がよいと思うてをるが、中々さうしてゆけぬ。皆よいしよよいしよと云うて來たときに一緒になつてよいしよよいしよと云うて行くことはむづかしいものです。私共は我獨り清めりといふ根性になりやすい。人と酒を飲んでその中に浸つてをる氣持にどうもなれぬ。だんだん年がいくとその方がよいのだと思ふが、それが中々容易には出來ぬ。

今度の奉天事變について、私はよい教訓を得ました。私一箇が非戰論を唱へてをるのは事變の始まらぬ前のことです。既に事變が始まつた以上は、私の意見に拘はつてはをられません。すべてを抛つて國論の向ふところに從つて行くのが私の道です。このことを第十條に「我獨り得たりと雖も衆に從ひて同じく擧へ。」と教へられたことによつて大いに導かれたことでありました。しかし、私はどこまでも戰爭論者ではありません。國論と共に戰ふべきときには戰ひます。支那をいちめようとか、アメリカを亡さうとかいふ心で戰ふのではなくて、日本の明るい魂をもつて世界の妖霧を拂ふ氣持で力强く戰場に出るやうな氣分でをります。若し戰爭が始まつたら私には私に適することをやらして貰ふ。私のやうな目の惡いものは戰に行けんから、私の出來るだけの事をさせて貰ふ。かう心が決つた時、すつとした氣持で毎日新聞を讀んでをります。やはりガンヂー氏の態度は大きいと思ひます。自分の說は一通り持つても、その說を主張しないで皆と一緒にゆく。皆と一緒にゆくために說を捨てるのです。私共は日本の同胞と一緒にゆく。宣戰の布告はないから事變だというてをる。とにかく日本を擧げて事に向はねばなりませぬ。今の問題は奉天で起つたけれど、その火元はゼネバにあると云うてもよいのです。ゼネバの國際聯盟における我が國の强硬な態度を全國の氣勢を揚げて維持せねばなりませぬ。「我獨り得たりと雖も衆に從ひて同じく擧へ。」どうですな。ここをみると蓮如上人のお言葉の「和光同塵は結緣のはじめ八相成道は利物の終り」とおつしやつた味が仰がれます。日本の神樣の光はあらゆる塵の中も現れます。戰爭の中にも平和の光が現れます。それが和光同塵です。和の光は皆と和いでゆくために穢の中

に入る。皆と仲よくしたいいつばいで、一人でをられんで、皆が來にや自分が出掛けてゆく。山の上にをつて、ここへ來いと呼んでをつても誰も來ぬ。その時は山を下つてゆくのです。山を下つて町に入つてゆくのです。山にをつて山へ來い山へ來いと云うてをつても一人では淋しいといふから、山から下りて皆の中へ入つて行く。そして又皆を山へ連れてゆく。それが和光同塵です。塵に同じくなるのです。本當の打融けた相はそれです。だから家の中においても、皆と一緒になればよいのです。誰も自分と一緒にならぬなら、自分が皆と一緒になればよいのです。この覺悟がなければならぬ。どこまでもつつばつてゆかぬ。議論でつつばつても、實際は折れてゆくところに人生の妙味があります。聖德太子の御敎は和光同塵です。本當に皆と仲よくしてゆくためにはかうでなければならぬ。驚いて火宅の門に入る。自分に欲がなうても欲の中へ入る。凡夫の中には凡夫の相でゆく。皆が飲む、踊る、その氣持に入つてゆく。そして一人づつ自分のゆかにやならん道を皆に說く。それでよいでないか。その大きな世界を聖德太子の憲法の十條目で敎へられるのであります。

第八講（上）

聖德太子の『十七條憲法』の第十條まで昨日お話致しました。その第十條の終の方の、「我獨り得たりと雖も衆に從ひて同じく擧へ。」このお言葉について昨日細々お話致しました。少し云ひ殘したことがあるやうで云ひ足しておきます。昨日お話したやうに、我獨り得たりと雖も、自分はこれでよいといふことが自分だけでわかつてをつても、衆に從へ。たくさんの人達がさうでないと云ふ。かういふやうな場合に、その衆の人の意見に從うて同じく擧へ。一緒になつてやれ。かういふことであります。和光同塵といふことは、昔から敎へ傳へられてをります。この言葉は老子の言葉でありますが、佛敎的に廣く味はれて來てをる言葉です。和光とは和の光、同塵とは塵に同ずるです。どうでもして皆と仲よう暮したいといふ心が切なるために、自分の意見を捨て皆と一緒になる。塵の中へでも姿を一つにしてゆく。例へば、自分は世の中の普通の欲といふやうなものを解脫してをつても、皆が宴會をしよう、一緒に歌はう、といふやうな場合には、皆と一緒になつて食べもしよう、歌ひもしよう、その中に一緒になるといふことであります。第一

條に、「和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。」といふこととどうなるか。この言葉は、下の者が上に從ふといふやうにのみ感ぜられますが、この第十條はむしろ上の者が下の者に同ずるといふやうな氣持が現れてをります。第十七條には「大なる事は獨り斷む可からず。」皆で論じ合ひをやれ、一人で決めてはいけないと仰せられるところも同じやうな意味合が封じこめられてあるのであります。この精神をみますと、阿彌陀如來が十方衆生と呼びかけられるあのお心ですな。あのお心が和光同塵のお心であります。日本の古代で云ふならば、八百萬の神、萬民をおほいみたからと云はれるそのお心持であります。

この地球上に人間が生存してをります。地球上に人間が生存してをるについて、賢い者ばかりが生存權があるのではありません。愚な者でもやはり世の中に生れた以上は世の中に生きてをる權利を持つてをります。この地球は人間の住むところといふならば、生れたほどの人間は皆地球上に棲息する權利を持つてをります。所謂この頃の言葉で云へば、生存權があるのです。賢い者と善い人ばかりが生存權があり、愚な者と惡い人とは生存權のないわけはないのであります。だから我々のものの考へ方に、すべてと共に生きるといふことを常に考へてゆかにやならんのであります。自分だけ、或は自分の近しい者だけが自由をして、外の者がそれがために不自由せにやならんといふやうなことはなるべく避けて、一切衆生と共に自らも自由を得、他人にも自由を得させ、共々にといふ心持に進んで行かにやならんのです。明治天皇憲法發布の勅語に「和衷協同」と仰せられ、今上陛下の踐祚式の勅語に「共存共榮」と仰せられてあるのはこの味ひであります。我身勝手なことをせんやうに、人を抑へつけ、搾り取つても、自分だけ或は自分の一族だけが好きなことをしようといふやうな考でなしに、地球上のすべての者が共々に生きるといふ基礎に立つて、ものを考へてゆかにやならぬ。すべてが生られる道、「衆生安樂我安樂、衆生苦惱我苦惱、」衆生の樂しみは我が樂しみである、衆生の苦惱は我が苦惱である。樂しむにも苦しむにも、一切衆生と共に戚めてお出になります阿彌陀佛のお心がそこにあるのであります。印度のガンヂー氏は何でも特別な待遇を受けぬ、衆と共でなければならないと云はれる心持もそれなんです。私の知合の方で、一緒に印度の佛蹟巡拜に行つた人に、仙臺の伊澤平左衞門といふ方があります。この人は宮城縣一番の金持です。この方の家憲には、飲食平等布施差別といふことがあります。飲食平等とは食物だけは平等で、檳那樣も、奥樣も、下男も下女も同じものを食ふ。それがその家の家憲である。着物だとか用ひる調度は別々ださうですが、食物だけは上下解放です。これは目出度いことと思ひます。なるべくは一切衆生と共に生きる、といふことが一番大事なことであり

ます。

そこで世の中のいい人といふのは、なるべくたくさんの人と共に行くことを考へてをる人です。我が身勝手なことを考へてをる人は惡い人となるわけです。その我が身勝手のことを考へる人は、どつちかといふとやはり世の中に生存してをる權利はある。が、その權利をあまり擴張しすぎて、外の者の權利を侵すやうな心たなりますので、その心が自分に移つて人を怨んだり、人から怨まれたりするのです。身勝手な者は葬られてゆく、皆と共にゆく廣い心の人は皆と共に手を引かれてゆく。世の中の所謂爪はじきせられる人は身勝手な人です。しかし、身勝手な人でも一種の力がありますとき、その力で周圍の者を壓迫し、服從せしめて行くのであります。だからさういふ人でも生きてをる間は相當に羽振を利かしてをる。しかしさういふ人は側にをる人から心服されてをるのでない。畏服されてをるのである。その人の側へ行くと、何か利益があるか、と利のために寄つてくるのです。それでその人が死ねば何でもなくなる。さういふ人も世間によくあります。

我々の最も大切にしなければならんのは、衆と共にといふことです。皆と一緒に、何をしても皆と共に出來ることはやる。が勿論機械の發明或は學問をするといふやうな場合は自分一人で一生懸命にやらにやならぬ。だが、自分の衣食住といふやうなことについては、なるべく皆と一緒にといふやうに心掛けることが大切なんです。さうすると、そこに意見といふやうなものが出て來ます。皆と一緒にやつてゆくといふことについて、この方がよい、右がよい、左がよい、といふ考がそこに出て來るのです。考が出て來るとき、甲の人の考と、乙の人の考と、考が違うて來る。さういふ場合にはどうするか。聖德太子はお互に凡夫ぢや、ぢやからさう固い主張は出來ぬ。賢いも愚も耳輪のやうに廻つてをるものだからさう頑張れないと敎へられるのであります。自分がこれでよいと思ふことも、多くの人はそれは惡いとかういうた場合には、その多くの人の意見に從うてやれ、とおつしやるのです。そこから多數決といふことが出て來る所以であると思ふ。從はねばならんときは從ふ。從へない時もあります。それは大事なことです。何でもかんでも皆と一緒にやるといふことは一樣には決められんやうです。

昨日話がすんでから小學校の先生が、同僚が酒飲んだり、騷いだりしてをる、さういふ場合に自分も一緒になつてゆかにやならんか、いやでもその中へ入らんならんか、と聞かれた。そこへゆくと餘程考へにやならぬ。皆と飲んで遊んでをる、その仲間へ入る。かういふやうな場合にどうするか。やはり飲みたくなくても飲まにやならんか。さういふ場合に私は飲みなさるなと云ふ。頭を害する、心を害する。さういふ場合は皆飲んでをつても飲まぬ。しかし、飲むことによつて

外の者をよく導かうといふやうな大きな理想のある場合には、一緒に飲んでもよいのです。ここに「我獨り得たりと雖も衆に從ひて同じく擧へ。」とおつしやるやうなことは、さういふ宴會などのことでない。天下の大事、國の大事、さういふ場合であります。例へばここに橋を架けるとする、架けんでもよい、架けにやならぬ。といふやうな場合に、皆が架けると云うたらば、架けては惡いと思うても架ける方に賛成する。所謂公の場合にです。學校を建てる、かういふ場合に、自分は鐵筋コンクリートにしたいと思ふ。外の者は木造にしたいと云ふ。皆が木造というたら木造に從ふ。かういふ場合です。宴會などの場合は餘程考へにやならぬ。しかしお祭などの場合に皆がよいしよよいしよ騒いできた。よいしよよいしよとゆく。世の中は皆濁つてをる。それは迷信だ、我獨り清めり、かういふやうな離れた考でなしに、皆が濁つてをつたら、その濁の中へ入つて共に住みながら皆を清める。だからここは大變大事なことです。和して同ぜずです。その中へ入つてその塵に染まぬ。入つて入らぬ、入らんで入る。そこに言葉の上に現はされない獨自の悟がある。これはどうしたつて自得するより外ない。

「我獨り得たりと雖も衆に從ひて同じく擧へ。」といふことを云ひますと、あの西郷さんのことを思ひ出します。西郷さんが征韓論で議論が割れて、同志と共に鹿兒島に退隱せられた。そして私學校を創められた。人物が出來にやいかんと思うて天下の人士を養ふために鹿兒島に隱られた。その側に集つてきた勢のよい逸男連が戰爭するやうになつた。その時西郷さんは戰爭するつもりでなかつたが、部下の人達と一緒に戰はれた、といふことであります。そこはやはり西郷さんの大きなところであります。私は初めて鹿兒島へ來た時、西郷さんのしばらく住んでをられた吉井さんの別邸の跡に連れて行つて貰つた。そこへ行つたら西郷さんについてをつた老僕がをられた。その方からいろいろ話を聞きました。誰かその近邊から鹿兒島に來るところにそば屋があつた。そこへ西郷さんが來られて十圓札を出して、そして毎度うちの學校の生徒が來てお世話になるだらうと云うて行かれた。それほどに大きな心である。單に酒を飲みに行くなというて戒めてをる先生と違ふのであります。むろん、西郷さんはさういふところで遊べと奬めてお出になつたのでないが、蔭で若い者のさういふことをすることまでも庇うてをられました。その心持に感じて、若い人が西郷さんのために命を捨てるやうになるのです。西郷さんは一時は國賊の名を負うてをられたが、明治天皇の大御心によつて國賊の名は拭はれたのであります。明治の元勳と云へば西郷隆盛と云ひます。同じ鹿兒島から出られた大久保さんも大きな手柄はあつたかもしれんが、人間としての親しみになると、やはり西郷さんを神樣のやうにお慕ひします。そこに何となく大き

なところがあると思ひます。部下が戰爭をやつた。自分が思うてをられぬことでも、部下の皆と一緒にやられる。皆に自分の身體を打ち渡して行かれるといふところに信があるのであります。これはやはり信の相ですな。

西郷さんは、はじめ、十八の時に江戸に出られた。そして藤田東湖といふ水戸藩の學者を訪ねて行かれた。藤田東湖の奥さんはナイフに羊羹をひよつと突刺して西郷さんに出した。西郷さんは口をばつとあけて受けて食べられた。それから藤田さんの奥さんは西郷さんを非常に信じて、薩摩公に、あなたの國から偉い青年が來ましたと云うて西郷さんを賞められた。それから薩摩公は西郷さんを信ぜられるやうになつた、といふことです。ナイフの先に刺した羊羹を食ふ。隙があれば殺されるのです。武士として油斷である。そこに西郷さんの任し切るといふ大きなところがある。藤田東湖さんに命を投出したのだ。勝海舟さんと江戸城引渡の時は談判がすんでから、皆がいろんな事務をやつてをつたが、西郷さんはぐうぐう寢てをられた。それは勝さんがよくするといふことを信じてをられたからです。西南戰爭のときも、部下の者がよくするといふことを知つてをられた。征韓論に意見が合はにやすつと去る。部下が起つて自分を推せば皆と共に行く、といふところに、そこに信の相がある。だから「我獨り得たりと雖も衆に從ひて同じく舉へ。」といふこの衆に從うて同じく舉ふ、相があります。この衆に從ふといふところには一人の君に從ふといふやうに命がけの相があります。西郷さんは何をやつても、命を投出してをる。羊羹一切食ふにも命を出してをる。江戸城引受のときには勝さんにすべてを任せ切つて命を出してをる、私學校の生徒と一緒にものをすれば命を出す、そこに信がある、この信が皆と和ぐ廣い心ですな。

私は昨日も申しましたやうに、最近この「衆に從ひて同じく舉へ。」といふ言葉によつて非常なお引立を蒙つてをります。なかなか容易なことでありません。むづかしいことです。私共はすつかりこれを實行することは出來ませんが、この心持の尊さをはつきり仰がれるやうにさせて貰うたことを喜んでをります。第十條のお話にこれだけつけ加へておきます。

十一に曰く。功と過とを明察にして賞と罰と必ず當てよ。日者、賞は功に在きてせず、罰は罪に在きてせず。事を執れる羣卿宜しく賞・罰を明にすべし。

十條には何でもかでも打融けてゆくといふことを教へられました。さうすると教を妙に固定して考へるものは、何でも無差別平等といふことに囚へられて、何をしてもよいのだ、善も惡もないのだといふやうに、常規を失ふといふやうなことがあるものだから、すかさず十一條が出て來るのであります。

功と過とを明察にして賞と罰と必ず當てよ。

功勞のあつた者と失敗のあつたものと、それを明かにして、そして功勞のあつたものには賞典を與へ、過のあつたものには罰を當てよ、賞罰を明かにせよ。

日者、賞は功に在きてせず、罰は罪に在きてせず。

この頃は、賞典をやつても功勞があつたからというて功を見て與へるのでない。又罪によつて罰を決めるのでない。賞罰がはつきりしてをらぬ。たしかになつてをらぬ。これはようないことである。

事を執れる羣卿宜しく賞・罰を明にすべし。

天下の事柄に携つてをる者は、執務してをる人達は、官吏達は、宜しく賞と罰とを明かにせよ。賞罰を明かにせよ。「その罪を惡んで、その人を惡まず、」といふ聖人の言葉があります。我々は何をしてもよい、すべてどういふことをしたものでもそれを許して打融けてゆくといふ心があつてほしい。その心は結構な心であります。だからと云うて、世の中のことは無茶苦茶にしてはならない。殊に政治を掌つてをる時には、この一般人のためになるやうな手柄をする人もあるし、又人の妨になるやうなことを爲出來す人もある。さうすると一切のことを見てをると、人の妨をするやうなことをするのはだんだん世の中になくなつて、皆のためになるといふやうなことをする人がだんだん出てくるといふことを望むのであります。所謂いいことは益出て來て、惡いことはなくなるといふことになつて行かにやならぬ。人間はやはり先に立つ者が後の者を見てゆくのです。先に立つていいことをする。いいこととは功です。天下のためになること、人々の仕合せを得るやうなことをする。又、惡いことといふのは、それが害をやつても或は過失をやつても、ともかく人の妨になるやうなことです。その時に兩方同じやうなことになると、後から來る者は選擇に苦しむ。いいことを賞め、惡いことを罰するといふことは、後から來る者に明かしを與へる。うん、こちへ行くと暗がりだ、道が塞つてをる、と氣がつく。惡い方へ行くと道が塞がる、善い方に行くと道が開いてをる。とかういふやうになります。

昔、强盜などは死刑に處せられることになつてをつた。死刑を執行する前に、出て見さつしやいと云うて、犯人を馬に乗せて町を引廻した。それから獄門と云うて路傍に罪人の首を晒した。惡いことをするとかういふ目に遇ふぞ、かうなるぞといふ風に後に來る者の戒にしたものです。支那では今でも衆人の前で馬賊が銃殺されるさうだ。これは後の者の戒といふ意味もあるのださうです。太閤さんが石川五右衛門を釜熬にした。それを皆に見物させた。これも後に來る者の戒